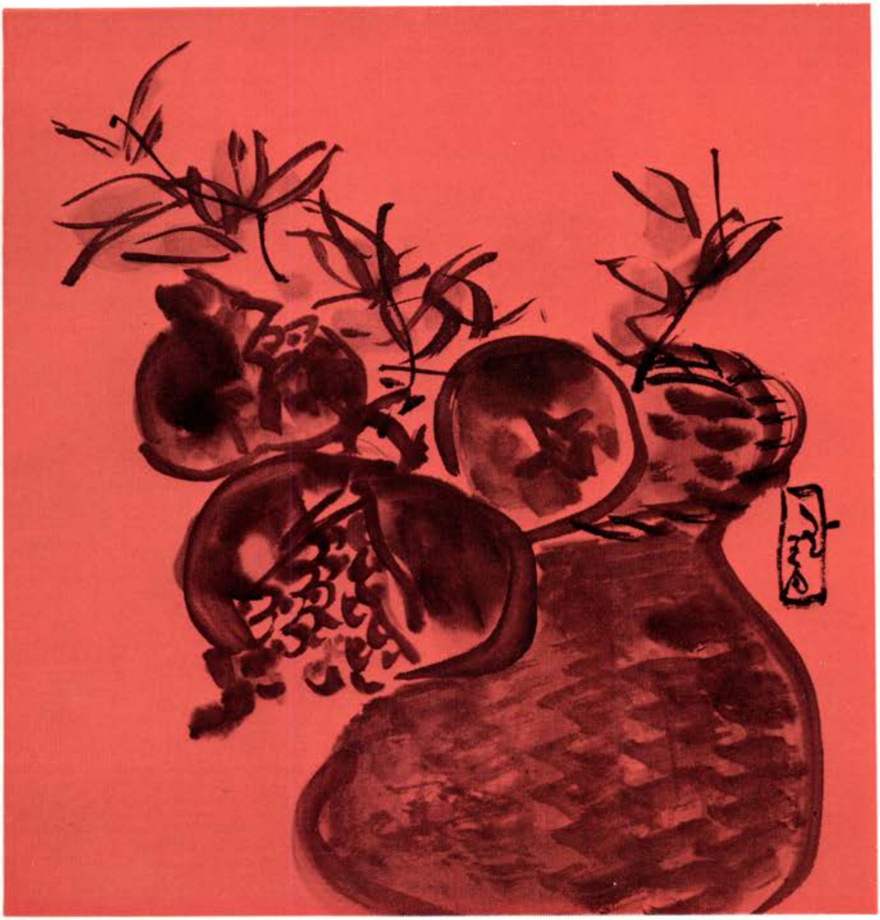
川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十七年九月二十五日印刷
昭和五十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六六五号



日川協加盟

57年度二賞発表・若本多久志追悼号

No. 665

十月号

57年度 二賞発表句会と 同人総会

日時 昭和57年10月3日（日）午後一時開場
会場 阪南荘（地下鉄昭和町下車徒歩3分）
大阪市阿倍野区昭和町二ー二二
電話 06・623・7512

▼同人総会は午後2時〜3時30分
▼司会・西田柳宏子／開会の辞・河内天笑／挨拶・西尾栞
〔議事〕①会計報告・高杉鬼遊 ②事業経過報告・香川酔々 ③役員改選 ④質疑応答／閉会の辞・黒川紫香

▼二賞発表句会 午後5時30分から
おはなし 西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題
「噂」 山内静水選
「サウナ」 野村太茂津選
「逃げる」 阿部柳太選
「影」 橘高薫風選

席題 当日二題 各題三句
会費 五百円

★はじめての会場です。お間違いなきよう。
（会場略図は本誌86Pに掲載）

川柳塔社

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージェフ。

OSK JEFF ®
ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケー

清楚なお別れ／西尾　栞

川柳塔社の大幹部、副理事長若本多久志（真彦）さんが八月十六日急逝された。そして十八日午後一時より葬儀並に告別式が、氏の遺言通り洵に清楚なうちにとり行われた。私は今まで沢山な告別式に参列したが、先に岩崎愛二さんの奥さんの歿くなられた時のお別れに行った時と、この度の多久志さんのお別れの時ほど清楚な告別式に出席したことがない。

当日は丁度朝から涙雨という程の埃り沈めの小雨が降って、一時頃にはすっかり晴上って、式場は多久志さんとお別れするのにふさわしい閑かな雰囲気になっていた。

正念寺さんの門前には親族一同の一対の樒と式場の石段下には、黄菊白菊の大きな丸い玉が一対、これまた親族一同で供花されていて、その他は一茎の供花もない清々しさで、石段の下より正面に遺影を拝されるようになっていた。

御読経の前に、喪主の芳彦氏が石段下のマイクの前に佇立されて一場のご挨拶のあと、亡父の遺言状のお別れの言葉を一言一言嚙みしめるようにして読み上げられた。それは『我々の宗祖、親鸞聖人ご入滅の時「それがし閉眼せば、このむくろを加茂河に入れて魚に与うべし」より始まり、最後に「ご焼香賜りました上は、出棺のお見送り等ご無用に遊ばされてどうぞご帰還の程偏えにお願い申しあげます云々」と大変参列者に対して心を砕かれたお別れの言葉でありました。

弔辞も弔電の披露もなく、代表焼香もなく、お手近な方から順次ご焼香をする、あっさりとしたお別れであった。

又、ご会葬御礼の封筒には、帰真院釈恭成のご戒名で、既に生前より印刷された写真入りの用意周到なもので御叮重な言葉が述べられていた。そしてあとで示寂の日や葬送の日を入れるようになっていた。

自若として死につかれた多久志さんは平素のご信心の深かったことは申すに及ばず、川柳は人間陶冶の詩であるという路郎先生のお言葉を忠実にマスターされたことに外ならないと思う。

謹んでご冥福をお祈り申上げてペンを擱く。

悼

暗然と見上げる遺影夜の秋

訃の受話器とり落したる残暑

多久志逝くはや朝蟬の騒がしき

人の身のはかなき話露の朝

大文字未来永劫忘れめや

座右の句
恋人がいま肉眼に入り来る　（薫風）

私の句
とっくりが転んだように父が寝る　松岡三吉

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

清楚なお別れ……西尾栞…(1)
離島……黒川紫香…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
自選集……(28)
■川柳太平記(53) 窪田而笑子……東野大八…(30)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究（八丁）……(32)
57年度路郎賞・川柳塔賞決る……(34)
水煙抄……黒川紫香選…(38)
秀句鑑賞 同人吟……工藤甲吉…(27)
秀句鑑賞 水煙抄……白岩文衛…(53)
愛染帖……橘高薫風選…(50)
句評リレー（岡田拳法・植山武助・岩田美代・野村太茂津）……(54)

離島

黒川紫香

此処に挙げた三島は名も知られ離島とは言えないかも知れないが、それぞれ個性もあり日本の端に位置するので離島だと思う。

礼文島（レブントウ）

北海道の北端、稚内から船で二時間余、美しい利尻富士を左に見て香深に着く。島に一つしかない町で船の発着の時は賑う。夏しか動かない島内一周バスに乗ると狭い道路をくねりながら走る。東海岸から西海岸にアッと言う間に抜けると海中公園に指定された所へ着いたが施設も何もない。四、五軒の漁民の家がポツンポツンとあるだけだ。

一番北の端がスコトン岬と言って離れた所にトドの住む島がある。その先は樺太だと説明してくれた。岬の中程に一棟の分校があったが児童の声もせず姿も見かけなかった。帰りに訪れた桃岩も花には早く、初夏とは言え寒む寒むとして最北端の島だなあと思った。

八丈島

古くから流人の島と言われ、飛行機だと一時間で翔べるが船だと現在でも十時間はかかる遠い島である。

船が島へ着くと八丈太鼓に迎えられ、島娘と南国の花が待っている。東に三原山、西に

追悼・若本多久志氏を偲ぶ……（60）
生々庵・いさむ・好郎・茶仏・静馬・柳宏子・千世子・勝晴
新造語について……直原七面山…（74）
第六回全日本川柳大会参加と十日の旅㈢……西尾　栞…（58）
アメリカを覗く(1)……山本規不風…（66）
「少　女」……栗林光夫選…（68）
一路集「屑　」……崎山美子選…（68）
「立　つ」……水野　弘選…（69）
初歩教室……本田恵二朗…（70）
柳界展望……（72）
本社九月句会……（75）
各地柳壇（佳句地10選／河原みのる選）……（79）
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好…（87）

座右の句

耐えぬいた涙は皺の奥にある　（緑之助）

私の句

母病んで娘が折る鶴はいつとべる　吉岡きみえ

八丈富士があって伊豆諸島随一の高さと美しさを見せている。流人の島と言う暗いイメージは全くなく明るくて美しい最果ての島で日本のハワイとも言われている。

鎮西八郎為朝や浮田秀家に代表される流人の伝説と遺跡が各所にあり、黄八丈、闘牛、そして花、島内を一周するバスの美しいガイドが案内してくれる。夜には宿で往路の船に寄り添うようにして翔んでいたトビ魚が焼かれて膳についていた。

帰りの船は途中で小台風に出逢い一時は荒れる黒潮の中でエンジンを止め、放浪するハプニングもあったが二十数時間もかかって東京へ戻り着いた。八丈島は遠い島だった。

西表島（イリオモテジマ）

イリオモテヤマネコが発見されて一躍有名になった西表島は、他に与那国島と言う小さな島があるが沖縄本島に次ぐ大きさで日本の西南端に位置する。

石垣島から船で一時間、港に着くと車に迎えられて島内に入る。水牛がのんびりと草を食んでいる間を抜けるともう山だ。全島が山だと言われる西表島はガジマル、ノヤシそれに浦内川を遡るとマングローブが自生していて原生林が川を覆って来る。

海岸には竹富島同様、星の砂を拾える浜があり岬の突端には太陽の村が作られていた。自然の中に現代的な美しさを見せている。この食堂で食べた昼食は本当に美味かった。

川柳塔

西尾栞選

和歌山市　西山幸

食べ疲れ喋り疲れて孤独なり
優柔不断どちらにも向くまわり椅子
立秋のひと恋しさの雑記帖
鏡の中の素顔だんだん寒くなる
車間距離あけて聞いてる敵の唄
生きてゆく二本の箸の重さかな

八尾市　高杉鬼遊

大文字塔から消えし仏たち
またしても一人を殺す電話ベル
残暑厳しい黒ネクタイを買いにゆく
いわし雲おんなにいくつ恋の傷
不器用な妻の指なり鮎の骨
わが家にも一枚ねむる五百円

松原市　谷垣史好

廿一世紀をちょっとのぞいて死にたいな
五十過ぎて中途半端な預金帳
人類が滅ぶはなしを児から聞く
月の夜妹は涕くネフローゼ
なめんなよ腹に晒を巻いている
空は秋名残りの白い靴をはく

兵庫県　遠山可住

足音は他人ばかりで街が暮れ
雨を待つ陽を待つみんな生きている
マジックの箱を蔵った母の胸
不良少年でした老人会会長
妻の目から見ればとっくに趣味を越し
老眼鏡かけたら8が3になり

東大阪市　市場没食子

巨星落つあれで僕より若かった
三行のドラマに賭ける尋ね人
旧弊な頭で嫁を手古ずらせ

希望退職先の先まで読んだうえ
平均寿命とうに越してるチロリ党
長患いポックリさんへつい小言

岸和田市　高橋操子

薄情な世を薄情にするローン
妻の振るタクトを笑う腹の虫
住所録もうける事に使われる
許せない夫で仕事身につける
ほんとうの笑顔だ妥協出来た父母
それぞれに遺産これだけ使いましょう

米子市　八木千代

汗ひとつないマネキンのサンドレス
もうそろそろ許したい気の天の川
香水で角度も変えてみたい恋
祭りから覚めようとせぬ神楽面
表札の亡父を砦として構え
牙欠けたこと隠せない鬼でいる

米子市　林瑞枝

厚かましゅう生きようか朝のジョギング
子猫ぞろぞろ空家は遠雷まだやまず
久し振りの出逢い生活を皺に見せ
男は悟空所詮私の手の平に
泥沼を這い出た美とは見えぬ蓮華
蚊のミイラ夜のページに横たわり

倉敷市　小野克枝

砂糖塩満たして妻は入院す
信頼の医師に一番いい笑顔
この際に夫と娘の有難味
自惚れの鏡になぐさめられて女
蟻の列心身症は見当らぬ
幸せの数が不幸の数を抜く

大阪市　川口弘生

馴染客犬へも土産買って来る
スポンサーの名のみ残して花火散る
蛍光灯の下で色よい返事出ぬ
去る者の一人へ虚無がついて来る
退院の患者は愚痴もおいてゆき
姪よりも後で生れた伯母不満

和歌山市　松原寿子

夢本線に乗ってあなたに逢いにゆこ
情熱の愛なると見る太陽よ
まな裏であなたへ続く滑走路
寄り添うも濡れるも雨は芸術で
真実はひとつ透明な昏に
コンパクトへ触れた小指が熱れてくる

堺市　高橋千万子

傷あとにふれる八月の風が吹く
子の帰省特効薬のように効く
ころころと小石も坐る場を選ぶ
恋捨てて主婦本来の日に戻り

灯を消せば自分の匂いだけ残る
ざわめきもなんの静かな情死体

倉敷市　野田素身郎

家族旅行親父たるものみな疲れ
夏痩せがなかなか戻らない残暑
列車遅延いよいよつのる恋心
電灯が無駄だと思う通過駅
信号むなしく点滅深夜の交差点
梅雨明けの月がきれいな終電車

富田林市　岩田美代

思い出とともに土橋が朽ちていた
肯定も否定もせずに卑怯なコーヒ
まだ熱い涙が出るので安堵する
すてきなプライバシーだから覗かせる
喜ばす言葉に香水ふりかける
慎重な男の釣り竿長すぎる

伊丹市　樫谷寿馬

オモチャ屋で親の弱点買わされる
枝豆が酒徒列伝を論じ合う
仏にもきっと惑いはあるお盆
つきだなどと軽く言うまい甲子園
紙函の酒うす情けしか持たぬ
シャム猫を膝に家族制度を考える
クーラーのせいか頭が鈍くなり

奈良県　香川酔々

凡人も楽し夏には冷やっこ
噂など決して口にはせぬ天使
直感があたりましたぞ三りんぼう
埋火に恋の火種を残しとく
冷房が効きすぎ狆がくしゃみする

島根県　堀江正朗

分ろうとすれば手さぐり力み過ぎ
聞えないことにしておくその話
幸せを耳いっぱいに運ぶ風
偉そうに腕組みしても妻の留守
案山子には目があり雀の番をする
愚痴こぼすかわりに妻はしげさ節

島根県　堀江芳子

秋立って好きな和服の躾解く
夫と腕組む老いらくの恋に似て
遠い子を月のまるさの中に描き
大丈夫かいと真顔で聞いてくれ
夫の手を引ける幸あり生きる欲
約束は誰より固い孫の指

八尾市　飯田悦郎

市場籠目玉商品攻めてくる
握手した指のすき間を洩れる嘘
マイナスを踏み台にして背伸びする
健康美少年太陽の匂いする
要注意そんな思いで恋に落ち

八尾市　高橋夕花

平凡な暮しで犬もそれなりに
同病相痛む恩師がすこし近くなる
大文字去りゆく人も来る人も
感情線くっきり妻です女です
花の種こぼれて明日がみつからず
樹の下の蟻もやっぱり列を組む
わが余生かくでありたい萩の花

大阪市　江城修史

過去現在未来に生きる亡父の主義
主義ひとつ亡父が遺した道しるべ
偏見に妥協した日の手の汚れ
今日生きた汗が暮しをふりかえる
雑踏を歩き孤独を持ち帰り
飲めるなら酔うてもみたい日の孤愁

桜井市　岩本雀踊子

日めくりが秋になっている残暑
花言葉少女が女になりたがる
戻れない過去持ってる水だまり
釘を打つ音の弱さも女戸主
駄馬になる父の大きなめし茶碗

大阪市　中川滋雀

空想の枠を夫婦で塗りつぶし
どんぐりの背比べそれでいいんです
曼珠沙華亡母の記憶が炎えてくる

米子市　小西雄々

腹立てたときが素顔かも知れず
かかわりが欲しくてタバコの火を借りる
たどりつく平均寿命へ一思案
頂点に登って気付く四面楚歌
窓ぎわの椅子で個性の明日を抱く
水に浮く氷ゆっくりしておれず
表札へ女世帯と見せぬ知恵

宝塚市　傍島静馬

筆不精返事書くのに小半日
おどす気の孫もいっしょに飛び上り
子が出来て気軽に雑用言いつける
長生きはしたし安楽死はしたし
労られうるさがられて老いすすむ

八尾市　大路美幸

病院の天井を父は信じ切る
ライバルを言わず父の汗終る
ほんとうは自然に還る北枕
人間と仏のまん中にある安心
灯を消すとかすかに父の子守唄

出雲市　原独仙

風鈴が沈黙台風遠ざかり
うちの夫規格品です平和です
ネクタイを結んで上げてキス貰い
職退いていても護身の癖が出る

竹原市　小島蘭幸

社長唄う義理の拍手の多いこと
おはぐろとんぼひらひら川で顔洗う
バイトなどさせぬ最後の夏休み
嫁くと決めた日からも遠いなと思う
いつまでも蒼いままではない少女
ヒヒヒヒヒ男らまむし酒を呑む

竹原市　森井菁居

花活ける長女へふっと安らぎぬ
ハードスケジュールが好きな父の貨車
総本家盆の休みがままならぬ
青春に恋して少女のペン習字
義理くるむその風呂敷が見つからず

松原市　玉置重人

水見舞ともだちがいるありがたさ
幸せなことに健康忘れとり
五つ珠暖簾の奥にある安堵
墓地買うて草抜きに行く日曜日
ローンいと軽し建売りのコマーシャル

松江市　恒松叮紅

仏壇を飾り小さな安堵感
水害のない街に住み冷やっこ
市場籠ショートパンツの夫婦連れ
ネクタイも外し無職の道に慣れ
疎くなる村に残ったわらべ唄

松江市　舟木与根一

恋一歩進んだ宵の遠花火
耳たぶは正直者さ真っ赤っか
天寿というぽっくり病を羨みぬ
振り袖を着せられ歩幅に疲れてる
おみくじを引き直して笑いとばし

松江市　小林孤呂二

切り捨てにされた日の酒あたためず
父の夏オンザロックの日がつづく
にんげんは平等弱者がもつ台詞
ポンポンダリヤ少女の愁いに似て屈む
他人行儀は見えず月の座にすわり

松江市　柳楽鶴丸

下手なト音記号を妻へ書き続け
何時迄でもエナンチオーマーのままいたい
桐下駄を覚えておった足の裏
ジャンケンポン何時も妻はパーを出し
ではございませんワンパク亭主です

倉吉市　奥谷弘朗

大の字に寝れる倖せある我が家
逝った娘が帰って来る気の盆迎え
短気とはうらはら父のスローモー
負けぬ気の妻はひと言多すぎる
ひょっとした出会い人生狂い出し

柳井市　弘津柳慶

寝酒でも飲んで面影抱くとする
震度四新幹線にとじ込める
待っていた雨が被害を持って来る
同窓会昔ながらのオッチョコチョイ
蛙の声途絶え途絶えて水不足

鳥取市　小林由多香

帰省子の目へふるさとが都会めき
落ちこぼれ救うスピードやわらげる
訃報まだ信じられない駅にたつ
漁火へ父の灯りを確かめる
母がわり妹先に嫁がせる

鳥取県　鈴木村颯子

使ってるうちにわたしの鍬になり
勝手口男の通るとこでなし
少女もう女は酒を酌ぐものに
時計までざまあみろいと止ってる
湯上りの極楽感へ妻がない

大田市　藤田軒太楼

ボケて来る筈だよ苦労かけた老妻
生い立ちを語る按摩と旅の宿
年かいなテレビドラマに泣かされる
追伸に寡黙な父の愛を知る
いまここで折れては世間の物笑い

今治市　越智一水

打ち明けに来れば浜辺は荒れている
女まだベッドに残して窓を開け
蒸発が詫びに帰った盆踊り
燃えて来る恋へ理性が邪魔になり
お隣も子を叱ってる夏休み

島根県　西村早苗

別れ話バックの夜景美しい
手を握るまでには遠いわだかまり
ヘッドライト避ける二人のあいだから
照明に浮くウインドの柄は秋
定退へチョコチョコ相談もち込まれ

倉敷市　藤井春日

尼僧ふと浮世の風が欲しくなり
砂漠にも水あり希み捨てまいぞ
今日からは泣くも笑うも二人連れ
少女もう自分の秘密を持っている
娘にすれば夏痩せもよろこびの一つです

平田市　久家代仕男

朝露を踏む楽しさに有る出逢い
帰ろうを頻発脳軟化の哀れ
老い先は長し短かし今日の無事
もう寝ようとりこし苦労なぞすまじ
稲の花稲はさやかな風が好き

美祢市　安平次弘道

旗色を適度にぼかす処世術
拝観料信仰心が薄くなる

ロボットに追われて消える労働歌
使命感肩に力が入りすぎ
恋一途女おそれぬだまし船

香川県　岡田拳法

下もアホやから各論吠え立てる
審議拒否歳費は遠慮せずに取り
平和日本商工農士の順となり
米価上げ勝たねばならぬ選挙です
ホンモノの農家は国を当にせず

堺　市　藤井一二三

反核の輪をほそい手でつなぎ合う
赤潮にまた島捨てる船が出る
天神祭浪華の汗を拭いてみる
蟬しぐれ限りある身を鳴き明かす
幸うすき落ち穂の意地は上を向く

大阪市　小出智子

美しい錯覚のまま秋になる
筆を買う少し不遜な思いして
絶対の答を妻がもっている
秋はまためぐるわたしの机にも
死ぬ日まできっと愚かなままだろう

大阪市　西森花村

延着や素通り列車も芸をする
安いなとほめてあっさり客は去に
人間のひよ子は鳩にあしらわれ
コスモスはレールの裏の見える場所
秋晴れや赤いドレスの葉鶏頭

藤井寺市　児島与呂志

隠しごと無い日々やっと夫婦かも
聞き役になれる幸せ持て余し
逆えば噂がほんまになって来る
だれ彼と名ざしはすまい日々がある
正直な男でせわしく酌ぎ廻り

京都市　都倉求芽

絵心は無うても瞼の裏の画布に画く
香水とすれ違うてからふり返り
ロボットも税取り立てにゃ引き合わず
母八十まだ化粧品を選り好み

冷　夏

蟬やっと団体で鳴く盆近く

岡山県　白岩文衛

すじの通った話だが話だが
六十のシグナルまだまだ青である
晴耕雨読雨の晴れ間は樋直す
汗知らぬ手の札束に踊らされ
日本中色気ちがいか週刊誌

岡山県　嘉数兆代賀

泣かされた涙が出発点となる
馬鹿になり切れぬ日あの日の貨車がいく
風上におけぬおとこののど仏

句読点打って人生狂わされ
引き金はいつでも引ける位置にある
島根県　小砂白汀

曼珠沙華ある日突然旗を振る
忙しくなると地ことばついこぼれ
唄わねば泣きたくなるからオルゴール
あてもなくある日どんぐり飛び降りる
ダイヤより貴重な健歯抜けにけり
寝屋川市　江口度

チャンスの度に石橋をたたきすぎ
形見身につけて亡父を追い越せず
八月十五日短いもんぺ闊歩する
理屈屋もりくつ忘れた感歎符
トイレまで追っかけてくる妻の愚痴
和歌山市　若宮武雄

永らえて汚れてならぬ蓮の露
義理だけの悔みすらすらすぎました
この時の莫迦になれないあかんたれ
すててこで飲んでごろ寝という無上
ネジ捲けば踊るおもちゃに成りきれず
諫早市　原田明春

たよりないがかけがえのない女房
横顔が似て想い出させる過去の人
何くわぬ顔でアベック右左
着替えても蝿は魚屋と知っており

観光の帰りのバスは皆眠り
神戸市　中村ゆきを

金のこと老眼鏡をかけなおし
こだわりを捨てると先が見えてきた
もうあかん社長印鑑もって逃げ
寂しさは隣の犬にも声をかけ
妻と娘の知恵はすこうし非人情
倉敷市　稲田豊作

五百羅漢博奕打ちたい顔も居る
老いの日々小さな円を描きつづけ
父は日銭で息子は週休二日制
用心の果ては臆病風に会い
福相な顔で質札いつも持ち
吹田市　藤村〆女

旅枕遠く潮騒聞く残暑
煩悩の罪たちきりたい写経
合掌する罪が少しは消えそうで
うなじ見せて月夜菩薩になりました
鈴の音は母のやさしい響もつ
奈良市　森田カズエ

茶は石州剣は柳生という大和
合格を祈る絵馬には嘘がない
想像にまかす陰気な物語り
辞書をくる明日あることを信じつつ
職人の手型を鑿は忘れない

大阪市　天正千梢

プログラム神はきっちり握ってる
たまゆらの心のうねり見のがさず
倉三つ持って功徳もよう積まず
ペンで刺してかえり血をあびている
無理難題ふりかけられてまだ貢ぎ

富田林市　板尾岳人

山男義父逝く（五句）
名も知らぬ山へひとりでなぜ急ぐ
極楽の山に仲間がひとり増え
七月の尾瀬振り返えり振り返えり
いそいそと喪服を忘れ山へ逝く
神様に勝る人生全うす

富田林市　和田維久子

槿花一朝の夢へ生き抜くすばらしさ
おごり抜く生活孫の好き嫌い
草むしりさせない親のひとりごと
無い袖を振ってとりもち桶知らぬ
お百度の石へ身内の恙なし

八尾市　宮西弥生

キャンバスの碧は怒りなどしない
一杯のジョッキで男と輪をつくる
流れつく末はやっぱり男のいてる町
秒針を止めたら長生き出来そうで
八月の花屋祈りから明ける

大阪市　津守柳伸

ひとり身の陰口受けるのもひとり
迎え火も送り火もなく盆がゆく
明日開く朝顔にある下準備
雷も人を選ってるゴルフ場
追いかける用事に夜をさらわれる

堺市　大道美乙女

昼下りリズム狂わす不意の客
デマをまく唇うすくよく動く
遠花火抱いたおんなの数え唄
水槽の金魚も老いの友となり
仲人の知恵で解いてるもつれ糸

和歌山市　浦野和子

内堀に女のいくさ埋めてある
暗転の舞台にトリック隠される
裂帛の鼓へ動じぬ女面
太閤の栄華やここに薪能
適当に距離を保った仲の良さ

和歌山市　福本英子

母にもなれず女にもなりきれず
もう誰も踊ってくれぬ母の笛
妻と母女が焦る鏡かけ
芋のつる活けて八月十五日
溜息を一つ残して出る画廊

和歌山市　垂井千寿子

ときどきは夫を忘れている女
誘蛾灯が人恋うている無人駅
夏風邪で掛軸の滝から涼もらう
空梅雨へ桃も蜜柑も主張あり
甲子園終れば秋風秋の雲

和歌山市　内芝　登志代

よく冷えた麦茶は温い母ごころ
生きがいは太鼓の音へ疾る足
ひと言で溶けて美味しい膳囲む
危なげな花へ少年触れたがり
吉日の駅で恋人欲しくなり

大阪市　本間　満津子

あるときは胸に応えるハンディ持ち
はばかりで何のためにとフト思い
老い呆けの種幾粒か持っていて
真実は一つ諦めてはならぬ
句を作りばあちゃんお留守番が好き

米子市　政岡　日枝子

明日に履く靴磨かねば落伍する
表札の無言が重く家語る
ビールなら姑も話題に溶けこめる
久し振り握った手から苦労読む
久方の友へ一線引く落ち目

米子市　菅井　とも子

栓抜けばビールの愚痴がほとばしる
種風船吸って青空虹を呼び
泣き止んだ児の玉の汗ふいてやり
糸電話孫との対話たしかめる
永らえて沈む僚船夢にみる

米子市　桑原　伊都

うるさかったピアノも徐々に曲となり
ポスターの美人に観光誘われる
一歩ずつ登る高さの風に会い
香水へ同居の老いも楽しませ
午前様の夫へそなえて昼寝する

米子市　雑賀　美世

完走の汗さわやかな風に会う
いつの間に葛大木を這い登り
表札とイメージ違う顔が住み
大空へ翔ぶ日待ってる千羽鶴
裏口も開けて私学が立直り

米子市　青戸　田鶴

目標へ休む間もない蟻の列
旅終るやっと青空見えてくる
巣立たせても女に枷がふえ続く
七夕の郷愁胸の笹も鳴る
ささやかなしあわせ夫へビールつぐ

米子市　野坂　なみ

新築の音もはずんで梅雨乾く
出産ですんなり同居の灯がともり

香水が届きおしゃれを勧められ
恋重ね五十鈴の芸が艶を増し
積荷棄て船は嵐に身を任せ

大阪市　那須鎮彦

朝めしをゆっくり食った盆休み
多感な女でとてもよく笑う
自信過剰になるまい驢馬は驢馬である
平凡に夕陽が落ちてうまい飯
凭れるのが好きで隅っこに座る

鳥取県　林　露杖

鉦叩き心を敲き盆供養
短命を識るや朝顔色褪る
蔑みの色がうごいた眼が外れる
煩悩にコントロールが利くも年齢
滾るもの蠢くものもない眠り

西宮市　杉浦婦美子

着飾っても心の飢えは鎮まらず
経験が言葉の端にでる自信
目安箱あけねばならぬ子の育ち
夫唱婦随倖せだった影も老い
舶来品も置くことにした三代目

竹原市　時広一路

不本意な面も買わねば生きられぬ
贅沢な疲れ旅から持ち帰り
喜劇にも悲劇にもなる分れ道

一日で散っても明日の花が待つ
影さえも踏みつけさせぬ距離にいる

守口市　羽原静歩

岡村久志良先生に贈る（二句）
手をつなぎ鷲羽の山に遊ばんか
南風よ吹けこの人の背に
守口市民会館にて（一句）
瞬きもせずマザー・テレサの世界
夾竹桃昨日の私が生きている
みつ豆の視野女が過去を喋り出し

奈良県　村上春巳

辻地蔵もったいなくも水害地
お位牌を抱いて豪雨の中を駈け
花の名を聞いて買うたをもう忘れ
ガリバーになって子供と遊びたい
伝言板恋のくずれる音がする

兵庫県　辻　文平

老いらくの恋をポストに笑われる
赤鉛筆捨ててコーヒー濃い目に
針箱へ隠す軽い罪の数
灰皿の嵩が妥協を強いてくる
泣くことの魅力を知ってから強し

松山市　谷　真風

父の日を息子の嫁が知っていた
遺言を書いておこかと思うだけ

長くてもよい眉散髪屋に剪まれ
考えてみれば払えぬ借りがあり
何かいいことありそうな顎を撫で

京都市　山本　規不風

機乗する耳へとび込む事故ニュース
変更線無理に寝かされ起こされる
哲学の道で散る恋実る恋
好物の夜食を置いて妻消える
すぐ眠る癖を年齢利用する

島根県　錦織　文子

躓きを心の糧として歩ゆまんか
夕立へすだれを上げた風に逢う
大空の画布塗りつぶす大花火
原爆忌新たな怒り老いて尚
エレベーターの中で独りを支えおり

寝屋川市　稲葉　冬葉

絵はがきに幸せこぼれそうな文字
阪神の勝負で飲んでいる私
打ち水に三輪そうめんと祖母の味
愚痴を飲む夫婦湯呑が疲れてる
サングラスの熱い眼射しから逃げる

貝塚市　行天　千代

一人暮し女五十路の紅を引く
気疲れを明日に残さぬビヤガーデン
減量のおかげ服はだぶついて

知りながらはじめて聞いた顔をする
水不足へ家流す程雨が降り

生駒市　草深　酔升

よその子を呼んで来てまで泥をこね
好きな本読んでるうちは咳も出ず
ゴキブリも脚に跳びつく慌てよう
縄張りにこだわり過ぎて鮎釣られ
居ながらにして津津浦浦の旬のもの

岸和田市　狭間　希久志

さよならを何度言ったか酔っぱらい
風鈴をこよなく愛す妻の夏
階段を踏み外す齢妻の老い
熱い夜がようやく明ける水枕
テーブルを挟んでさらし首を置く

神戸市　仲　どんたく

広重の絵となり車軸の雨の中
同胞の血の染む島のトップレス
紛争の遺産を置いて灰となり
夏ありて西瓜にはもに冷奴
婦唱夫随牛に曳かれてなどと言い

神戸市　山口　美穂

人思うことも悲しい紅あざみ
闘病の長さ上手にのむ薬
さかろうてみても前世からある運命
戦中派カーキー色に持つ嫌悪

人を恋う己の馬鹿を己知る
エレベーター一人で乗るとふと不安　東大阪市　竹中綾珠
8月3日朝台風10号余波
おろおろと水嵩増すを眺め居り
一日でしぼむ芙蓉の咲きつづけ
蟬しぐれ高校野球に目を取られ
甘辛の亡夫の墓前へ酒饅頭

投げたのが一番たまげている波紋　宇部市　平田実男
道真が絵馬の勝手へ苦笑い
スカウトを意識してから打たれ出し
淋しさは老眼鏡を買い替える
癌と言う言葉が聞かれぬ癌患者　岸和田市　福浦勝晴
八月十五日回顧（二句）
油蟬悲しからずや敗けた国
敗戦を終戦日本得手勝手
豊葦原瑞穂ノ国の米でごて
妻病みて咳もうつろに昼の月
集金に来ると〃出てます〃集金に　島根県　榊原秀子
温情に泣き屈辱に耐えんとす
あじさいがも一度夢を描けという
きかせねばいいのに口止めして聞かせ

使い慣れは櫛折れ過去を断ち切らせ
梅を干す匂いの中に亡母在ます　島根県　松本文子
ねばならぬ男は靴をはきかえる
この道はいつか来た道墓地へ行く
駄馬今日も酒一本で眠らされ
地球という星がきらいになった訳
子の背丈地球がせまくなる筈だ　岸和田市　植山武助
東北方面へ（二句）
顔みどりに染まって奥入瀬通り抜け
ホテルにも民謡流れているねぶた
初盆へ母は極楽から来そう
お世辞からぼつぼつ攻めて来る保険
御長寿にあやかる酒は下戸も受け　和歌山市　杉田周穂
玄関に打水会社危機の日も
働いてくれとは亭主口にせず
働ける場所と母なる海埋める
粗供養の袋でゴキブリつかみ取る
ゴキブリに夫婦笑いを取り戻す　岸和田市　福島せつ子
身に覚えある相談に乗ってあげ
茄子漬けの色も鮮か年の功
居眠りを覚ましてくれた急停車

年金の許す範囲で趣味に生き
うなぎ屋が握ればまるで死んだよう

吹田市　西川景子

流れ星ストロー二本ちょっと揉め
結婚か仕事か女せまられる
このドラマ私がモデルじゃないかしら
浄玻璃の鏡に写る恋やせん
疑えば夫婦茶碗が欠け出した

仙台市　川村映輝

善人の嘘は冷汗からばれる
笑うことが損したような顔に会い
日曜日無職もやっぱり日曜日
安楽死許されないから無理心中
明治会同じ世代で意気高し

大阪市　神夏磯道子

犬がいるから話題を反らすこと出来る
あんまりに素直に折れて腹が立ち
蒸発のテレビへ夫婦気が揃い
病い持つ夫へ点が甘くなる
別の道もう諦めた坂越えて

倉敷市　小幡里風

思い出し笑いは母の宝です
青春の思い出青い実を噛じる
思い出の小径ひとりで歩きたい
八月の脚にしました網タイツ

炎天へ小便小僧の水も涸れ
それとなく様子さぐりに母が来る

松江市　梅本登美也

行革をふっとさえぎる雲が出る
目に見えぬ糸で運命たぐられる
べからずの掟を破るけしの花
どこからか蟻が集るトンボの死

鳥取市　森田熊生

帰省ラッシュと各停ですれ違い
引き受けたことにされてるとも知らず
馬鹿笑いしても腹案立てておく
潮どきを考えている話し方
人間の丸みが出来ためがねふく

羽曳野市　佐野白水

路郎忌の句会へ蝿がつきまとい
冷蔵庫の中みな出して妻の留守
冷蔵庫の麦茶が老いの口に合い
本当に石投げるまで猫悠々
倒産と繁栄繰返している系図

出雲市　石倉芙佐子

哀しみを沈める海はきっとある
やがて終る女の祭りだ灯を翳す
風上の男がひとり膝を抱く
二重丸つけて渡そう夫の勲章
これしきのお金で買えぬ虚栄心

出雲市　板垣夢酔

口で言うほどに困っていない顔
手加減をやはり他人かと養父嘆く
まっすぐな男曲げるともろく折れ
蟹が蟹はさめば痛いというか知ら
竹やぶを抜けると影がまたまとう

出雲市　園山多賀子

共感にうなずく姑の歩み寄り
口説かれて雨になれない雲であり
夢のない女が紙幣の皺伸ばす
白いなり軍手の父にない叙勲
一人娘の女となる日豆を炊く

東大阪市　斉藤三十四

遺伝だよ孫の背丈あきらめる
円満な夫婦で顔まで似てきたよ
酒飲まぬ男の出世いぶかしむ
口だけの同情なら惜しまない
群衆の真心献血車へ誘う

名古屋市　大林曲ん手

七転び八起きいのちは足りるのか
流れてる川で汚れた手を洗う
裏方の妻が忘れぬ薄化粧
二を三で返す女の律義過ぎ
朽ちるまで働くわたしと水車

富田林市　中村優

続編でない太陽の白い道
蜘蛛の忍耐枯葉が一枚ぶら下り
ナツメロを唄えば回る走馬燈
借景のポーズへカメラが駈け回り
大になり小になりプリズムの金魚鉢

姫路市　大原葉香

何もかも許し安堵の日が沈む
良心があるから政治家にはなれぬ
白足袋の確かな歩幅お家元
缶コーヒーせめて冷たさ買うて飲み
強盗殺人今日もニュースに事欠かず

海南市　牛尾緑良

始発駅ここはドラマを温める
受け取る手渡す手胸にある本音
頂点を目指す女のスキャンダル
閑居して孝子出づるを待つ落ち目
ネクタイを結べば浮気終りです

唐津市　浜本義美

日蓮の霊跡を訪ねて（三句）
風林火山馳せたとこらし甲州路
学僧の坊の給仕が清々し
暁の読経に合わす二八七
地の乳房吸うて草木も人も生き
水害が無かったような蟬の声

和歌山県　天満三千代

指先はまだ衰えず五つ玉
なるように成るさ今日生きるを感謝する
あれこれと悪い事だけ知りすぎる
空腹を堪えた日本に余剰米
戒名の父母が手帳に住む重さ

東大阪市　奥山弥山人

別れ路名残りが続く立話
踊りの輪馴染のふえる里帰り
家中がからみ合ってる洗濯機
実行へは遙か余談に花が咲き
エリートの定義へ父の青写真

橿原市　岩井本蔭棒

貸し借りのもつれ竹馬の仲も裂き
夏の夜僕にも少しある痴漢
外野もう追うのを止めたホームラン
家中の苦情はみんなママにゆき
国憂う語気甘党のものでなし

倉吉市　渡辺菩句

ピカソの画逆さまに見る日の乱心
いつも燈台はナルシスの貌でいる
俺だけか花嫁掠奪の夢
あの星は自分勝手によく光り
僕の射手座銀河のさかな狙います

大阪市　西出楓楽

風鈴が訳してくれる風の私語
愚痴を飲むビールのホップ利きすぎる
六感が冴えて幸せ薄い女
世故にたけ加減乗除が得意です
受け易い球ばかり子に投げている

大阪市　鍛原千里

ほおずきが鳴らせぬ少女の片想い
泣きに行く海も悲しい過去を持つ
紫陽花の花占いはせぬことだ
妻の座ぬくめて蜜を貯めている
仇花を咲かせぬ茄子にある誤算

大阪市　山根いつを

仏法も耳が居眠るせみしぐれ
忘れ得ず母に貰った人の道
一銭もない口ぐせの妻が蓄め
少女また母を援ける夢を見る
踏まれてもタンポポ笑う日をすてず

大阪市　村上田鶴子

諍って夫を斜めから見てる
茄子の花人恋いたると思うべし
本心は何も書かない日記帖
絆が疼く今送り火を焚いている
逢うている最中に想う潮の果て

西宮市　林はつ絵

風邪の子へ亡母につながる粥を炊く
放れ馬へ無理に定義の検問所

海わたる風おじさんも松も老い
五百羅漢の一体憶い喪の続く
立飲みのコップは時計ばかり見る

浜田市　中川幸一

照り降りに愚痴こぼされて梅雨上る
年金のお蔭気楽に呆けられる
表現の不自由もあり四畳半
シーズンに客一人待つ無人駅
気の付いた多い釣銭貰ろてくる

下関市　国弘半休門

天高くハングライダーしてみたい
不足なく育って耐久力がない
改造論山が崩れる通行止め
飯食うと福禄寿で眠りこけ

京都市　松川杜的

年齢かいな転んだ夢もちょくちょく見
迷い道こんな処にお地蔵さん
年齢かいなこれしきのドラマに出る涙
蟬しぐれ座禅でも組んでみようかな

大阪市　西川善紫

心臓の高鳴りを聞くあばら骨
そうとも知らず女は皆喋り
ああ焦れったい買うた株いつ上る
五風十雨の我が老後が蹴躓き

鳥取県　清水一保

胃を責めた後にさびしい残り酒
もう落ちる城です恋の堀埋まる
亡き柳友を偲びて
人生の詩を草葉の陰で聞き
人間は勝手なものよと無人駅

兵庫県　河原みのる

北の四島歴史に何んと書きましょう
漢字ではどうせ太刀打ち出来ぬ国
行革へ白す第一役人多過ぎる
紫陽花の天変告げる色と型

岡山県　直原七面山

美しい言葉で罠が仕掛けられ
見舞客すっかり減った年の暮
つけ黒子今日は左の頰につけ
冗談を言いつつ乗った手術台

枚方市　水野弘

考える人見て考えるロダン展
人生は一局の将棋というドラマ
王将が唄う王将聴く優雅
想い出は遅々たり冬の流れ雲

和泉市　西岡洛酔

宇宙への旅嘘のよう月冴える
血圧が少し下がった酒にする
ほとばしる汗へ明日の糧稼ぐ
耳鳴りの夜陰初老へ仲間入り

笠岡市　松本忠三

棚経へ白い鼻緒の下駄があり
満席へ平然として爪楊子
内外を使い分けして亭主の座
冷夏だというに暑中の御見舞い

寝屋川市　宮尾あいき

叛かれて男性不信になりました
性別を問わぬアンネのコマーシャル
行水をブロック越しにのぞく草
墓詣り来たか来たかと赤トンボ

米子市　石垣花子

暖い胸を知らない哺乳瓶
思春期の胸に父の目うろたえる
天皇もひいき力士へ乗り出され
廃校はアワダチ草に占拠され

寝屋川市　柴田英壬子

正三の鶯が佳い新座敷
湯ぼてりへ冷やしておいた化粧水
パンフレット見るだけにする秋の旅
文机の由緒の部屋は縄を張り

大阪市　黒田真砂

同情が恋に変った紅の色
夾竹桃に或る日の心のぞかれる
待ちわびた雨へ色増す葉鶏頭
流す背へ或る日のうそを封じ込め

大東市　土岐トク子

蒼い海澄んで輝く種子島
浜木綿のゆれて潮騒種子島
太陽の道へハイビスカス匂う
愛されることは愛するより難し

岸和田市　原さよ子

この路地も子どもが多い夏休み
孫増えて気楽な予定狂わされ
同居してみて姑となるむずかしさ
五十過ぎまだまだ大きな夢を抱く

町田市　竹内紫錆

若いころ受けた御机下という便り
禿げてから渡す名刺の多いこと
印象を訊けば話が長すぎる
減量の手本を見せる詰めに入り

熊野市　坪田冬花

子の寝息途中で殺す子守歌
ポケットのマッチが蒔いた不和の種
夜が明けて別の世界が見えてくる
アイウエオ繰れば忘れた名が浮かぶ

守口市　野呂右近

鈴虫を差上げ西瓜貰って来
料理番組聞いて秋刀魚を焼いて居る
厨にも四季あり栗の飯を炊く
飲む番茶表も裏も無い香り

西宮市　野呂鵜汀

兄弟の縁が切れたりつないだり
立話どなたですかを聞きそびれ
過ぎ去れば死を考えた阿呆らしさ
忍耐の袋繕い又耐える

松原市　北野久子

しり口は何時も女の妬きが出る
割り切ればぐっすり眠り朝の凪
ああ同居重い空気を吸うている
ストレスが溜り猫背になっている

新宮市　川上渓水

此の人の良さ肩書きを忘れさせ
週休二日暇だけ増えた身の置場
脱税の出来る稼ぎへ嫉妬する
小遣いを妻からもらう俺の金

吹田市　神田秀峰

新築の落成祝いで雨が漏り
失敗を想い剣が峰で待ち
詫びる気があるなら始め考えろ
昼を嚙めば男の湧くファイト

岡山県　岩道博友

お日柄を言葉へ入れて大茶盛
ネクタイが曲ったままで張り込み中
停年前無難な中間派で過ごす
電話して素通りして来た訳を聞き

大阪市　北勝美

米審は消費者犠牲にめどをつけ
君と僕まわるお酒にわれと俺
エンジンのかかりが遅い老いの足
見晴らしが度肝をぬいた鉄砲水

大阪市　欄蘭

珍らしいラムネ見付けて飲む場末
タクシー代より雨傘を買う俄雨
駈込寺男行きたい時もある
手術する保証人の三文判

東大阪市　桑原喜風

母の日に贈るに決めたベビーカー
買いなはれ屹度景気は上に向く
催促のなくてご恩は直ぐ忘れ
大型のゴミ年寄は眼をつむり

岡山市　時末一灯

幸せのボーダーライン下げてみる
パチンコの醍醐味などとあぶら汗
薬缶から麦茶現場の喉がなり
一病に追われ働く日々あらた

岡山市　川端柳子

ビクターの犬も老いたり店頭で
長い顔そのまま家老という人品
車なら一〇分歩けば五分の地
ほうちょうの唄まな板に花を盛る

島根県　栂　みどり

みがきぬく仏具へ化身かとんぼ来る
災害へ電話通じて聞く安堵
国体を楽しく彩る花ひらく
さりげなく蛇口へ涙かくした日

岸和田市　古野　ひで

語部のひとりになろう原爆忌
表札は亡夫のままでひとり住み
道きかれ無口は一緒についてゆき
負けた日もせめて笑顔を忘れまい

橋本市　森脇　善太

歯車のくるい鏡はみのがさず
子の寝顔夢を盗んでいる夫婦
ぐっすりを守ってくれたかけ蒲団
編み糸を撰んで練って愛一途

鳥取県　金川　満春

鳴かず飛ばず窓際族の無為無策
日本今手術をせまる土光さん
人柄をしのぶ花輪の列ずらり
パラソルをくるくる翔んでいる女

藤井寺市　楠　昭子

幽霊より生保目当の妻恐い
仁王さんも眉を下げたい時もあり
脱税に幽霊もいた病院で
孫生まれ風呂の順番変えさせる

大阪市　横地　雅風

愛情をつなげば月末通話料
人情の教諭が迷う赤いペン
墨染もくらしがあるとミニバイク
スポーツ紙日銭は募集欄が要る

大阪市　藤田　頂留子

そばに居てあげねばならぬ片想い
人生を片手で泳ぎ切る母性
食欲の秋ふところも眼をつむる
せわしげに蟻はふむ足さけて行く

大阪市　西村　芙佐女

男物ばかりなり新世界
場違いを感じる根っ子の町を行く
無知だけど真直ぐ生きる人の顔
年輪と呼べるか赤銅色の皺

枚方市　稲葉　星斗

つかの間の生命を燃やしせみ時雨
頑固一徹釣りエサ変えぬ老師匠
異常気象暑中見舞ためらわす
淀川の四季を眺めて暮らす日々

岸和田市　清野　こう

待望の雨も続けば愚痴になり
空梅雨が一転被害を出す豪雨
プラン立て又崩された公休日
人呑んだ土砂へ無情の雨しきり

和歌山市　坂部　紀久子

知らぬから悠々漕いでる泥の舟

誘惑を女はひそかに待っている
尽くすのが好きな女で疎まれる
雑草にエリートなどは通じない

米子市　田中亜弥

いま母となった娘の掌をにぎりしめ
毛糸玉産まれる児への夢紡ぐ
台風の目のらりくらりと気をもませ
かあちゃんの顔誰よりも偉く見え

和歌山市　坂口公子

笑いつつ捻子を巻いてる女です
無人駅或る日野犬が番してた
忙中閑しきりに赤ちゃん笑います
引き揚げた孫へ極まる蟬しぐれ

岡山県　荻野鮫虎狼

全額の保険を貰う不倖せ
自由席自由にならぬ事があり
欲ぼけの背中が丸い応接間
早起きの顔くもの巣にひっかかり

岡山市　井上柳五郎

憎まれ口昔はなかった父の酒
いさかいのしじま風鈴うめて鳴り
種代も馬鹿にならぬと畑借り
確率の雨予報聞き傘を持ち

倉吉市　野中御前

蠅たたき一石二鳥罪なこと
小回りがよく利く男の小さい耳

夜店出す荷車押して老夫婦
紫蘇に燃え干され干された梅の皺

米子市　寺沢みど里

弱虫の雨が雷つれて来る
ゴマ豆腐の粘りしみじみ仏の日
抽斗の香水それで心足り
汗のない夏が不況の風を呼び

河内長野市　井上喜酔

初対面似ている似てる孫の顔
朝顔へ正午のサイレン無愛想
軽量の妻が合格ミニバイク
病棟の窓へ雀は朝の客

西宮市　妹尾春江

八月の海に捧げる鎮魂歌
保険証も入れて夫の旅仕度
陽の匂いいっぱいにして子ら帰る
羨やまれ自営の本音言い出せず

松江市　竹内寿美

嫁った娘の部屋に風鈴吊ってやり
道しるべ倒れたままの独り旅
梅雨あけと立秋蟬の困る夏
残されて女独りの晒し首

七尾市　松高秀峰

冷や汗を親にかかせた参観日
充電にまたふる里へ帰る嫁
機械化で生字引とも言うとれず

喋るだけ喋って姑の立ってゆき

兵庫県 藤後実男

末席にいて質問が飛んでくる
血圧の薬酒屋へ置き忘れ
犯罪へいい子でしたという先生
菓子一つ握ったままの子の昼寝

大阪市 大野武太

忘れたい忘れたくない従軍記
戦中も歴史のうそは知っていた
むつかしい話歯科医できいてくる
水洗の故障スパナもってでる

大阪市 岡田ふみ

月鉾がしっとり雨に濡れる町
九州の雨が気になる嫁の実家
上下に好かれて仲間に疎まれる
窓からの弁当たのしいローカル線

浜田市 佐々木裕

晴耕も雨読も粗大ゴミの糧
日本の血継いで男子の演歌好き
余生には肩書きすてた賃仕事
すげ替える首はいずれも既製品

出雲市 吉岡きみえ

涙つぽいく度び溜めておんな老い
職安で求人みて行く雨やどり
ぱったりと逢えそうな気もする街の角
金払い悪い男がのみたがり

高知県 松岡三吉

少しなら飲めるコップを二つ出し
お荷物にならぬひとりの金を貯め
自己流で活けても花は美しい
うなぎ食べても忘れまいキノコ雲

高知県 赤川菊野

手話の娘に人の情けを教えられ
ピンタへはピンタで返す意地も持ち
はずむものあってコロコロ毛糸玉
作られた笑顔の裏にある打算

羽咋市 三宅ろ亭

将棋なら相手にされる夏休み
実家帰り五日も居ると喧嘩腰
アンテナの感度鈍るもやはり歳
宿題へひぐらししきりにせき立てる

枚方市 栗林光夫

陽の色に染まれと梅の土用干
俺がいなくとも会社が動いてる
もうついてこなくていいよお月さま
水戸ご老公でも過労には勝てず

大阪市 橋元美恵

リサイタル野次馬気分と義理で行き
躓いた場所で靴ひも締めなおし
薄い血が雨に流れてゆく絆
定宿に徳用マッチ置いてある

大阪市 中西兼治郎

吹けば飛ぶ様な我が家に重い税
金婚の旅にカイロもお伴をし
涙もろいお方でしたと涙ぐみ
顔色を先ずほめている見舞客

唐津市　浜本久仁於

昇進の分だけ机ひろくなり
満潮の海は出船を恋しがり
花道をかざる舞台の幕が下り
集れば働く蟻の列となり

唐津市　仁部四郎

三世代テレビひとつがつなぎとめ
国鉄に大志を運んだ遠い夢
独身か女喪服をひるがえす
憲法が目次になるか新世紀

唐津市　田口虹汀

富士曰く遠くから見てほしかった
大観の富士碧空を一睨し
喋らない夫には喋る妻がつき
没法子（メーファーズ）雨で泣く人笑う人

唐津市　久保正敏

友情を連帯保証の判に見る
本妻より二号が若いとは限らない
親分になって一人で歩けない
エネルギー会社が退けてから使う
俺の運西にあるのか流れ星

唐津市　木塚素石

待っている人ある幸を折で見せ
妻子連れ今の倖せ見せに来る
老父の酒減って安堵と淋しさと

和泉市　岡井やすお

党内で選挙合戦全国区
国鉄の再建検札から始め
十字架を掛けた若者神輿かく
掛声の程に躍らぬギャルみこし

島根県　木村はじめ

ニュースには事を欠かさぬ日が続く
魂胆を見抜いて寒き部屋を辞す
嫁ぐ娘に心で贈る青い鳥
熟年になってもタオルは投げられぬ

島根県　山根峰雪

中国へ子供神楽を披露する（石見の子供神楽）
米作る自由許さぬ瑞穂国
繁昌が過ぎて息子の身を案じ

高槻市　田崎あき子

工兵聯隊跡にて
赤レンガの門そのままに中学校
学生の歓声通る煉瓦門
丹精の曲がり胡瓜を先に食べ
湯上りの孫だき倖せかみしめる
突然の電話寝巻の裾を踏む
お遍路にむぎ茶接待ありがたい

交野市　山本テルミ

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

工藤甲吉

日川協の全国大会で感じたことの一つに「川柳らしい川柳の退潮」があった。淋しかった。川柳界から川柳らしい川柳が無くなるとどんなことになるだろうか。とかく今の川柳界には、川柳らしい川柳を古いといって片づけたがる癖があるようだがどうかと思う。今回はそんな観点から鑑賞してみたい。

掌を合わすほとけの素顔見えるまで　八木千代

茜雲美しい死に憧れる　垂井千寿子

目覚めると亡夫の影追う癖がつき　竹中綾珠

つらいこと悲しいことにフタをする　川端柳子

いずれも私なりに感動させられた句である。偽りでないこと、真であること、本当であることは読む人の心に直に伝わる。

少しく横道にそれるようだが、千寿子さんの句で思い出したことがある。ちょうど路郎先生の亡くなられた四十年の夏、大分への旅のさい、瀬戸内海を神戸から別府まで船に乗ったが、そのときの夕焼の美しさといったら言葉ではとても現わせない美しさであった。千寿子さんの心情もよく分る気がした。

また、千代さんの真摯な姿にも心を打たれるものがあるし、綾珠さん、柳子さんの句もかりそめでないところに迫るものがある。

鬼火ゆらゆら政治劇終わる　山内静水

この鬼火は化物などが現われるときに燃える陰火である。ロングラン国会もどうやら終わったが、いったい誰がための国会だったのか。全く国民無視のバカ芝居に尽きていた。

鏡には写楽の顔もして出かけ　中川滋雀

剽軽な人柄を活写して余すところがない。主人公は句主なのかどうかは分らないが、とにかく事実をありのままに軽妙である。

ぶらさがり器いつしか隅で邪魔になり　川上渓水

わが津軽には、はやりの半纏を着ない者は馬鹿—ということわざがあるが、この場合は着た者が馬鹿である。とかく女・子供や三日坊主は手に負えないというと叱られる。

いざさらば薬をのまん保険税　河原みのる

ことしは国民保険税を十万四千余円とられた。こうなると薬をのまん奴は馬鹿となる。これも政府が医師の診療費不正請求を半ば野放しにしているからである。呆れる。

日曜日邪魔になるから家を出る　野呂鵜汀

としよりは悲しからずや…。噫。しかし、この年寄はゲートボール組ではない。

御仏に合わすその掌に欲があり　木村はじめ

およそ人間というものはそんなものだ。だが、物事を望みむさぼる心もほどほどにしないと、御仏も怒る。心すべきである。

年齢に合うた服では気に入らず　福本英子

若い人はもちろんだろうが、近頃、街を歩くとオジン、オバンにもそのような傾向が見受けられるようになった。老人は八十からという時代。少しでも若く見られたいというのだろうが、哀れでもある。

葱坊主照れくさそうに活けられる　栗林光夫

黒のベレーのダンディーさんでもね。

心よく貸したお金が戻らない　山根峰雪

はじめから無い人に貸した金である。だからあなたはお人よしと叱られるのである。

さて足らぬ物が余る—で、制限行数に余分が出来た。そこでチェックして外した句の中から次の二句を入れた。どちらも味がある。

南瓜もひねて一徹者になり　高杉鬼遊

下町の八百屋で曲ったなすび買う　香川酔々

遺　句

知人なき人淋し多きも又淋し
忘却は天与の恵みと知る歳八十
衣食足り礼節少し疎くなる
ロッカーに捨てられた子は悲しまず
流水浮雲に生きん哉人生

若本多久志

汚れたら右を左にして軍手
病妻に聞く浅漬の塩加減
階段の途中で意見軟化する
冷奴箸にかからぬ日の焦り
片減りの靴七人の敵へ向く

月原宵明

ぐびぐびと飲んで病いを寄せつけず
気にくわぬものに女のサングラス
御名御璽の教えを懐かしむときも
明治生れと握手ができるわが思想
涼しさのこれが極楽浄土かも

河村日満

ダイヤより固いペンだこ持っている
なにもかも笑顔で包む亡母だった
お美事に化けて美容院から戻り
ピーチクパーチク平和な籔の朝餉どき
堂々と金婚式にのろけられ

本田恵二朗

黒川紫香

極楽へ行く宝くじなどいかが
地獄への道で転げてばかりいる
初恋の人と老人会の旅
すり鉢とすりこぎ持って話しに来
一枚のハガキにでかい嘘を書く

正本水客

塔が立っていて本当に誰もいない
所在なげに六地蔵が並んで岐れ道
なんとなく一服の茶が欲しい小鳥鳴く
夫婦道祖神仲よき姿はばからぬ
山波は月の光を逃げきれぬ

長野文庫

足元がぐらつく思い滝に立ち
放しても翔ばぬ女の座りだこ
子や孫はどうする核兵器の遺産
たった一度の落ち度処世の壁となる
ご祈禱で消滅した気狩り供養

若柳潮花

渓谷へ霧かさなって流れ込む
女ひとり待つひとがあるジンフィーズ
浅くなり深く澱んで恋と言う
多数決なんぞと悪い癖をつけ
衿あしに夢二が生きていた舞妓

浜田久米雄

間の抜けた顔で禁煙もの言わず
老いの坂雲の動きを見て暮し

十二支が揃うた備前焼の艶
ぼけ出してからは夫婦の気が合わず
厄年に死んで納得してもらい

尼　緑之助

憲法の御旗はポルノにもかざす
かくれみの忘れはしない審議会
雨どっと山の殺意は遠慮せず
夏のない夏で災害だけ残し
ドラマなら派手な動きも許される

工藤甲吉

南無帰命頂礼核は許すまじ
日本株式会社社員で羨まれ
脱税のことなら医者に訊いて見な
漫画家も長者になっている平和
還り来た千人針を抱いて寝る

大矢十郎

冷蔵庫開けてつくづく終戦日
阿呆になりに来いと阿波から招かれる
事あらば日本に屍築く芸
教科書を叱られ敗戦まだ続き
天敵はこちら偽善の権力者

野村太茂津

黄昏の落花よ旅の沙羅双樹
海紅樹浜木綿紀南の海自慢
自主性がないから女を愛し抜く
罪みんな背負う一人が犯しても

粗大芥地球儀もある割れている
フンドシで泳ぐ親父の骨っ節
忘れてた人から勿体ないハガキ
さめざめと泣いて私はお馬鹿さん
ソロバンを弾けば貧しゅうなる私
上品に孫を叱ってさもしくも

山内静水

台本にない役柄も人生譜
裏のある玉手箱なら開けられぬ
庭石のこけに流転の跡を継ぐ
悪の芽を摘むにはさみもさびている
夕闇の夕顔おんなの顔になる

藤井明朗

朝顔に恙がなき日を見つめられ
その節度茶筅に心乗せている
知足常楽一幅の墨の香よ
汗にこそ風は涼しさ語りかけ
そのときは腹をかかえて笑わんか

水粉千翁

泣かされるのは苦手見舞も遠ざかり
生甲斐はまだ他人様の役に立ち
危かしい福祉の中の長寿国
冷暖房耐えると知らぬ子に育ち
2チャンネルトイレへ行く間与えない

金井文秋

川柳太平記(53)

窪田而笑子

東野大八

「私は川柳に携ってから二十余年になるがその間に川柳の雑誌を数種出した。まず読売新聞投句家の為に「同好」を出したが、数号にして止め、つぎに「川柳とへなぶり」、続いて「滑稽文学」を出して川柳の普及を試みた。更に「柳眉集」「若竹」「共鳴」「現代川柳」など次々に出して文学としての川柳の向上を狙ったが、長くて二年、短かきは全くの三号雑誌に終ってしまった。これを皮肉な柳友が

―死に代り生き代り出る揚場町

揚場町は私の住居であるが、実際その通りで一言もない。（註・右の句は市村駄六の土匪吟）

大体私が繰り返えし巻きかえし雑誌を発行したのは不肖ながら純真川柳を現代に普及したい為で、その雑誌経営のため、相当な金も使い、多少の苦労もした。出来ることなら永続させたく、あせりにあせったのであるが、結局その甲斐もなかった。一体これらの雑誌がなぜ永続きしなかったといえば理由はいろいろある。要するに私の熱意が、当時の幹部なり会員に理解されず、大体にあきっぽく四散した事による。こうしたことで「現代川柳」を最後として金輪ざい雑誌の発行に見切りをつけていたのである。ところが伊予の柳友の熱情に応えて決然として起ち、大正十年三月「媛柳」第一集を出したのである。幸いに柳友諸子の共鳴を得て珍しくここに第五十集まで続けてきた。而もこれまでと違って在京の幹部は一人もなく万事一人でやってきた。即ち編集から印刷、製本、発送までやって、廃刊もせず今日に及んだ」（「媛柳」第50号記念而笑子述・大正14年五月）

而笑子（俗名幸太郎）は慶応二年（一八六六）三月十五日東京小石川に生れ、電信学校卒後、名古屋、横浜などの電信局勤務。この間俳句を嗜み、春昭園の俳号をもったが、ある日偶然にも柳樽を読み、忽ち魅了され川柳に転じた。時にこの人二十五歳。「俳句は折紙免許など法式がうるさいのに反し川柳は無拘束、自由な点も魅力だった」と自懐している。爾来、読売新聞柳壇の田能村朴念仁（のち朴山人・読売記者）の常連投稿家となり、朴念仁の引退とともに、ついにこの柳壇の選者となる。当時の新聞柳壇の雄剣・岐両師と肩を並べ、ついに各新聞柳壇中最も投句者の多い読売派の総師となった。

読売柳壇選者就任は明治四十年三月だが常連投句者のため「新柳眉集」を出したところ愛媛県の投句者が断然多いため、松山から出ている海南新聞の柳壇選者も引受け、その投句者の門下から前田伍健、酒井大楼が育ち大阪では森鶏牛子（三味線草経営）がいた。

「媛柳」の創刊は大正十年四月で、東京から発刊され、紅太郎・周魚・紫弦・水府・路郎も誌上参加し、東京柳壇でも屈指の堅実な柳

誌で知られた。同誌は昭和三年九月までに九十二号を出し、而笑子が死去した昭和三年十月二十七日（享年63貞山恵幸居士）の前月まで続いた。

「媛柳」創刊号の発行趣旨の序文に曰く。

「軽文学の極粋、江戸趣味の精華なる川柳が、徳川の末葉より卑俗に流れ、遂に度し難きに至る。即ちこれを救わんとして生れたのが現代川柳なり。然るに新を弄し、ややもすれば軌道を逸せんとす選者常にこれを憂う。ここにおいて本集を発刊し、範を後世に残さんとす。現代の川柳に惑いを抱ける人々はこの木鐸を得、以て川柳の真価を得ん」

こんな話がある。関東大震災の際、折から「媛柳」31号を印刷所で鉄筆で草稿中の而笑子は、関係原稿と鉄筆と騰写用紙をひしと抱きしめ、天地鳴動の中を逃げ回った。

「天譴か業火か、三百年の文化を誇りし帝都東京はその三分の一が焦土と化したり。地震何ものぞ、大火災何ものぞ、媛柳はそれらに屈せず、わが中央柳壇の復興に一大努力を続けん、媛柳は死せず」（大正十二年九月三日余震のうちにこれを記す）

而笑子の被災記事が媛柳に詳しく、貴重な体験記だが長くなるので割愛する。愛媛柳壇の雄・前田伍健（初号五剣）は「大正九年而笑子門に入る」とあるが、往時の五剣の話

「いくら投句しても一句も採って貰えず、腹に据えかねて—而笑子は一銭五厘無駄にさせ—とハガキに書いて送ったところ、而笑子からのハガキの返信がきていわく「君の句はよくみているが弥次的狂句だ川柳ではない。これを川柳とするには—射倖心一銭五厘を無駄にさせ—とすれば川柳だ」と教えられた。

正岡子規を出した俳郷伊予松山は、明治以降「俳句宗」といわれるほど俳句人口の多いところだが、川柳も盛んで海南新聞柳壇は而笑子。愛媛新報柳壇は西田当百選で、伊予日日柳壇は今井卯木選であった。

而笑子の愛媛県における人気は、明治四十年ごろ、而笑子の行司で角力吟が行われた。十回ぐらいまで続いたが、この人気が川柳PRに大いに役立ったことは否めない。

愛媛県では安井八翠坊の「凩」が出たのは大正二年一月だが、この出現で而笑子の「新柳眉集」は休刊に見舞われ、有力柳人は新柳誌「凩」に走ったものは多数だった。それにも拘らず同年六月、海南新聞柳壇開設七周年に当り、普通なら断るところを而笑子は、快よくその選に当っている。

「吾等遍く現今の川柳界を観るに、東に久良岐氏の主宰せる久良岐社あり、剣花坊氏の経営せる柳樽寺あり、而笑子氏の指揮せるいわゆる読売派あり、愁思氏等の下萌社あり、十世川柳氏の統帥せるいわゆる旧派あり。西に六厘坊の西柳樽寺派あり——」（「新川柳」明治41年元旦号（創刊号）樽拾生）

自派拡大吸収に躍起の「五月鯉」も「川柳もそれ故に自己崩壊を来たしたが、「川柳とへなぶり」を持つ読売派は、この機に多くの優秀な作家を獲得した。それには中心の窪田而笑子が

—文金の一糸乱れぬ三ヵ日　而笑子
—通り雨砂へポツポツ穴をあけ　〃

のような写生吟を主とし、その門下に唱導したため入るに容易であったのかもしれない。その門下に荷十、鶏牛子、五葉、蔦雄、柳影子等々多士済々で読売派は全国的な黄金時代を現出した」（「川柳誌講話」海野夢一仏著）

東都と愛媛県に偉大なる足跡を止めた而笑子の功績は抜群で、その人柄に帰するところが大である。（参考文献「愛媛川柳史」長野文庫著）

誹風柳多留廿六篇研究（八丁）

大屋六郎・八木敬一・鈴木　黄
石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・多田　光
故岡田　甫

127　**四角な口を吹キ閉て風は凪**

大屋＝四角な口は、「四角な文字」すなわち漢字を「口で言う」ことで、この場合は「詩（からうた）」をさす。その「詩」を歌いやめたので風が凪いで海が静かになったという意味である。

本句は、謡曲「白楽天」によったもので、句意は、唐の太子の命をうけて、日本の智恵を計らんとして渡って来た白楽天が、住吉明神の化した漁翁と漢詩と大和歌で問答したが結局負けて、漢詩をやめたので、風も凪ぎ、動かぬ国ぞ久しき、ということになった、めでたいことだということになる。

鈴木＝賛。

らく天ハへぼくたおやしだと思ひ　明六義4

らく天ハ日本一のはじをかき　一五・33

多田＝賛。本句と縁は薄いのですが、

楽天かかへるさわらの舟か出る　天二宮2

という句あり。風浪のあとさわらがよくとれる意です。

岡田＝賛。

128　**余の山と違ひ子宝迄も持チ**

大屋＝「余の山」は、他の多くの山の意。「子宝」は子どものことで、本句は、日本一の富士山は、さすがに他の平凡な山とちがって宝永山という子山までもっている、という意味になる。「子宝」の宝が宝永山にかけていることは勿論である。

南＝賛。

咲屋姫宝の山を一ッ産ミ　五三・9

多田＝賛。

岡田＝同。

129　**他人根性むつかしく書て出し**

大屋＝「他人」は外国人の事。

他人の中を見て来たハけんとうし　一二・35

他人つき合をして居る長崎や　一三・39

は、その例句。
　句意は、吉備真備渡唐した折、唐人が彼をみくびった高慢な根性から、むずかしい邪馬台の詩を書いて、これを読んでみろと出したというもの。
　真備、住吉明神長谷観音を念じ、蜘蛛の案内でこれを読んだという故事は有名。

　　唐人の眼にハ蜘なくよむと見へ　三四・11

石田成＝賛。

　　くものふるまいを他人はしらぬ也　一六・21
　　他人へハ蜘としらぬが仏也　二六・16

多田＝賛。
岡田＝同。

130　**藤はかま野分ヶにひだを崩される**

大屋＝「藤ばかま」は、秋の七草のひとつ。キク科の植物で川べりや土手などに生える多年草。
　句意は、「藤ばかまの花が野分に吹き荒されて、乱れたり、崩れたりすることだ」の意。はかまの縁語でひだ（襞）という言葉が出てくるわけ。
　ところで、この句の「藤はかま」も「野分」も源氏物語の巻名で、第二十八帖「野分」、二十九帖「行幸」、三十帖「藤袴」となる。本句の「ひだを崩される」というのは、夕霧と紫上・玉鬘の間のきわどい場面をとらえて詠んでいるのではないかと思うが――。
石田晋＝濡事とは考えなくてよいと思う。
石田成＝源氏物語をふまえての句作。
多田＝源氏まで考えなくとも、「袴」を「崩す」の縁語でと思っていました。袴のひだを気にしていた江戸の人々の実感か。
岡田＝多田氏説に賛。

131　**法眼の請合て済ム御結納**

大屋＝「法眼」は医師や画工などに授けられる位で、「狩野法眼元信」などの「法眼」はよく知られている。
　旗本か大きな（裕福な）町家の娘が、婚約だけはととのっているのだが、どこか身体ぐあいが悪く、容態がはっきりしない。誰それと名の通った法眼に診察をうけたところ「いや大丈夫でござる、拙者がうけあい申す」と太鼓判をおされたので延々になっていた御結納という運びになったという句。
鈴木＝私は医師ですが、現在でも結婚となると互に健康診断書を取り交わす。容色美麗だが常に医者通いでは一寸心配になる。そこで医師の太鼓判という所か。
小野＝賛。恋病みと見抜いて「余の病に非ず。縁談さえととのえば即座に平癒」と法眼がうけあったのでしょう。
多田＝賛。労咳でしょう。
岡田＝同。

132　**朝起キの鼻へ八重桜か匂ひ**

大屋＝早起きして家の前を見たところ、今朝も幸い何事もないさわやかな春の朝だ。朝の空気を胸にいっぱい吸いこんだ。折から満開の八重桜のにおいが鼻からずしっと胸にしみたという句か。
　本句、「奈良の早起き」ということわざと「奈良の八重桜」とをつなげた句か――。
八木＝賛。「奈良」もおもしろい。
鈴木＝礎稿通りか。「奈良の早起き」は当然のこと。又「あおによし奈良の都は咲く花の……」も関連しているのではないだろうか。
本多＝同。

　　仏閣も桜も奈良ハ匂ふ成り　二九・30
　　朝起の鼻に匂ッた八重桜　一二二別・13

　本句は伊勢大輔の歌「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな」（「百人一首」）の歌からの着想で、俗諺「奈良の早起き」と結んだ句作。
多田＝同右。**岡田**＝同。

57年度 路郎賞・川柳塔賞決る

57年度路郎賞受賞作

来る人が来て去に元日黄昏れる

東大阪市六万寺町三―九―二八　市場没食子

中島　生々庵

今年度の路郎賞選衡委員は川村好郎、若本多久志、菊沢小松園三氏の都合で不参加、四氏の推薦する四句だけが対象になった。

そのうちの二句が全く同一句であったのも今までになかったことで、偶然ながら余程の佳句でないと、このような結果にならなかったであろう。私も最終決定者として、その佳什を躊躇なく推すことにした。

路郎賞準優秀作第一席

御身ぬぐい大仏様のお手に乗る

岸和田市　高橋操子

同第二席

雨や憂し家庭医学の赤い本

松原市　谷垣史好

没食子　柳歴

昭和2年　大大阪川柳社実費病院研究会に入会、本田渓花坊氏に師事す。

昭和7年　大大阪川柳社退社。川柳雑誌社不朽洞会に入会（維持社友）川雑終刊時は特別会員

昭和17年　大阪逓信病院鳥ヶ辻川柳会発足、幹事世話人（現在も）

昭和40年　川柳塔社設立、同人参与

路郎賞候補作品

西尾栞

作業衣の下に一揆の血が流れ　両川　洋々
降ってきたよろこび話が前後する　高橋千万子
殿さまの知恵が生きてる紡ぎ唄　浦野　和子
三面記事私であったかも知れぬ　山口　美穂
儲けとは悲しきものよ友が減り　清水　健司
日本海テトラポットに似合う波　井上柳五郎
夫婦して無言でつぶす屑いちご　高杉　鬼遊

〈準推薦句〉

松茸は贈収賄になる値段　工藤　甲吉
熟年のまだ助走路をかけ回り　小西　雄々

〈推薦句〉

雨や憂し家庭医学の赤い本　谷垣　史好

橘高薫風

弁護士は別な心で聞いている　中村ゆきを
人妻になっても君の稚い字　谷垣　史好
稲光遠く戦う国がある　谷　真風
花ほどに綺麗な正座してみたい　堀江　正朗
やがてやがてカタカナの国になる　尼　緑之助
夢の痕は罪とも冬の大文字　八木　千代
その人の罪には触れず輸血する　山本　桐下
ジョーカーの一つが残る旅の果て　辻　文平
小児病棟みな美しい妻をもつ　小島　蘭幸

〈推薦句〉

御身ぬぐい大仏様のお手に乗る　高橋　操子

正本水客

〈推薦句〉

来る人が来て去に元日黄昏れる　市場没食子

善人の怒り常識通じない　高橋千万子
帰るには早い時間に会終り　大坂　形水
迷いふと桜が散ってゆくように　高橋　夕花
花好きの妻が私を疎んずる　小幡　里風
坐り込み　ついでに坐禅などいかが　工藤　甲吉
見舞客に白髪染めてたのがばれる　金井　文秋
会う場所は少しキザだが紀伊国屋　谷垣　史好
一人言いわねば言葉忘れそう　藤田頂留子
ぼたん園抜けると苗を売っている　原　さよ子

若柳潮花

戦争のない菖蒲湯の男たち　高杉　鬼遊
もう秋か酒の美味さが舌にのる　小林孤呂二
慌てたら邪魔するだけの手が慌て　堀江　正朗
貧しさにいて倦怠のない夫婦　西村　早苗
春うらら外野フライを見失い　谷垣　史好
釘打ってみてもガタガタする机　清水　健司
地下鉄の窓にも春の陽が欲しい　都倉　求芽
似たような夫婦に出逢う春の旅　小出　智子
啄木忌じっと手を見る人ばかり　工藤　甲吉

〈推薦句〉

来る人が来て去に元日黄昏れる　市場没食子

喜びの言葉

市場　没食子

薫風さんから受賞の報らせをもらい、一瞬緊張して速達を読み返えしました。まさかというまさかにめぐり会えた喜びからです。

路郎賞など高嶺の花で、私の手の届くものでないと諦めていても、毎月川柳塔へ投句する心底には、手を届かしたい願いが流れています。川柳をつづけていて良かったと喜こんでいます。良い死に土産が出来、嬉しいことです。有難うございました。各位に深謝。

57年度川柳塔賞受賞作

太陽の笑顔を独り占めにする

尼崎市上の島字地元三一八
奥山美智子

美智子 柳歴

昭和五十四年秋、川柳瓦版へ投句を手初めにし、五十五年夏、ふあうすと誌友、五十六年四月より川柳塔誌友となり今日に至る。
尼崎市在住、主婦。

川柳塔賞準優秀作第一席

この城に生きたあかしの石の苔

島根県　松本はるみ

同第二席

人生はどこかに抜ける穴がある

大和高田市　岸本豊平次

川柳塔賞候補作品

香川酔々

〈最優秀作品〉
この城に生きたあかしの石の苔　松本はるみ
〈準優秀作品〉
どうにでもなれと鳳仙花が弾け　有働芳仙
〈準優秀作品〉
子に残す雑木林の細い道　福間芳枝
雀にもぐずなのがいてはぐれてる　本多洋子

つるし柿するりと風がぬけてくる　吉田比呂子
千羽めの鶴が命の灯をともす　田中亜弥
空気より少し彩ある夫婦仲　藤田泰子
日曜日少し濃いめに紅をさす　清水康江
父の咳ちょっぴり孝行したくなる　久井富子
くちなしが匂う未完の絵は夏へ　高杉千歩

高杉鬼遊

出世せぬ頃が良かった夫婦仲　小山悠泉
夫の指九本までは信じてる　村上田鶴子

冬至南瓜嫁と無言の日が昏れる　朝山千世子
朝刊のチラシの中にある暮らし　吐田　公一
しみじみとよき友のありトマトうれ　堀江　百代
善人がひとりだけ見た冬の虹　国分甲子郎
たちくらみふと脳味噌のゆれる音　松本はるみ

受賞のことば

奥山　美智子

柳歴の浅い未熟な私が、このたび思いがけなく栄ある川柳塔賞をお受けすることになって、身内のひきしまるような感激に浸っています。幸い私には理解ある主人、私をあたたかく見守って下さる周囲の方々や、良き師、良き友に恵まれ、特に昨年の春以来、紀市郁栄先生から直接、ご懇篤なご指導をいただいたお蔭です。今後は、この栄誉を汚すことのないよう、諸先生へのご恩返しのためにも、精いっぱい頑張りたいと存じます。ほんとうにありがとうございました。

死ぬ時は一緒と恐い言葉なり　氏林　洋敏

〈準推薦句〉

重荷なら夫婦で少し軽くする　清水　康恵

〈推薦句〉

人生はどこかに抜ける穴がある　岸本豊平次

西田　柳宏子

〈推薦句〉

太陽の笑顔を独り占めにする　奥山美智子

重荷なら夫婦で少し軽くする　清水　康恵
八十歳夫婦ゲンカの種つきず　田形　美緒
この城に生きたあかしの石の苔　松本はるみ
つかず離れず絵皿の中の夫婦独楽　高杉　千歩
どこにでもある倖せで満ち足りる　東原　福子
夫の指九本までは信じてる　村上田鶴子
城あけた男にしみるわらべうた　紀市　郁栄
どうにでもなれと鳳仙花が弾け　有働　芳仙
満ち足りて女は過去を振り向かぬ　鈴木　節子

谷垣　史好

ゆく秋へうろ覚えなる詩を捧げ　高杉　千歩
種なしぶどう悲しいのかもしれぬ　津山　刀水
結んで開いてやがて一人になりました　村上田鶴子
子に残す雑木林の細い道　福間　芳枝
茶筅持つ雪の崩れる音のして　工藤　蕗子
魚屋の魚死顔きれい過ぎ　松本はるみ
空気より少し彩ある夫婦仲　藤田　泰子
城あけた男にしみるわらべうた　紀市　郁栄
待伏のような気もする花便り　片上　明水

〈推薦句〉

しみじみとよき友のありトマトうれ　堀江　百代

お詫び

▼ＮＨＫ川柳の課題を九月号で間違って発表し、たいへんご迷惑をおかけいたしました。深くお詫び申します。（薫風）

▼九月号の秀句鑑賞（水煙抄）の執筆者は小砂白汀氏でした。お詫びいたします。

黒川紫香選

白旗はいつも手許へ置いてある
西条市 片上明水
罠のある道口笛をわざと吹く
降りるとき捨てる積りの雑誌買う
生垣の高さで蝶がやってくる
絵に描いてみてもふるさと淋しすぎ

藤井寺市 赤木和子
切り札を置いて男が去って行く
裁ち鋏手許が狂う愚痴がある
ずぶぬれもいいな美人のプロポーション
譫言に呼んではならぬ人の名を
背信の闇にキャンドル仄かなり

西宮市 紀市郁栄
握手する二人へ恩師が手をかさね
控え目な妻が本家の愚痴をいう
大きめのコップで昂ぶりをかくす
起きぬけのひらめき宝くじを買う

抱く素振りみせても微笑するばかり

今治市 矢野佳雲
問いつめて来るから嘘を考える
ふる里を聞くと話をそらされる
気があるのなら考えてよと彼女
手拍子の入れようのない唄うたう
張り扇ぽんと十年たちました

熊本市 有働芳仙
停年が近く抽出し軽くなり
子を叱るついでにパパも叱られる
天皇のお声がかりのトットちゃん
むこ選び親の秤と娘の秤
露草の空の青より青く咲き

京都市 松川芳子
押入へ孫の来る日の陽を入れる
雨に色もろうて夏に耐える花
すぐれぬと母は薬を止めてみる

きりん草黄金の色に酔うている
未来図が少しずれてる夫婦仲

東予市　小　山　悠　泉

それとなくガッツポーズが出る若さ
ふるさとの香り宅急便で着き
墓だけがあるふる里が捨て切れず
丸つけて佳き日を待っているこよみ
玉串の誓いへ男手がふるえ

尼崎市　奥　山　美智子

炎天へ思いためらう青い柿
苦しみを分かつ男とならば行こう
うたかたの想いに風が透き通る
すばらしい出会いを神さまからもらう
一日を使い切れないままに秋

高槻市　竹　内　花代子

深爪を切って気がつく物思い
泥沼のたにし青空見とうなり
大阪の空を灯にして渡御の列
そうめんに鱧チリが出る夏祭り
低気温暑中見舞い忘れかけ

西宮市　松　尾　志　保

才女にもふと覗かせた少女趣味
糸屑に斜陽の暮しのぞきみる
老いてなお少女偲ばすあどけなさ
星屑がこぼれる夜の二人連れ

陽やけした妻の素顔に少女みる

大阪市　藤　森　小雅子

同姓異人酒の肴にされている
ヒロインの足どり噂のある視線
十六夜の月に証を迫られる
朧月大正琴を懐かしむ
赤蜻蛉今年は早い秋を告げ

尼崎市　西　村　かすみ

空壜を片付け母の夏終る
金貯めてもう男にはこりました
オーデコロンつけて老愁なまめかす
蘭の鉢愛する人の白い髪
寓と書く門へ手描の帯が消え

青森県　波　　ただお

板塀が出来てぐっすり熟睡し
ぎりぎりに脱いで真夏を闊歩する
霊場を回り安堵して眠る
波しぶき立てて漁船の威勢よし
誰彼と声かけてみる嬉しい日

尼崎市　角　野　かず子

肩の力抜いて話せる友がいる
吊橋を渡ったとこで打ち明ける
宝くじ買いに行く日の良い予感
足跡が薄れ再婚の話くる
盛り場でスリも見ている絵看板

平和の日還らぬ兄へ赤き飯
ふり向かぬ人と知りつつ雨に佇つ
爪切りを探しあぐねて三日たつ
大波小波一つ覚えの浜千鳥
虚空遍歴自問自答へ遠花火
八尾市　高　杉　千　歩

靴提げた男が窓の下に居る
やる気さえあれば机にこだわらず
切符持つ主人が汽車に乗りおくれ
数珠借りて行けばこちらはキリスト教
赤い服着て若さにしがみつき
尼崎市　関　口　幸　子

まだ花を作れるしあわせだと思う
南瓜と格闘をする病上り
悪筆を知ってる亡夫へ写経する
外面を洗いながして個にかえる
重荷にはなりたくなくて足袋をはく
尼崎市　田　中　晴　子

もうひとりの私がひそかに人を斬る
まっ白なセーラー服を着せたい子
歯車がゆっくりまわり人が死ぬ
芒野に夏のいたみをやり過ごす
親心わかって詫びる故郷の墓
島根県　松　本　はるみ

見送りに叱ってばかりいた生徒
古手紙燃やせば青い煙立つ
放浪に終止符うてと風の音
肚の虫おさえ本音が出るコップ
千切れ雲よりを戻して来た話
尼崎市　丹　下　玉　子

裏切らぬ財布味方の知れた金
秋の樹はとてもお喋り朱をこぼす
ひとひらの命ほろりと風に舞う
ほろ苦い風もあったと花の私語
見るたびにむっくり大きくなるカボチャ
岐阜市　市　川　鱗　魚

朝一番ふっと出会うた秋の風
不敵なことばときどきこぼすオチョボロ
一日一善嫌みの一つを聞き流す
同じ洒落二度きくゆとりない暮し
合せ鏡夢はあえなく凋みだす
岡山県　松　本　元　江

恍惚にならぬ思いの鈴をふる
捨てきれぬ想い顔出す古賀メロディー
衣きせぬ言葉がほしい風の中
青春の夢は流れる白い雲
娘に孫に財布がゆるむショッピング
富山市　舟　渡　杏　花

尼崎市　伊　藤　春　子

島根県　槻　谷　一　葉

宍道湖は雨に夕陽に絵となりて
瞬間を燃えて花火は天に舞う
むずかしい言葉並べて虚勢張る

尼崎市　春城年代

親犬に子犬あげるの字が読めず
長い人生一途にきたと言えますか
どっと湧く梅酢死ぬまでおかみさん
手入れよい鉢が並んだ露路住居

松原市　本多洋子

八月が来ると八月が来ると疎開を想い出す
ひと休みの長さ中年だと思う
屋根に一つゴムまり残し子らは去ぬ
手のりに育ち野性の心を見失う

名古屋市　越村枯梢

ろくでなしの父は哀れな影を曳く
エリートのつもりネクタイきつすぎる
それぞれに十指の主張聞いてやる
秋空のように古老の艶ばなし

尼崎市　山本ハツエ

うたた寝に枕を出してねつかれず
病室の同じ名前にハッとする
書籍コーナーめぐるとゆたかな風になる
ガラス戸におせじを言わぬ影うつる

大阪市　塩田新一郎

残ったら儂も使うと白髪染

暴走の黒ヘル脱げば美少年
孑孑も空飛ぶ夢をもっている
時代劇泡立草の中で殺陣

豊中市　満仲きく子

鳴きなはれ命短いんだもんね蟬
ロマンスは空にもあった天の川
電話なら言いたいことが言えそうで
妻の座の重さひしひし感じた日

西宮市　朝山千世子

夢二の画にわが少女期をなつかしむ
結婚無視現代女性は芸に生き
人生流転情炎の海嵐呼ぶ
大ジョッキ男性批判の熱上がる

岡山県　吉末謹太郎

喋りたい時もあるだろ水中花
熱中の夫へ灰皿そっと出し
アリバイが崩れて人間らしくなる
几帳面すぎて神経質だと言われ

大阪市　朝倉利義

年寄りと思ってないのは自分だけ
新薬を飲んで漢方薬ものみ
ポイ捨ての煙草を少女の目が叱る
鍵っ子の少女は人形のママになる

大阪市　日阪秋子

蟬時雨身につまされる女坂

喜んでくれればほいほい遣り度うなり
聞かされた秘密がだんだん重くなる
五〇〇円玉未だに来ない金回り

島根県　東原福子

三々五々国体の花咲き初める
群集のひとりとなって神楽見る
潮騒が遠い思い出よび戻す
花時計残り燈台守居らず

尼崎市　山田保蔵

ビール五本水ならとても飲めやせぬ
年のせいですよと薬くれもせず
お見舞を買ったついでに道を聞き
公立の看護婦なぜか威張ってる

尼崎市　矢萩貞子

おばあさん少女の雑誌を読んでいる
文化祭かわいい少女が混ってる
連れ立って歩く二人に秋が来る
名月を心の糧に汲み入れる

鳥取市　武田帆雀

エリートの頭が兎の輪に入れず
新聞碁解けずにコーヒー粘ってる
ちゃらんぽらんに生きて思わぬ運拾う
赤いべべ会社に置いて帰宅する

和歌山県　寺田裕美

故郷の駅に錦は売ってない
橋わたる誰も橋桁確かめず
洗面器に光る平和な水を張る
もぎたてを賞めてもらったナスの色

今治市　新居田胡頹子

欲のない子がもどかしい上り坂
打水へ直夏の花の息づかい
適マークふっくら温い旅枕
乾昆布浜埋めつくす北の幸

大阪市　堀口欣一

人間の顔を見ていて面白し
南座の裏手マワシが乾してある
女房と意見がちがう扇風機
女房に叱られながら句を作り

諫早市　江副二牛

思い出をたぐって生きる老いの坂
伝言板二人の愛は燃えている
飽きもせず山と対話の登山靴
核兵器地球に生きている恐さ

西宮市　奥田みつ子（光子改め）

人妻の静けさ乱す黒いバラ
下宿子の電話に父の高笑い
夏休み隣家の笛のたどたどし
人生は演技と軽くいなされる

高知市　北川竹萌

無理押しを避けて顧問の座へまつり

台風予報何だか気味の悪い風
逆立ちが出来ず苦難をのり越える
開店の花輪隣までつづき

境港市　細木歳栄

聖域と信じた札所のもうけ主義
巡拝を終えて仮面を脱ぎ捨てる
空海の教えは険しい道ばかり
妹の供養同行二人笠

兵庫県　森脇和子

四畳半に馴れて自炊が板につき
悩みごと伏せて補聴器取りかえる
二人して越せる坂ならふりむかぬ
さざ波が耳にやさしい私語をくれ

尼崎市　吉永伊三郎

毛抜きより情で抜ける心のとげ
宿泊に上下はあれど湯は同じ
あの世への絵巻きのどこかにいる私
孫見舞いにきて看護婦にもてている

今治市　八塚三五島

夜市からもどってすぐ聞く救急車
売れもせぬ商品すこし並べ替え
昼寝する隣へ妻も来て昼寝
同窓会綽名と綽名で手を握り

兵庫県　中田白李

引越しのたびに捨てた箸が増え

肉眼で読めぬ保険の約款書
料理番組見ても食欲など湧かぬ
ところにより雨とはうまいことを言う

旭川市　朝倉大柏

隊列を抜けるとぎくしゃくとれてくる
かげろうに蝶の警戒心が解け
かわいそうなほどタレントの稼がされ
肩の荷を下ろしてどっと老いが来る

岡山県　池田半仙

預金額人の信用ランクする
ジョギングで鍛えてみても齢はとし
河幅にもう届かない石を投げ
きれい事言いつつ刺のある皮肉

尼崎市　中辻千子

自作ならとても売らない大トマト
天神祭観に行く気もなく遠く聴く
脇役でよしと悟って家平和
額縁落下家の中にも落し穴

河内長野市　井上伸子

スカイライン樹海が霧に見えがくれ
久し振り夫の磯釣り雨の中
吊り橋の写真も遠い夏の日よ
花好きの夫待ってる時計草

尾鷲市　渡辺伊津志

揉み洗いして済むシミは忘れられ

足跡をつるりと塗って左官出る
愚痴聞かす女は店の得意客
連れ立って下戸と上戸が旅に立ち
寝屋川市　平松かすみ

紅生姜出す度楽しくなって来る
娘の服のモデルにされてうれしがり
素麺がほんとに好きな母と娘で
被害地の写真と並ぶギャルみこし
大阪市　野田君枝

判決はコンピューターが出すだろう
夏休みさあ連れて行け連れて行け
長崎の鐘の音色を変えた雨
初出場地図の隅から浮きあがり
羽曳野市　麻野幽玄

満開の花蜜蜂を忍ばせる
濁流の唯見てるのみ雨に佇ち
帰省の子素足で地道歩かせる
唐津市　筒井朴竜

トップ・ニュース原発反対和多田デモ
星砂の浜より仰ぐ天の川
観光の星砂土産に旅を終ゆ
唐津市　浜本千代

灰皿をいつも洗って尖り勝ち
エプロンで出征兵士に哭いた過去
朝顔の絵日記母より早く起き

ふと見れば人の流れに居る孤独
姫路市　人見翠記

新居よし新しい鏡の置き所
茜さす書写の峰々今日も無事
竹原市　佐藤令子

暗黙の了解海は静かなり
劣等感言葉に出せぬから悩み
スタイルが気になる午後のマーケット
熊本市　高野宵草

薬害がありそうな色を飲ませられ
仲よしになりたい機械の掃除する
思いきりサア降りますと暗くなる
八尾市　葛幸子

食堂でひっそり飲んでる老夫婦
陳列の大きなカツレツ見て入り
病床に約束の日の薄化粧
八尾市　宮崎シマ子

蟻三匹時々荷物取落し
ちょっと知っているのに傘貸してくれず
夕立に自転車二台翔ぶ如く
米子市　足立由美子

寝言でも口答えする反抗期
歴史的遺産を抱いた土地に住み
口程でない腕道具だけ揃え
大阪市　今西静子

ひとり旅潮騒を聞く窓に立ち
仕舞舞うすり足にある美しさ
天守閣武人がいそう薪能
大阪市　松尾柳右子

蟬の声止んでジェット機通り過ぎ
捨て猫を市場のそばへ捨てに行き
好きな様させてあげたい夫であり
島根県　北川民子

露天風呂少女にかえす夏の雨
どしゃ降りでけろりと逃げた蟬の声
花茣座に亡母の思い出置いてある
今治市　蔦本昌道

もう一人の僕にジャンプをさせる夢
角栄の見せ場カメラへ片手上げ
切札の出て行きますがこわい父
弘前市　田中叶

昼道を過ぎる毛虫の速度感
妻の顔へのへのもへじに見えてくる
矢印の寂しいとこにたつ医院
尼崎市　中谷利美

にんにくの効き目齢より若く見え
マニラへは上等兵で征った父
奥さんによろしく独身とも知らず
献立は主婦の胃腸にあわせられ
水戸市　上鈴木春江

赤ちゃんのお昼寝爪を切ってます
鏡見て自問自答を繰り返す
富田林市　藤田泰子

雨激し夜半に目醒めた肌の冷え
無駄口を夫と言える日はたのし
飼育箱我が家とおもう兜虫
島根県　石飛水煙

縄のれんくぐる男の生き生きと
拝啓もなく電話の味気なし
生き甲斐はパチンコジャラジャラ日が暮れる
島根県　藤原秀穂

消えるから花火は人の足を止め
夏祭り過疎を過密にして嬉し
早飲みで取ったビールが重たすぎ
大阪市　白石潔

蟬殻を見つけた孫の瞳澄む
無事生きて済まぬと思わす戦争展
還暦でまだ劣等感にさいなまれ
青森県　荒田つる

末席の一人に急所つつかれる
情報を仕入れ町内かき回し
何処までが法螺か初老のクラス会
鳥取県　中原諷人

忠魂碑よ君も反戦歌を謳え
お酒くださいボクの心が澄んでくる

ノアの舟に神が忘れたボクの児よ　岡山市　原田凡太郎
決心を促すように俄雨
一つずつあかりが消えてゆく余生
長兄長逝
安らかに旅の終りの目をつむり　倉吉市　今村夕路
方向の音痴は汗を拭いている
遅れ来て伝言板に怒る文字
六法を開き抵抗するつもり
久しぶりの故郷墓地まで舗装され　鳥取県　羽津川公乃
同病を労わり合っている残暑
初恋を私も日誌に埋めました
方便の嘘を我が子に責められる　八戸市　島田昭治
童心に還る術なし鼻毛抜く
善人の証し矢鱈に汗流れ
夏休終って金魚忘れられ　八尾市　山下みつる
五人前ざるそばたべて無料です
雀でも安全圏は知っている
古里を持つ幸せの里帰り　島根県　堀江百代
ユーモアがあったらなあと思う良人

茶を入れて又も昔の話する　芦屋市　上田佳秋
カチワリがとけて母校は惜敗す
アルバムの友何時迄も予科練生
夕焼けを高層ビルが邪魔をする
珍しい友から暑中見舞来る　河内長野市　糸谷春草
飛行機はきらいですよと百二歳
台風の進路気になる日のニュース
相撲には金星という勝もある　和歌山県　北浜二郎
えび漁にコンピューターの船も出来
いつまでも恋仲である老夫婦
家は火の車でも亭主地車を曳く　八尾市　松下蕉露
冷房を外に流して客を呼び
買物籠提げて女は燃えに来る
敷石が二度の勤めを法善寺　泉佐野市　真崎浪速子
湖のロマンが五線譜に踊る
抱き合うてよろこび分かつ甲子園
母の顔百人描けば百の顔　大和高田市　岸本豊平次
長雨に土も腐った色になり
日曜の朝のダイヤル弾む指

父の背に仕事の匂いふと感じ
炎天に植木も水を待つ日暮れ
寄付が来て人並の額書いておく
西宮市　津山冬子

通り雨まだ思わせぶりな雲の顔
いささかの雨は覚悟の夏祭り
雨後の庭草むしってもむしっても
島根県　大浦ふみ

風鈴でしみじみ想う亡き母を
空はいいウインクしている北斗星
川柳を詠んで希望の余生あり
大和郡山市　岡田すみれ

ささやかな暮しの庭に四季の彩
喜寿の今日一桁若い色を着る
無理すなと叱る子遠い街に住み
兵庫県　奥野テル

かんぴょうに今日いちにちを操られ
台風へ農機具代金気にかかり
日本列島台風銀座で洗われる
島根県　田中ヒデ子

駅前に立つ反核の運動者
塔を見る少女に飛鳥見る思い
やける陽に父母の声きく蟬しぐれ
大阪市　権安達一郎

鳥取県　森山盛桜

幕引きでいいさ人生見てやろう
老化した指から虚勢こぼれ落ち
香水がちょっぴり他人めく別れ
島根県　岩佐富子

窓伝う雨が思い出ひとつ消す
ふるさとに爆音知らぬ山の峰
事さらに草の根匂う原爆忌
唐津市　神崎紫泉

外食代夫に渡して旅に立つ
祖母の忌はせめて手作りよもぎ餅
おしぼりも西瓜も冷やし客を待つ
兵庫県　野々口ゆう也

悟りとは別に山門くぐって来
朱のいろ美しく見る喜寿でいる
逢いにゆく歩幅に理性が残ってた
島根県　石田清泉

人生の一節妻が入院し
コスモスも咲いて国体引きよせる
顔見せに大臣ぞろぞろ災害地
島根県　藤原鈴江

待ちわびる亡妹に迎え火焚いてやり
憶い出を風と唄って一人佇ち
母さんと呼べば墓石の露が散る
（亡妹新盆）
大阪市　服部頼一

予約迄して入れ揚げる宝くじ

ドラマ見てウトウト寝入る妻可憐
舶来もセコハンばかりプロ野球
愛知県　国分甲子郎

老人の福祉も裏は粗大ゴミ
影噂聞こえよがしの声となり
方言のドラマ故郷を噛みしめる
青森県　岩淵一星

夕刊を見出しだけ読む上機嫌
日曜も寝かせてくれぬ草が伸び
象に似た肌を老眼鏡が見せ
東大阪市　金本不二夫

銀婚に妻と二人でたべた鮭
寂しさに一人砂浜かけまわる
故里へうずめた嘘に縛られる
泉佐野市　大工静子

覗き見の目が会う垣の外と中
げじげじの眉白一本が長くのび
間違うと通してくれぬ改札機
高知県　曽我部つぎお

通夜の席引く汐時がみつからず
長男に欲しい元気を姉が持ち
きっかけがまだ摑めない黙秘権
高知県　山下登舟

職引いて気安く日々をアロハシャツ
なすこともなき物憂さを蟻の列
身ごもれる事も一目に夏衣裳
大阪市　平井露芳

旅プラン先ず立て学生アルバイト
初穂料という名で境内駐車させ
かば焼きと肝焼きセットで買って食べ
守口市　長谷川司

太陽に抱かれ海辺にテント張る
クーラーもきかぬ窓ぎわ族となり
飛び立てぬ宿命背おう風見鶏
八尾市　椎尾公子

よろよろとゴキブリ出てきて軽く死に
キッチンでゴキブリ亭主と格下り
教科書で弱い日本叩かれる
大阪市　北山悟郎

軍歌には俺の心の詩が有る
老いの齢元手の要らぬ趣味に生き
決断を下せば何とかなるものを
米子市　宮本佳女男

札びらを切らねばならん日の男
鳩笛の土産父さん吹かされる
寝屋川市　立床晴風

犬年で犬がこわくて回り道
馬鹿になる術もおぼえて里帰り
岸和田市　吉水照江
奈良県　宮川古都路

きらめきの衣装にライトの虹当る
旧友に会えば昔の傷が浮く
東大阪市　坂本喜洸

立退きも素直に行かず三年目
乗客の少女がかばう白い杖
千葉県　中村有人

道具屋へ来て道具箱買っている
ひねくれた松を一本鉢に植え
大阪市　坂東倫子

教科書の終戦はまだ来ぬを知る
顔だけは立ててもらった年の功
高槻市　芦田静江

店の格保ってコーヒの木が実る
血へド吐く言葉がわかる原爆忌
枚方市　二宮山久

動きだす役所投書が効いたのか
意見する声がふるえている弱さ
山口県　高崎雀声

限界まで肌出し女夏過ごす
なぐられた先輩がつぐ同窓会
鳴門市　八木芳水

年寄りがいて助かりますと嫁が言い
ぬるま湯にあきらめ一つ浮いてくる
大阪市　山脇正之

今年もまたお盆のお布施跳ね上り
古道具屋を矢立欲しさに見て回る
橿原市　西本保夫

すぐ席につくと明るい顔になる
ゼスチャーは心にゆとり持つ電話
大阪市　山本炉斉

扇子持つ手ほどき強く躾られ
りんと立つ舞い初めの気魄堂に満つ
兵庫県　藤原捷一

配膳にトマト丸ごと病院食
その昔少女であった妻の背
吹田市　西岡豊

初蟬の命をかけたラブコール
香水の匂いに酔った恋の文
大阪市　山田妙子

真青な海が欲しいと須磨の浜
ローカル線思い思いの顔を見せ
島根県　岩田三和

アメリカの真似は出来ない狭い土地
子供らに読ませたい本古本屋
大阪市　小野風童

持って出た傘は先月買ったもの
助手席で走り出したら眠るくせ
東大阪市　三宅旭

水ぐらいなどとは言えぬ頃となり
針金に肉付けしたよな娘のダンス

愛染帖

橘高薫風選

今治市　月原宵明

愛枯れて腹の減らない日が続き
眉書の最後は寺総代と刷り

笠岡市　木山遠二

八十過ぎて吾子の掃苔ねんごろに
何はさて腰が曲らぬよう励み

和歌山市　堀端三男

青児画くおんなに女夢を持つ
花道の見えぬ舞台で舞い続け

高知県　山下登舟

涼しさをワイングラスに活けて見る
掃かれてもすぐに列組む蟻の列

青森市　工藤甲吉

迷いましたと蝉は膝の上
死んでいる蝉天空に腹を向け

藤井寺市　赤木和子

愛はよくばり一糸まとわぬものがほし
指するり躱して蜘蛛の巣の餌食

八尾市　高橋夕花

つつましやかに九月の鐘が鳴り始め
少しやつれてブルーの中で遊んでる

大阪市　小出智子

日記帖むかしはげしい性をもち
しまい忘れた風鈴とかわりない

今治市　矢野佳雲

証拠突きつける妻なら別れられ
何もなかったように布団がほしてある

高知県　曽我部つぎお

婦唱夫随砂丘の果ては見ず戻る
蝿叩き座右の銘のように置く

大阪市　藤森小雅子

追憶の中で夕日と手を繋ぎ
寄せ書の色紙に異端の字が滲み

和歌山市　松原寿子

ひたすらに愛を支えて花の首
向日葵のきいろ激しき別れ抱く

和歌山市　若宮武雄

業深い女に似合う遍路笠
裸踊り男売りだしたいばかり

唐津市　久保正敏

未決箱底にはコネの無い書類
辛い日の女綺麗に髪洗う

富田林市　藤田泰子

吹く風の心をうつす砂の紋
巻いたまま色褪せてゆく青写真

笠岡市　高木桃里

多島海故郷は地図に載っていず
良い癖は誉めず夫婦の四十年

和泉市　岡井やすお

身構えて催太鼓どんと打つ
ギャルみこし天神さんはご満悦

大阪市　朝倉利義

生きがいを聞かれりゃ孫と言うておく
四十年互いに我慢した顔で

大阪市　津山刀水

人間のようなロボットにはならぬ

富田林市　岩田美代

夢のない男の髭で青くない

町田市　竹内紫錆

味方までだましバントをとりやめる

伊丹市　樫谷寿馬

涅槃待つ仏の耳を打つ軍靴

寝屋川市　堀江光子

沈黙もそれぞれちがう部屋の中

寝屋川市　江口度

靴を磨いて今日もきれいな字を書こう

島根県　岩田三和

一色に塗りつぶされて気が狂う

唐津市　浜本久仁於

菩提寺の石父が住み母が住み

唐津市　岩崎実

建て代わる校舎に子等のシャボン玉

米子市　八木千代

七夕へ目立たぬ墨で吊す恋

大阪市　白石潔

竹光とさとられまいぞ素浪人

西宮市　林はつ絵

一ぴきが幹を去っても蝉しぐれ

米子市　野坂なみ

赤紙が命集めた日を憶え

平田市　久家代仕男

邪が触れると弾く鳳仙花

富田林市　中村優

しなびてる母の乳房に聴く戦　大阪市　神夏磯　道子
雷の恐さ忘れる月が出る　島根県　小砂　白汀
カウンターの背丈犯意をそそのかす　西宮市　奥田　光子
白桔梗細いうなじに勘の冴え　米子市　桑原　伊都
青空が今日の私を強くする　鳥取県　林　露杖
海まつり花火が北に届かない　寝屋川市　柴田　英壬子
頑張りが利かなくなった入道雲　羽曳野市　麻野　幽玄
かんたんに罪を犯して行くドラマ　寝屋川市　宮尾　あいき
お月様昼間の酷暑ご存知か　島根県　堀江　芳子
コマーシャルうちもカレーの真最中　島根県　堀江　正朗
蟬が鳴く僕もひと声真似てみる　鳥取市　河村　日満
朝夕の涼しさ昼を炎えたたせ　吹田市　西川　景子
たかぶりへ嫁が沸かしてくれた風呂　旭川市　朝倉　大柏
黙秘権だんだん自分に怖くなり　唐津市　仁部　四郎
裏方に徹して視野が広くなり　米子市　小西　雄々
宝船品行方正では乗れず　唐津市　浜本　千代
四季咲きのバラよ火遊び思うまじ　唐津市　木塚　素石
魚屋は蛸の旦那と苦笑い　大阪府　坂口　公子
無人駅或る日野犬が番してた　河内長野市　井上　喜酔
流れ行く雲が戦争笑ってる　大阪市　北　勝美
油蟬夾竹桃には寄りつかず　西宮市　妹尾　春江
京めぐり匂い袋もひとつ買う　倉敷市　藤井　春日
帯堅くしめて心もひき締まり　京都市　山本　規不風
金門橋の大砲日本に向いている　米子市　政岡　日枝子
青空を塗るクレパスは別に有る　大阪市　川口　弘生
国富んで海赤潮を病んでいる　兵庫県　野々口　ゆう也
老眼鏡世相の乱れ映りすぎ　奈良市　森田　カズエ
鹿が居て亀もいるから古都楽し　岸和田市　清野　こう
しっかりと踏まえて六十路の坂を下り　熊本市　高野　宵草
孫に逢うただそれだけの杖をひく　高槻市　田崎　あき子
城跡に戦い知らぬ二人連れ　鳥取県　鈴木　村諷子
術策の渦の中なる献酬よ　島根県　榊原　秀子
迎え火へしずしず仏の足の音　米子市　雑賀　美世
ロボットの裏でネジ巻く影法師　島根県　山根　峰雪
時々は馬鹿になれる妻でよし　今治市　越智　一水
本当のいくさは自分とであった　岡山市　川端　柳子
ありすぎて持て余すのもプライドか　米子市　宮本　佳女男
美を競う花それぞれの個性持ち　唐津市　新回　回天子
朝顔の花がしぼんで豪雨あけ　唐津市　筒井　朴竜
かなかなの蟬も日暮し深山法師　京都市　松川　杜的
東北弁通訳が一人居て欲しい　東大阪市　市場　没食子
クサミクサミ拒絶反応と君知るや　青森県　岩淵　一星
結納が立って静かになる姉妹　八尾市　松下　蕉露
停年で日記書くこと多くなり　八尾市　山下　みつる
じわじわと禁煙場所がふえて来る　枚方市　二宮　山久
肩書がとれて自分の顔になる　守口市　長谷川　司
SLに負けじとトンボ二重連

米子市　菅井とも子

残されぬ様に歩巾は揃えとく
宝塚市　吉田笑女

炎えつきた夫婦へ祭の遠花火
島根県　松本文子

私の恋もこんな姿か欠け茶碗
米子市　林瑞枝

エース汗の起伏の果てに悟るもの
島根県　木村はじめ

近所では妻の意外な社交性
貝塚市　行天千代

一円の支出ない日も有り暮れる
唐津市　田口虹汀

朝顔は今日も襟足見せて咲き
唐津市　浜本義美

悠々自適自家菜園のお守り役
高知県　赤川菊野

再婚へ夫の遺影が邪魔をする
仙台市　川村映輝

おふくろの味が無いから子が離れ
松山市　谷真風

前歴の嫌なところが顔を出し
岡山県　松本元江

散り敷いたむくげの丸い花むくろ
尾鷲市　渡辺伊津志

人間の瞳には波長が合う緑
京都市　都倉求芽

サボテンが太って太って夏暮れる
岡山県　岩道博友

廃屋の蔭で登山の荷を直し
和泉市　西岡洛酔

熟年と呼び名を変える背を伸ばし
鳥取県　羽津川公乃

無人駅自転車だけの昼下がり
米子市　青戸田鶴子

子から孫へ続く七夕深くなる
堺市　久井富子

石仏も伏目におわす炎天下
今治市　新居田胡頽子

丸やかな言葉で痛いとこを突き
水戸市　上鈴木春枝

気に入りのスカート減量目標に
吹田市　西岡豊

お見合いに世話人までが胸おどる
岸和田市　福島せつ子

ブランコの孫の目が追うちぎれ雲
羽曳野市　吉川寿美

遠州もギガンジュームに顔そむけ
鳴門市　八木芳水

近ごろのおしゃれを妻もよくこなし
大阪市　中西兼治郎

子宝がかあさんたらい回しにし
堺市　大道美乙女

過疎の村ただ風だけが橋渡る
和歌山市　浦野和子

竹槍を決して噛えぬ夏の雲
岸和田市　古野ひで

父の道子の道たがいに譲れない
岡山県　池田半仙

ちょぼちょぼの財布割勘馬が合い
羽咋市　三宅ろ亭

含蓄の言よく噛みしめ帰路豊か
西宮市　津山冬子

晴れた日は病魔も少し横を向き
堺市　高橋千万子

御堂筋二人の恋はまだ序曲
岡山市　原田凡太郎

人間の声底辺に満ち溢れ
鳥取市　若林一止

舌戦のこれも兵器とお茶を飲み
豊中市　満仲きく子

夕顔へ亡母への思いひとしきり
岡山県　稲岡正之

虚と実を巧みにまぜる熟年女
千葉県　中村有人

貴方にも一つあげましょ取って置き

★

投句先　〒560豊中市中桜塚3―13―15
橘高薫風宛（ハガキに三句宛）

NHK川柳募集

課　題　「**屋根**」　選者　**森中恵美子**

締切　**10月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3―43ＮＨＫ
大阪放送局〃老後をたのしく〃係

発　表　10月24日（日）ラジオ第一放送
午前10時から

―水煙抄―

秀句鑑賞

―前月号から―

白岩文衛

ハガキ出しそびれて逢いたくなってくる　紀市郁栄

流れ雲いちずな思い揺るがせる　奥山美智子

私の心を、お二人の作者がそのまま句にしてくださったような気がして、思わず声に出して読ませていただきました。十七音の調べに乗せると、一つの思いが更に深く確かなものになってきます。川柳って本当にいいものですね。

先頭が覗けば皆が見る隙間　麻野幽玄

よく来たとほめてやりたい五階の蚊　矢野佳雲

人生の甘いも酸いも知りつくし、それをぬけ出た人の洒脱平淡な味がここにあります。前二句とは又ちがった川柳のうれしさです。

生きている証しに腹も立ててみる　越村枯梢

見るもの聞くものに腹の立つ現代ですが、正直に腹を立ててばかりいては、とても勤まらぬメカニズムの中に、私たちは組み込まれています。でも、ロボットじゃないんですよね、私たちは。時にはスカッと腹を立てて、生ま身の人間の深呼吸をしなくちゃネ。

ちょっぴりは悪魔が住んでいてもいい　春城年代

ちょっぴり塩をふりかけると、西瓜は却って甘くなります。そして、生ま身の人間もまた…。人間って本当にかなしいものですね。かなしいが、うれしいものですね。

後を押す妻だけとなる向い風　朝倉大柏

ベレー帽父の苦悩を包むべし　藤原鈴江

冷たく厳しい向い風の日も、一家を支え、進んでゆかなければならない父の靴、父ってかなしい存在ですね。ですが、彼には、黙々と生涯その背を押し続けてくれる妻がいる。口にこそ出さないが、深く思ってくれている子たちがいる。心に沁みてゆく両句です。

東大は親孝行を教えない　山下みつる

しゃにむに尻をひっぱたいて、わが子を学歴社会にかりたてる世の親たちに、教育とは何か、とその原点を問いかけています。寸鉄人を刺す川柳ならではの佳吟ですね。

恋をしてすこうし花の名を覚え　氏林洋敏

手に句帖心に恋の手帖持つ　松下蕉露

恋は心のときめき、そして、そのときめきは詩です。恋をして花の名を覚えた、素敵です。心に恋の手帖を持っている、詩人ですね。川柳作家ですね。

母の旗うしろで小さく振るばかり　寺田裕美

少年時代、一寝入りして夜中に眼を覚ましてみると、母はいつも家族の足袋やその他の繕いものをしていた。ママゴンと呼ばれるような母ではなかった。家族のうしろで何やかやと心を配り、黙って祈ってくれている母だった。

人の子の心の底に、懐かしく、永遠に消えることのない母の姿を、この句に見せていただきました。

ネオン街水掛不動は苔のひげ　宮川古都路

雑踏の中にある仏様には、深山幽谷の寺や格式高い寺々の仏様とは一味違った、庶民のさまざまな煩悩や手垢にまみれ尽した親しみがあります。この句は「苔のひげ」にピントを合せて、確かな句にしています。

死ぬときは独り孤独になれておく　野々口ゆう也

人間だれしも一度は迎えねばならない終焉の時。その時のことを私も思うようになりました。この句は深い思いで読ませていただきました。―淋しさに堪へたる人のまたとあれないおり並べん冬の山里―なぜか、この西行の歌を併せ思い浮かべながら……。

句評リレー

岡田拳法（香川県）
植山武助（岸和田市）
岩田美代（富田林市）
野村太茂津（和歌山市）

名門校裏へ蜜蜂巣をつくり

舟木与根一

拳法―女王蜂は、孟母級の教育ママゴンなのであろうか。スポーツ界、芸能界にはパパゴンまでいると何かで読んだが、相変らずの名門校志望熱、それも裏金として大金をポンと投げ出す親までいる。蜂の一刺し、諷刺が効いて秀逸である。

武助―裏金の話題がよく流れる。蜜をせっせと巣に運ぶ如く、せっせと金が入る裏入学への諷刺「蜜蜂巣」で露骨な表現でぐさり、名門と言われる学校までもこんな状態では淋しい気がする。するどい句に敬服。

美代―拝見した時、思わず笑いました。秀才の面をかぶっての入学では蜂にチクリと刺されますよ。諷刺のある痛快な句ですね。

太茂津―誹風柳多留を読むと、その時代の世情風習を知らねば理解に苦しむことがありこの句も又同じように、裏口入学という現代の情報を踏まえた諷刺で、前三者の句評は当を得ているが――。なお私なら〝巣を構え〟にしたいところだが如何。

拳法―巣をつくりの方は自然体で、なんとなく名門校に憧れていると考えられる。巣を構えだと、前もって準備して機会を狙っているという積極性が感じられる。名門校裏とわざわざ裏を持出しているくらいだから、巣を構えの方が、より適切のように私にも思える。

武助―なるほど「巣を構え」と置いてみると、獲物は必ずやってくるであろう、と、裏口入学は今や茶飯事の如くである。との諷刺を強く感じられる。

美代―巣を構え、巣をつくり、読むほどにたしかに巣を構えの方が、よりいっそう強く諷刺を感じますね。蜜蜂の構えられた巣に、獲物がよって来るのが、より多いように感じます。何はともあれ痛快な句。

太茂津―前三者の評は適確、さすが要点を摑んでいて、蜂から連想する「チクリと刺す針」の諷刺を見事に句評に入れて居られる点には脱帽。それもこの句の訴え方が良いからであり佳吟となった。「構え」に同調してくれて楽しい句評となりました。

小児病棟みな美しい妻をもつ

小島蘭幸

拳法―母という言葉には、強さとか落着きを感じさせる。小児病棟には、美しいがか弱い若妻が適切ではあろう。初々しさ、人生の経験不足による痛々しさに作者は感動したのであろうか。

武助―私のひねくれ根性か「美しい親」とせず「美しい妻」と詠んだ処から、親である

前に女としての美しさを見せたい、着飾らない迄も病院へ来るのにまで、と思えそうな服装、大人から見た各妻の姿であろうか。

美代―小児科のお母さんだからまだお若い。お母さんより妻と言ってのけた作者もまだお若い故でしょう。小児病棟と美しい妻、何かしら美しい、ドラマチックな句

太茂津―下句の「もつ」が引っ懸って、いろいろ連想させられる。「みな美しい母がいる」ならば又異った解読もあろうが、作者は男性だから〝よその美しい妻〟を〝他人の花は美しい〟と見たか――。

拳法―女としての美しさを見せたい、よその奥さんは美しい。美しい妻をもつに対する解釈は、みなさんの方が作者の意図に迫っているようだ。それにしても味わう側に、解釈の幅を持たせ過ぎる点が気になる。

武助―私ならば、こんな表現は到底出来ないであろう。もっと勉強をしなければ、とも思うが、拳法氏の言われるように幅を持たせ過ぎ、とも思われる。

美代―美しい母とせず、美しい妻と言ってのけられた作者に、ほのぼのとした夫婦愛を感じます。

太茂津―「小児病棟」―「みな」―「もつ」と連繋してみるとき、「母がいる」でなければどうも私には滑らかに入って来ない。つまり上五は場所を設定しているので中七、下五へ飛躍し過ぎに見えてくる。私には小児病棟を充分知らないからだろうか。勉強不足の妄言だろうか。

幽霊を乗せる夏の夜のタクシー

香川酔々

拳法―ぶっきら棒でダンマリの運転手が多いと聞くが、客を幽霊扱いして、無愛想な態度を取っていると言うのなら面白い。

武助―人間に混って時折幽霊が乗り込む事もある夏の夜、と考えるなら、酔々氏の句ならばそれだけの句でない様な気がする。私の思考力の低いせいで申訳ないが深い意味が浮かびません。三氏の評に教わりたいと思います。

美代―納涼大会でも出て来そうな句、ビール片手に作句している酔々さんが浮かびます。少し飲みすぎたのかな。

太茂津―幽霊は「作者自身」であろう。そしておそらく夏の夜一人で帰るタクシーの中で、ほろ酔いに生まれた楽しい感じの句
酔々が、こんな句をニヤリ推敲していると運ちゃんの方が不気味に感じていたかも。

拳法―幽霊と夏、柳の代りにタクシー。ただそれだけのことで、感動を呼ぶようなものは全然感じられない。どうも誉めようがない。

武助―成程、酔々氏自身という見方、大トラを越して幽霊のようになった酔々氏、いや失礼……。

美代―太茂津先生の言われるように幽霊が「作者自身」とすれば、たしかに運ちゃんの方が怖かったと思えます。夏の夜の失言失礼。

太茂津―句評をする場合、作者が誰様であろうと、その一句を音読し再読して深く入ってゆくことにしているので、遠慮、配慮はせず愛情を持つ毒舌を吐く。その点でこの句はユーモアを感じます。

老眼鏡愛の化石が見えてくる

時末一灯

拳法―化石とは、特別美しいものではない。愛の化石は、青春の残骸とも言えるし、進歩や発展はないが、昔のままとも言える。熟年になって、あの時、もう少し気持にゆとりがあれば、俺の人生どんなだったろうか。または、あんなこともあったなあと言う程度なの

か、どんな愛の化石なのかわからない。

武助―若い時の苦労の積み重ねが熟年になって実を結んで来た。熟年の私としてもこんな時が来て欲しいものです、と思いますが、考え過ぎでしょうか。

美代―バランスの取れた句だと思います。人は皆それぞれに愛の化石を持ってます。熟年も過ぎ、やがて老境にたどりつきますと、その化石がなつかしく、愛しい。

太茂津―拳法氏の当を得た句評に賛。しかしどんな愛の化石なのかわからない、とあるが具体性を持たせる必要はないと思う。「愛憎の化石」ならもっと深化した句になっていたと思うし、老境？の私には化石になったのも多くあるし、活火山の境地もあり、楽しき哉人生である。余韻のある佳句。

拳法―愛という言葉そのものが漠然としているし、見えてくると言うのも釈然としない。もう一工夫すれば、もっとよい句になるのではなかろうか。

武助―老いて尚、楽しき人生を送りたい、こんな境地の句を作りたい、とかねがね思っているのですが。

美代―老いぬれば老いぬる程に、愛の化石それぞれにいとしいもの、と思います。女の私には痛い程よく解ります。

太茂津―一応はロマンチストの私にとって「愛の化石」なんて言葉を読むと、いろいろの場面を連想して、それからそれへ楽しくなってくる。おそらく灼熱の愛がだんだん冷えて化石となった、それが年を経て老眼鏡を透して見えだした。たしかに釈然としないが、余情があり楽しめる句である。

山椒の実おとなにならぬ方がよい

村上田鶴子

拳法―山椒の葉花実は、強い香気と辛味がある。大きくなってつまらぬ人になって欲しくないという素朴な気持は出ているが、それだけが親の気持ではない。どんなおとなになって欲しいのか分らない。山椒の実と言う言葉に酔い過ぎではないか。

武助―山椒の実は大きくならぬ内に食べるのが一番で大きくなれば固くてまずい、と聞く。食通のこまめな主婦、女ならではの句。素直に味わいたい。

美代―山椒は小粒でもピリリと辛い。おとなになるとそれがふやけて来る、とでも…。

太茂津―作者は自己反省しているのであろうか、おとなと仮名書きにしたのは一般的な代名詞であり、小粒でもピリリと辛い大人も居ることを思えば此の句は適当でない。拳法氏の〝酔い過ぎ〟に賛。

拳法―私は推敲する時、それがどうした、その奥にあるのは何か、と自問することにしている。私流に推敲すると、どうも物足りない。今一歩踏みこんで欲しい。

武助―素直に考えすぎたのでしょうか。太茂津氏の言われる自己反省……の方が当を得ているように思われます。

美代―女親から言えば判るような気もするのですが、今ひとつもの足りなさを感じます。

太茂津―作者の願望を訴えたのかも知れない。ピリリと辛いままで居てほしいという。つまり山椒の実のようなピリッとした吾が子を持つ作者（母親）の願望、「おとな」とはその山椒の実の持ち味が薄れる思いの比喩かも知れない。いずれにしても、美代さんの、いま一つもの足りない、に同調する。

ハンカチの折目で泣いて他人さま

水粉千翁

拳法―敗戦の翌年、長男の私が中学二年の夏、怖いばっかりの親父がガンで死んだが、

悲しいとか辛いとかではなく、やれやれと言うのでもない。死というものに初めて直面したせいか、それとも、肉親との死別に対する本能的なものなのか、とにかく涙があふれて止まらなかった。折目で泣いてとは、ものごとの真実を見極めた実に美事な表現である。

武助—下五の「他人さま」でお愛想で泣いていると言うように思えたのですが、余りにもありきたりで作句者の句意を裏切るかも知れません。やはり拳法氏の評が意を得ているだろう、見事な表現だと思う。

美代—他人様の不幸を折目で泣く、何と哀しい、その冷たさをハンカチの折目にたとえた、すばらしい佳句です。

太茂津—ハンカチの折目で……とは素晴しい、作者の表現に脱帽。本当の涙は、心底から同情し、いつとはなしに他人の悲しみにひたりきったとき、そして同情を通り越して、まさしくわが身の出来事にすりかわる。それこそ本物の涙であろうが……。大抵の他人さまは〝ハンカチの折目で〟の時点である。

拳法—私が人前で涙を流したのは、親父が死んだ時だけである。他人だから、人様の死別に対しても、ハンカチの折目で目頭を押さえて、お愛想に泣いてみせる程度なのである。私は秀句として推薦したい。

武助—私も実兄の死に際して、泣けて泣けてしかたがなかった。人前も何のその、思い切り泣くのもいいものだ、とも思った。私も両手を挙げて秀句。

美代—ハンカチの折目と言う涙に他人を強く感じます。しみじみ頭の下る秀句。皆様同様すばらしい秀句。

太茂津—「折目」「他人さま」に脱帽して、すばらしい句だなと思う。十七音字の中に、ピカッと光るものがあり、鋭い目で掴まえた他人さまの涙を表現して余すところなし秀吟。

時限爆弾に似て六時には飯が出来

林野甦光

拳法—時限爆弾と御飯のとり合わせはチグハグで、奇を衒い過ぎている。

武助—何だか淋しい気持になって来る。あわただしい生活、タイマーを時限爆弾に置き替えて、拳法氏の言われる通り奇を衒っただけ、という気がする。

美代—せめて夜の食事は楽しくありたいもの。タイムスイッチを時限爆弾に置き替えただけのように思います。

太茂津—作者が「時限爆弾」の比喩を見付けるまでの過程を思い遣ると、午前か午後か六時にセットした飯が出来た音を爆発したように感じたか、ちょっとオーバーな。早朝の六時であろうか。どうも〝六時〟は動くから〝正直に〟か〝真面目に〟すれば如何。

拳法—いずれにしても時限爆弾には、どうも感心できない。言葉の選び方が不用意だ。

武助—皆様が同様の如くお考えでしたね。

美代—私は夜の食事と思っているのですが朝でも夜でも、どうも時限爆弾はこの場合頂けません。

太茂津—「めし」に重点を置いたのか「六時」にセットしたのが六時に出来たことに重点を置いたのか、そして〝時限爆弾〟ほども「めし」が出来た現象に作者は重大な意義があるのか、とに角あまりにも、どぎつい表現、奇異な衒いが臭うてくる。こうなると午前午後はどちらでもよい。少し位遅れてもかまわないのだが、クソ真面目に正直にめしが出来た、という諷刺かも。

皆さん真剣に句との対話をなさっているのに引き込まれました。多くの句の中から抜粋して鑑賞する場合と異り、敬遠、逃避出来ない対峙の場に立たされ、とても勉強になりました。句評リレーは良い企画、評者は遠慮せず本音を書きたいものです。

第六回

全日本川柳大会参加と十日の旅 (三)

西尾　栞

三〇〇人を六階から降ろす二台のエレベーターは仲々渉らなかった。が外へ出ると、今晩も一泊する人、そのまま帰る人、飲む人等のグループが何時の間にか出来ていた。

蓮夫、甲吉、日満の諸氏と私の四人の歩幅がうまく合って、駅前通りをボロンボロンと歩いていた。青森市も大都会と同じく、しゃれた料理屋は日曜日は休みで、甲吉さんのお気に入りの店も生憎休みであった。迷うた挙句、小さな店の二階の階段を四人は上った。

ここも日曜がたたって、親父が留守でお女将さんの包丁さばきとなった。ここは昨夜、蓮夫さんが顔を出したところで、マダムと楽しいやりとりをしていた。ここでも、ホヤと帆立貝の刺身が出た。ホヤのあの独得の臭いには好き嫌いがあるだろう。三太郎さんは大変好きだったと甲吉さんは言い足した。

佐様、六時頃より十時半頃まで写真の通り二合瓶の林立は日満氏と栞。ビールは甲吉さんで水割は蓮夫さんという各々の好みで青森の最後の夜を楽しんだ。蓮夫さんを残して三人はとんちんかんの靴音をたてて階段を下りた。幸い、飲んだところはホテルの前だったので、ホテルの割烹へ甲吉さんと二人入って最後の〆めくくりをした。

左から栞、日満、甲吉、蓮夫の諸氏

『甲吉さん、青森は工藤姓が沢山あるね、パン屋もクリーニング屋も外科のお医者さんも、工藤だったぜ、川柳家にも甲吉さんに路子さんと、工藤祐経と何か因縁あるのかね』

『そりゃ、知らにゃだが——とに角多いんだば、井上剣花坊が大正七年に北海道へ渡る途次、青森所見という前書で、

青森や工藤の苗字ここかしこ

という一句を残して行ったぞや』と工藤姓を肴にして話してるうちは心も確か、足も確かだったが、ビール二本に酒三本あけるころはそろそろあやしくなって、もう帰ろうと固い握手で別れた。それでも僕は三〇三号室の僕の部屋の前に佇っていたのには不思議であった。ドアのノッブは回らない。ステッキの頭でトントンとノックを軽くした。軽くしたと思うているのは本人だけで、酒の勢いで相当な音であったらしい。向いも隣りも勘違いして、酔眼朦朧の中に変な顔が三つも四つもドアーからのぞいたのにはびっくりした。

女房は丁度入浴中で、腰タオルの儘でおそるおそるドアーを開けた。

『友、遠方より来たる、又楽しからずや』

先んずれば人を制す、先ず二度と来ない青森だ、久しぶりの遠来の友だ、という言い訳のかわりに『友、遠方より……』を繰り返すと『それは工藤さんが仰言る言葉なの、アンタが酔うた言訳に使う言葉じゃないの』

『なに！　工藤さんが言おうと、俺が言おうと同じやないか、馬鹿にするなッ』というてシャワーへとびこんだ。

大阪駅を発つ時、娘が呉々も言うた。

『喧嘩しなはんなや、旅に出て喧嘩したらみっとむなあっせ、仲ようしなはれや、折角の旅行だっせ、ええ歳して喧嘩せんときなはれや』というて手をふってくれた顔が目に浮かぶ。

シャワーから出ると機嫌は最高、ベッドへゴロリとなった。

それからがハプニングだった。状袋になった上の毛布を力まかせにめくって、力余って転んだのか、寝返りうってベッドから落ちたのか、判然としないが、とに角ベッドと椅子の間に大の男がはまりこんで思いきり、ものも言えんほど脾腹をうった。もうこうなると喧嘩どころの騒ぎじゃない。どうして起きたのか、起こされたのか、とに角、朝目が覚めるとベッドに寝ていたのはよかったが、肋骨の一番下の辺りが鈍痛があるし、背中に鋭痛感がある。空元気を出して、九時の恐山行におくれじとロビーに下りた。良い具合に日満、吉三両氏と前後して落ち合った。

十和田観光タクシーの中型車が時間通り九時に来て、助手席に栞、あとの三人は後部席にしてホテルを発った。今日も良い天気であった。車は陸奥湾の南海岸沿いに一路東へ東へと走った。そして野辺地という一寸した町に出て、ここから陸奥湾の東海岸、はまなすラインをむつ市へ走るのであるが、ここで先刻から、日満さんが話してくれていた、郵便貯金の道楽が頭を擡げた。一昨日青森で断られた許りだったので意欲喪失していた矢先であったが、野辺地という名の郵便局は二七九号線沿いにあって、何だか組し易しと思えたので、運転手にストップをかけて、局へとび込んだ。ここの係は女事務員で、青森の西郷ドンの孫のような言葉を吐かず、ニコニコとして受付けてくれた。私は青森の話をしようかと思うたが却って藪蛇になってもと思うたのでやめた。車へ戻ると首尾を心配していた労組の連中の如く、異口同音に結果をきいてくれた。そして上首尾をよろこんで、次々と通帖を回覧してくれた。

当然の郵貯よろこぶ変なこと

（つづく）

富田林市文化祭参加

市民川柳大会

日時　**昭和57年10月31日**（日）
会場　富田林市役所・二階会議室
　　富田林西口駅下車すぐ
　　午前十一時開場・締切一時三十分
講演　阿部柳太
兼題　「手毬」　小出智子選
　　「ブランコ」　河内天笑選
　　「拇印」　森中恵美子選
　　「二三日」　定金冬二選
　　「裸婦」　橘高薫風選
　　「階段」　西尾栞選
　　「市長」　阿部柳太選
席題　当日一題
賞　一位より二十位迄　秀句賞
会費　一、〇〇〇円
　　懇親会費　二、〇〇〇円

主催　富田林市文化連盟
　　富柳会
後援　富田林市

若本多久志氏を偲ぶ・・・

昭和57年8月16日示寂
告別式・8月18日　正念寺（西宮市）
法　名・帰真院釈泰成
（俗名　真彦　享年80歳）

追悼の辞

中島　生々庵

八月十六日朝早く西宮市香雪記念病院より若本多久志氏逝去の報を受け、耳を疑う気持で一杯であった。亡くなられる十日程前ご本人より電話を頂き元気な声に喜び話し合ったばかりであった。皆様もご存じの通り、多久志氏は温厚、誠実な性格の上、篤信家でもあって、川雑に引きつづき、川柳塔発足以来も熱心に本社発展の為に尽力され、副理事長として本社のためになくてはならぬ大切な存在であった。又小生個人としては小生発病以来度々お見舞を受け早く元気になってくれと励まして頂き、心を開いて話し合える大切な友人であった。よもや先に亡くなられようとは思いもよらぬ事で、その痛手の大きい事を痛感する次第である。御令息のお話によれば、入院され意識不明瞭の中にも柳友の名を呼び柳話の事にふれ、いかに川柳に打ちこんで居られたかは計り知れぬものがある。

氏は浄土真宗の信仰厚く、極楽浄土へ安住今はただ彼岸の地から私達を見守って下さる事を信じます。私も今少し完全に回復した暁は筆をあらたにして皆様と共に氏の思い出を偲びたいと思います。

御冥福を祈り、同時に私達にご加護賜わらん事を心からお禱り申上げます。

合掌

蔵書の整理

礒野　いさむ

神戸の春のふあうすと川柳大会の選者席で隣りあわせに坐ったとき、「いま蔵書の整理をしています。戦前戦後の番傘が二百冊程ありますが貰って頂けませんか」との申出を多久志氏から受けた。喜んで頂戴しますと答えて一ヵ月余が経過した。再度はがきが来て、いろいろお話もしたいので拙宅まで取りにお越し下さいますかとお招きをうけた。私は愛書家の神谷娯舎亭氏と同道して六月の昼下り西宮東口の多久志居を訪うた。

ボール箱2ヶに詰められた番傘誌の中には古書店の手で集められた昭和初期の貴重なものも含まれていた。川柳雑誌・川柳塔誌だけを残して他の柳誌は整理、手離されたらしい。本に目のない私たちは書斎のあちこちのある珍書奇書、大家の色紙、海外旅行のアルバム、ハワイ訪問川柳団の記録などを話題に、すっかり腰を落ちつけてしまった。

老境に入って身辺の整理をしている。家族へ残す川柳家多久志の姿を一冊にまとめましたよと大型のアルバムを示された。親の蔵書書画、写真類に関心のない子供たちは屑同様

昭和56年９月16日生々庵主幹を見舞う好郎、多久志、１人おいて栞の各氏（左から）

の処分をするだろうから、元気なうちに整理するのだと、繰返し語られたのが、今も耳底に強く残っている。

帰りは私の車で送ってあげましょう。足は弱っていますがハンドルは確かですと言われて恐縮した。八〇歳多久志氏の鮮やかなハンドルさばきに感心しながら、黄昏の旧阪神国道を東へ走った。車中でも話ははずみ、多久志氏一流の人生観、処生術を聴くことができた。

あれからわずか一年半…訃報に接して胸をしめつけられた。正念寺の告別式に飾られた遺影に向って、娯舎亭と私は改めて御礼を申上げ、適切な蔵書整理を実行された仏に敬意を表した。

故人に頂いた番傘誌は西天満の番傘本社の書庫に大切に所蔵している。

嗚呼　多久志さん

川村好郎

多久志さん

なぜ急逝されたのですか。どうして私より先に他界へ旅立たれたのですか。知らせを聞いた時、茫然自失全身が血まで逆流する思いです。「九十歳までは頑張ろう、生き抜こう君と同盟を堅く契おう。君もしっかりやれ」といつも仰しゃったのになぜ破約をされたのですか。

多久志さん

「川柳は人間陶冶の詩」と教えられた麻生路郎師を敬慕し、川柳を片時も忘れず情熱と執念をもって多年の間、作句指導に療養管理を忘れず、病魔と闘い一生懸命だった。ほんとうにいつも私は頭が下る思いがしていました。だのに遂に白内障にも侵されたのになんと最近の川柳塔六六二号七月号には目次下に、八月号には川柳塔選を発表載せられたとは。

若本多久志作品抄

袈裟衣脱げば毛脛の凡夫なり（代表句）

「私達」から

計量器力んでみたが十二貫
乗り遅れままよ靴でも磨かそか
三等でよいとおふくろ困らせる
天守から昔殿様見た桜
又かいなと大阪城を案内し

「老いの坂」から

民主主義俺の老後は寂しかろ
ホルモン剤人知れずこそ飲んでおり
スト権はこっちもほしい小企業

「続・老いの坂」から

老人の七癖正にあてはまり
漢薬の匂いおならに出て寂し
ワッハッハと笑って命終らんか

その後の最近作から

もう一度会いたい人がひとりあり
重荷おろして人生は何だった
香を焚き書斎にこもる安らぎよ

多久志さん

数年前あなたから「掲示訓」並びに「続・掲示訓」を頂きました。あなたが尼崎日産自動車会社の会長の時、社員諸氏へ人生の指針として執筆、頒布刊行されました。それはあなたの熱意と誠心の輝かしいもので、私は今なお座右の書として手離さず、教えられてい

るのです。

それだけでなく、川柳を通して数十年間、親睦を頂き、打ち解け語り合い教えて下さった。名勝古蹟へ度々愉快に共に旅行しました。各大会句会の吟行にも加わり、素晴しい思い出でした。ああ、もう二度と一緒にゆけないのですね。

多久志さん

　老いは老い命かぎりの箸をとる

　その度にこれが最後の旅日記

悲しいあなたの遺句か。何もかも遺書にも残されました。きっと極楽浄土に抱かれ安らかに歩いていられるにちがいない。

私も一足あとから随いて参ります。どうかお導いて下さい。

若本多久志先生を偲んで

伊藤茶仏

博識で温厚篤実な若本多久志先生が急逝されたとのお知らせを川柳塔社の橘高薫風氏よりいただき、せめてご葬儀になりと会葬致すべき筈のところ、小生昨年十二月腰痛を病み一人歩行が杖に頼る仕末で、御生前のご交誼を思うにつけ、自分の不徳の致すところと慙愧に堪えません。

若本多久志先生との出会いは、金沢日産自動車会社に勤務されていた頃で、私も金沢に近い小松市で小松機械製作所の経営の任に当っていた頃である。趣味の川柳を通じて別懇にして戴き、その後、西宮市に移住されてからも、時折りお電話を下さるなど、親身のおつき合いをさせて頂きました。

たまたま私のペンネーム「茶仏」について信楽焼で有名は近江の国信楽に小さな祠があり「茶仏観音像」が祭られているとの御報告を寄せていただいたのも若本多久志先生である。

先生の研究熱心はどんな些細なことでもとことん研究を極める学者肌の人でもあった。

茶仏観音の由来についても、ご自分で納得されるまで車で足をはこばれ、その都度ご報告を受けるなど若本先生生前の御好意は、語りつくせぬ親身なものでありました。

薫風さんのお便りの一節に若本多久志氏は金沢の出身故にとありますが、私との対話のふしぶしに「僕は広島が生れ故郷らしいんだが広島については記憶がないんだ」とよくもらされた記憶がある。そんな時の多久志さんは、いかにも淋しそうな顔つきであられた。

私のように苦労らしい苦労もせない者にとって若本先生の越し方は想像も出来ないが、人をそらさぬ言葉のやさしさ、商人で商人らしくない温容は先生の人格そのものであると私は言いたい。若本多久志先生の御冥福を祈って合掌再拝。

念仏申し候えど娑婆がよく　多久志

この句を座右銘として追悼の辞と致します。

若本多久志さんを悼む

傍島静馬

予て多久志さんの病気療養中のことは聞いていたが、こんなに早く亡くなられるとは夢にも思っていなかった。毎朝の勤行には必ず仲良しグループの平穏無事を祈念しているがその中の柳友の一人がまた欠けてしまった。

多久志さんは自動車運転のベテランで、自分もかつて句会の帰りなど同方向なのでいつも便乗させてもらっていたが。過ぐる年の丹波篠山デカンショ祭には態々拙宅まで迎えに来て頂き、篠山城趾の広場で先着の柳友連と共に踊りの輪にはいったのが強く印象に残っている。その後兵庫県篭坊温泉羽束の湯へは栞、好郎、小松園氏と静馬の四名が多久志さんの自家用車で一泊の清遊に出掛けるなど懐かしい思い出が尽きない。

大既白浜荘への旅には多久志、栞、小松園、形水氏いずれも夫人同伴、それにチョンガー組好郎、圭井堂、静馬の三名は別室で雑魚寝の羽目となったが一行十一名ちょっと風変りな一夜を味わった。

その一年後に兵庫県美作湯郷温泉たつみ荘

へ多久志、栞、好郎、圭井堂、形水氏と静馬それに紅一点小谷葉子さんも加えて賑やかにはしゃいだ。宿の下を流れる渓流に河鹿を聞き、また野趣溢れる野天風呂に何度もはいったり、また夜の気分を求めて所謂温泉横丁をぶらついたが、その道の通人連中を驚かすほどのものにはお目にかからず聊か失望気味でご帰館至極おとなしく床についた。

更に一年後、同一メンバーに小松園氏を加え、若狭三方五湖めぐりなど機会ある毎に誘い合わせた同好グループ「柳々会」のメンバーも寄る年波にいまや栞、好郎、小松園、形水氏と静馬の五名が残るのみ、時の流れとは言えひしひし迫る寂寥感をどうすることも出来ない。

古いアルバムのスナップに多久志さんはあまり写っていないが、これはいつも多久志さんに撮影の労を煩わしていたせいで、いまさらながら大へんすまないことをしたと思っている。

筆まめが俳画も添えて旅便り

これは数年前、多久志さんから貰った色紙の句だが、さながら私を対象に詠まれたような句で、こよなき遺品として永久に保存しておくつもりである。多久志さんどうも有難う。

まだまだ思い出は尽きないが、どうか安らかに御冥福をお祈りします。

合　掌

路郎師を囲んで（前列左端が多久志氏）

川柳の「絆」

西　田　柳宏子

川柳塔社副理事長・若本多久志氏が今朝亡くなられたとの報せが、薫風氏の声で届けられたのは京の送り火大文字も終った時刻頃だった。一瞬耳を疑い、微かな狼狽に声も出ない。続いて哀惜の情がこみ上げてくる。瞬時の間に目まぐるしいほど多久志さんとの想い出が走る。

翌八月十七日午後七時のお通夜に会社から直行する。多久志氏のお人柄を偲ばせる沢山の弔問客……定刻始まった読経に続いて随意焼香となり退出してゆく……いつの間に降り出したか小雨の中境内のテントに入り、形水氏、薫風氏、小松園さんの奥様と（一番上の娘さん）道代さんの五人でボソボソ想い出など話合う内に、いつしか天幕の内は我々だけになる。多久志氏の御長男芳彦氏が来られ話の中に加わられる。

開口一番「大往生でした」とぽつり一と言急に病改まり意識も聞く方は判るらしいが呼吸困難を来たしたのが八月十五日、そして八月十六日朝にお亡くなりになられたとの事だった。暫くしてポツリポツリと話し出された芳彦氏の、亡くなられる直前まで川柳を思い続けて居た多久志氏の熱意は、所謂老人呆け的徴候は見受けられたにもせよ、強く私達の胸を打った。

七月二十七日から七月三十一日まで西宮渡辺病院に入院されたそうである。今迄いつも入院していた香雪記念病院と異なり、看護婦さんの馴染もなく、独歩患者として付添もなくて、精神的負担が大きかったらしい。この間看護婦さんに「近く西宮北口の会があり、ちょっと稽古したいからここを貸して下さい。それから

人を集めて下さい…」看護婦も笑いながら、「どうぞここでやって下さい」と立去ったまま…暫くメモらしきものを片手に佇って待っていて、「誰も来ないナー」と部屋へ戻ってゆくが、廊下の各部屋の名札をみると苗字に雅号が結びつき……例えば西田某と名札があると……部屋を開けて「柳宏子さん…多久志です…」と這入って行く。柳歴も永く、知己も多い多久志さんだけに、各部屋の名前は殆んど柳人に結びつき片端から訪問してゆく、部屋の人や付添が吃驚して「うちにはそんな人居ませんよ、お爺さん部屋間違いですよ」と押戻されたり、「タクシーなんか呼んでいないよ」と追い返されたり……。

しんみりした芳彦氏の語り口に誘われた小松園夫人の目頭を押えるハンカチの白が目立った。雨は静かに音もなくテントを包むように降っている。

薫風氏の話によると西宮北口句会のことをとても気にかけて、出題は例によって好きな「絆」とするとか、又川柳塔の推薦句の選出や、目次下の執筆依頼などに対しては、二度も三度も同じことを繰返して手紙や、電話やで連絡や問合せが来る。

私達柳人としてこの「川柳に対する一途な思い」を単に老人呆けと言い切れないものを感じる。

更に私は翌十八日葬儀には到底お見えになれないだろうと思っていた中島生々庵理事長が夫人に支えられ式場に来られたのに驚くと同時に、路郎門下の川柳によって結びつけられた強い絆を今更のように教えられた。

夫人をはじめ与呂志氏と私に支えられ、高い石段を焼香に昇る生々庵氏は「どんな気持で一段一段をふんばられたか」「どんな気持で焼香されたか」……流れる涙を拭おうともせず、喰い入るように祭壇の多久志氏の遺影に目を真直ぐに注ぎ「一緒に死のうと約束したのに先きに逝きよった……」と一ト言。

生前既にこまごまと御家族に死後の葬儀のやり方を指示され、立派なご挨拶まで準備、簡素にして厳粛、そして会葬者にまで気を配った葬儀に心打たれたのは私だけではなかった筈である。

可愛がって頂き、色々御教え下さった多久志氏の最後を飾るエピソードを書かして頂くのも多久志さんの最後の御配慮――絆――かも知れない。玆に謹んで

帰真院釋泰成　俗名　若本真彦

氏の御冥福を心からお祈り申上げてペンを擱きます。

合　掌

若本多久志先生を偲んで

西宮北口川柳会幹事　朝山千世子

噫！　想い還せば八月六日、先生がお亡くなりになる十日前、とても元気なお声で九月北口句会の日を聞かれ、兼題を「絆」にしてほしいとのお電話が最後で今でも私の耳に残って胸が熱くなる思いが致します。

御葬式の日は先生の御逝去を悼むかのように涙雨が降りしきって会葬のお寺には川柳塔社から多数諸先輩の方々、特に感激致しました事は中島生々庵主幹がかねて御病気中のお体を押しての遠路御会葬御焼香に馳せ参じられたこと、今更ながら御友情の深さに胸打たれる思いが致しました。当北口句会からは、私の外婦美子、春江、はつ絵、みつ子、冬子、光子の六名が会葬御焼香させて頂きました。

その前一般会葬者に頂いた御供養に添えて、多久志先生御遺言〝お別れの言葉〟には、かねてより先生には親鸞聖人に深い信仰をお持ちになって居られたことを感じ、このたびの御葬式に際しても香典、供花一切を御辞退されたこと深く感銘させられました。偶その御遺言書の末尾に生年月日が記されて居りまし

若本多久志編著書

- □句集「親ごころ子心」（昭和34年5月）
- □句集「老いの坂」（昭和42年5月）
- □随想集「凡愚のたわごと」（昭和47年2月）
- □訓言集「人づくり」（昭和54年2月）
- □句集「続・老いの坂」（昭和54年6月）

て不思議と私と一年前の同月同日六月十五日でしたのには驚きました。

なお先般川柳塔本社句会で当北口句会同人妹尾春江さんが栞先生選の「道標」で「天」に入選され、早速、多久志先生へ御電話で報告されたことは亡先生御生前最後の御奉公だったと存じます。

尚末筆ながら当北口句会に於て指導者としての先生の遺句、数句を御目にかけまして亡先生を偲んで頂く縁と致したく存じます。

初対面心に鍵をかけて飲み
湯の宿で理性いささかくずれだし
目的を秘し献金でつなぐ腹
値上げ値上げ塩は安さに我慢する
雑草にたとえて諭す母の知恵

合掌

若本多久志さんの死を悼む

福浦勝晴

傘寿なお凡夫の欲は九十まで

当年正月、多久志さんから戴いた寒中見舞状の末尾に付記された偽らざる氏の近況句でとてもお元気そうである。一時ご病気の由であったが、その後快復され、川柳塔の近詠選に、はたまた執筆、柳話等で活躍されていたはずの多久志さんだった。そしてそれから八ヵ月目の、八月十七日付の朝日、毎日両紙の訃報に接し、私は唖然としてしばし自分の眼を疑うほどだった。氏が白内障のため川柳塔の選者を辞退される旨はすでに誌上で承っていたが、だからといって、まさか突然、幽明境を異にするあの世へ蓋然として旅立たれようとは、夢にも思っていなかった。

私事で恐縮ながら、私が正式に柳界に入ったのは昭和23年、岸本水府先生のご指導を賜ったが、その後二つの柳社を遍歴してから、戦後勃興した時局風刺ミニ・コントのグループだった不二田一三夫さんのすいせんで塔社同人に参加させていただき、早や十年近くになる。この間、川柳塔の近詠欄で多久志さんその他の諸先生方のお世話になって来たが、いつだったか、スランプとマンネリで苦しんでいたとき、その様子を私信で多久志さんに申し上げた。すると二、三日して、さっそく懇切丁寧なご返事を頂戴した。氏自身もかつてそんな境地に陥った経験があり、それについて路郎先生からいろいろ論されたが、その節の路郎先生からの書翰をわざわざ同封の上いろいろご親切なご教示にあずかった。お手紙は今なお手許に保存しているが、それが哀しい遺品になってしまうとは――。それから二、三回文通させて貰ったが、文学や仏教の世界に詳しい博学の多久志さんであった。

衆知の通り、氏は苦労の末に社長職として一家を成したご仁。資性温厚にして虚飾の風なく、謙虚で地味でいわゆる外柔内剛型の、しかも心のシンの非常に強いお人柄だった。そんな氏の性格を裏付けるように、五十四年に刊行された句集「続・老いの坂」に見られる作品は、すでに主幹生々庵先生がその序文で指摘される如く、決してオーバーな表現などしない真実性に満ちた格調ある句ばかりである。永年の豊富な人生体験に基く氏の作品はいぶし銀の如く、磨きがかかって川柳塔にとっても柳界全体にとっても重きをなす得難い存在であっただけに、その悲報はまことに惜しまれるものがある。

何十年来稀な異常の夏が漸く過ぎて、やがて快適のシーズン。その楽しい読書や作句の秋も待たずに忽焉として鬼籍に入られた敬愛する多久志さんのご冥福を心の底からお祈りしつつ、とわに御霊の安らかならん事を願って、拙い一文を捧げます。

合掌

★

■葬儀参列者（敬称略）

生々庵・小石・いさむ・伊升・眉水・娯舎亭・栞・水客・紫香・潮花・彤水・柳宏子・鬼遊・吸江・史好・与呂志・文秋・一二三・寿馬・健司・白宗・柳伸・千世子・婦美子・春江・はつ絵・冬子・みつ子・光子・あいき

★★★★

アメリカを覗く〈1〉

山本規不風

〃KBS京都放送のミュージックジョッキー滝トール、寺嶋千恵子とアメリカへ行きませんか〃。ヤングが多いというのでチャンスに乗ることにした。東洋易学家元吉田龍永学長より斯界高揚人心救護の命を受ける。大阪15時発、成田経由日本航空ボーイング707の機上の人となる。AよりJまで横10列の座席縦ナンバー54で五百余人満席、更にファーストクラス四十人余も一ぱい。F席が当って窓際かと思っていたらド真中。矢張り雲ばかり見ていても、ヒコーキは窓際が良いのだが残念。機内食が出ると思い夕食を抜いたのに、なかなか出ない。コーヒーや紅茶で待つ間にやっと準備が始まる。時に20時30分。部厚いテキにヤサイサラダ、デザートと、お寿司にざるそば、腹の虫も納まる。映画を見ているうちにウトウトとする。ざわざわとするので目が覚めたら御来光だ！との声。金色の雲の海を滑るように飛ぶ左前方からの太陽が、初めてお目にかかる神のようだ。時計を見ると23時だ。ナアンだ日本時間で夜中なのだ。只今米国時間四時三十分、と掲示が出ている。ボケッとした顔の前にもう朝食が運ばれる。まだ減ってない腹に無理に詰め込んでレシーバーの音楽を楽しんでいる間もなく、ロスアンゼルス空港だ。十時間余り経ったとは思われない。意外に早々着いた気がする。横文字ばかりが目につくことと、スケールのムードがアメリカらしさを感じさせるが空港としての珍らしさは薄い。日本のエアーポートが立派になったからかも知れない。フランスのパリの空港の方が近代的な新しさを感じるようだ。

入国手続きに長くかかる。パスポート検査に順番を待つ人達を見渡すと半分位が女性である。女性優位の国を自覚する。二年後のオリンピックに備えてロス空港は蜂の巣を突いたような工事の最中である。出迎えのバスを見付けるのに一と苦労だ。空港からロス市市街まで約五十分。ハイウェーならぬフリーウェーを走ってホテルオータニに入る。なぜフリーウェーかというと、料金所なしで無料、障害物も信号もなく総てに自由と言う意味の由。さすが車検なし自由の国である。但し速度制限は五十五マイルですぞ。

ロス市内のヨチヨチあるき

カリフォルニアの背骨と言われるのが幹線フリーウェー七車線の復線で十四車線の広さこれの支線としてサンタナフリーウェー、ハーバーFU、ロングビーチFU、サンタモニカFU、サンデイゴFU等10車線の広さで各地に連らなって走っている。これだけ広い道路もラッシュ時は渋滞するらしい。ロス市の人口が850万人。一家に三台の車である。渋滞も仕方がないですね。トヨタ、マツダ、ニッサン等の車が特に目立って走っている。時々バスに手を振ってくれる。日本人旅行とスグ判るらしい。ドジャースの野球場を右に見て少し行くと、右手の山の頂きに「ハリウッドの丘」と言う大看板が見える。遠く離れてハッキリ見えるので、よほどの大看板だなと聞くと、一つの字が4階建ビルの高さで十枚並んでいる。費用が七百万円。アメリカらしい。その近くに「聖なる丘」というのがあってクリビス天文台も近い。そこからはそれこそ世界一のロス市の夜景の素晴らしいのが見られ

る由。車はハリウッド大通りからサンセット大通りを漫歩する。この辺は映画館がギッシリと立ち並んでいる。あまり大きくなく100人から200人位しか這入れぬ程度のものらしい。ナイトクラブやライブショー、ディスコ、ライブハウス、又ミュージックのメッカとしても名高い。レコード店や楽器店等が軒を連らねている。ディーン・マーチンの店と知られているディノス・ロッジもここにある。男性を楽しませるといえば、貴族のお嬢様とも思われる美女でも暇とマネーで心よくお相手をしてくれる。そんな女性がロマンの夜の街をアチコチで待っていてくれる話である。

今夜は如何と言うので予約料70ドルを払っておく。これは山城レストランという日本人オーナーのディナーショーで、「狂人の顔になりませんか」と言うのである。今夜は楽しい狂人になろうと胸がワクワクする。女性料は別払いですよ、と耳の裏で聞える。ギョッ。

車はビバリーヒルズの通りに出る。この道は右と左で月とスッポン程の違いが一目で判る。左のロスの街並はダウンタウンのように雑然として汚ない。右は高級住宅の並ぶ道でチリ一つない立派な環境である。首を左右に振りながらロデオ通りに来る。商店らしからぬビルが偉容を誇る。一桁も二桁も違う値札がグサリグサリと心臓を脅かす。金、銀製品、宝石、指輪、時計、高級家具に華麗な婦人服飾品等目をみはるばかり。因みに一寸目についた店の名を挙げて見よう。

カルテー。ランバン。グッチ。エルメス。ポロ。サンノーラン。セリータ。ナザレロガグリレーロ等々……。

十階位の正三角形銀色の中型ビルが、見事に二つ並んで門のように輝いている。スロンシャーベルと言う。一九六四年アルミ会社の社長の発想で造られたもの、殆どアルミ材であるから銀色である。珍いビルである。その横がセンチュリーシチー、最近は特に日本でも有名になったセンチュリープラザホテルが悠然と建っている。そのセンチュリー街の一角に一九二〇年時代の映画スタジオが残されている。60年余りも昔、即ちカポネの時代の懐かしい映画が思い出されてくる。そんな感懐をめざましてくれた急停車はロスアンゼルスの大名物チャイニーズシアターに着いた。東洋的に中国風の楼閣を思わせる正面入口の両側に二メートル大の狛犬一対が迎えている。正面入口前には約二メートル幅で二十メートルの長さの屋根付き廊下も中国風で落着いた風格です。その前庭に一九二七年以来の有名なスター二百人以上の手形と足形がサイン入りでコンクリートの床に印されているのです。マリリンモンローや三船敏郎のものもある。その一つ一つの手形に触れ足形の上に乗って在りし日の映画に想いを馳せながら夢心地になっている肩を、柔らかい女の手が叩きます。はっとして振り向くと五歳位の可愛い白人少女です。早速抱き上げてご機嫌をとっていると、ママらしき若き美女の恐い目に逢ってたじたじであった。

ロス市は芸能の町と言われ諸条件に溢れている。スポーツの都としても市民は自負してると言う。テニス場は市内各所に無数にあり陸上競技場野球場ラグビー、バレーボール、フットボール等使用料は皆無料である（一部に有料があるが5ドル位である）競技場も立派なのがあった。これは観覧席が少しで、日本の半分位しかないように見える。

（つづく）

◇

川柳塔社常任理事会（9月1日）

出席者＝栞・薫風・鬼遊・紫香・水客・潮花・太茂津・与呂志・史好・吸江・形水・柳宏子・岳人・文秋・酔々

〈議事並びに報告事項〉

★57年度路郎賞・川柳塔賞が決定した。この詳細については、別掲（十月号）する。

★自選句欄（別わく）を充実するため、新らたに自選作品を提出するメンバーを拡充する。（十月号より実施）

★同人総会に備えて9月11日常任理事は再度協議する。

（酔々記）

■**10月**の常任理事会は**1日**（金）

少女

栗林光夫選

少女歌手淡谷のり子の意に添わず　登美也
少女趣味残した部屋で嫁きおくれ　どんたく
孫あやす妻に少女の声が出る　昌道
ひまわりの様な少女で憎めない　綾珠
持っている秘密へ少女鍵をかけ　兼治郎
小引出し少女の夢が眠ってる　かすみ
少女もう母そっくりな叱りよう　佳雲
誘蛾燈或る日少女は迷い込み　洛酔
手鏡へ少女少しずつ媚びる　早苗
少女もう男欺く演技する　春日
負けチームほど華やかなチアガール　みつ子
制服を脱いだ少女に檻がない　ゆう也
少女もう鏡と語る紅をさし　胡頽子
ままごとの少女は皿に夢を盛る　和子
少女のカバンの鈴が恋を知り　悟郎
チャンネルをハイジに回すまだ少女　木魚
百人に聞けば少女にして置かず　弘朗
手話をする少女の瞳に救われる　裕
爪をかむ少女小さな嘘を言う　里風
少女もう翔びたいような羽根を着け　義美
それからの少女の部屋に鍵があり　克枝
少女もう兄を男として見る目　文平
子と遊ぶ妻が少女の貌になり　悠泉
母からの脱皮を少女考える　道子
少女もう蝶になる日の夢を馳せ　軒太楼
シャボン玉少女の胸はこわれそう　柳子
剃りこんだ眉から少女抜けていく　婦美子
夏帽子の中に少女を置き忘れ　可住
一本の線がふくらむ少女の絵　実
笑わない少女を囲むメロドラマ　伊津志
隙のない少女プールの水を見る　静歩
赤飯を炊いて少女おんなにし　与呂志
グラビアになって少女の美しさ　喜酔
逞ましい少女が嗤う花言葉　幸一
いつからか少女は終い風呂を選り　宵明
白馬の騎子待って少女はいつか老い　満津子
伏目がちの少女は夢二から跡絶え　枯梢

佳

少女今水蜜桃のような色　三五島
恋などは知らぬ少女の膝小僧　三吉
健ちゃんを泣かして来たと言う少女　七面山
反核へ少女の記憶叫び出　美穂
美少女の青い乳房に会う画廊　景子

人

ダマシ舟マダムは少女になっている　武水

地

指切りの好きな少女で裏切れぬ　重人

天

赤い靴はくと少女はしゃべり出す　潔

軸

風呂上り少女おんなの香をまとい

屑

崎山美子選

屑篭のメモから割れた贈収賄　潔
星屑として衛星の飛びつづけ　綾珠
鋸屑でぐっすり睡る車海老　宵明
再生をされてトイレの白い紙　克枝
屑のよに賽銭箱に札が舞い　一止
鉄屑がまたよみがえる溶鉱炉　悠泉
屑かごもプライベートな娘の個室　文子
星屑が降る海亀の涙線に　景子
紙屑も封印トップ企業です　重人
屑篭に噂の元となったメモ　重人
輸入する国と思えぬ屑捨て場　はじめ
星屑のひとつひとつにあるロマン　ひで
パン屑を道路にまいて鳩を待ち　露芳
屑箱の中にいつかの虹がある　はつ絵
星屑が五線譜に乗る小夜曲　浪速子
野菜屑集めて農家の夕仕度　和子
屑篭に実らぬ愛が葬られ　柳子
屑みかんビタミンCとして盛られ　里風
単調な生活につもる屑の彩　富子
へそくりも一緒に屑屋に持ってかれ　軒太楼
星屑のような吾が家の灯に帰り　久仁於
屑でない少年目玉の輝ける　三五島
糸屑もともにねぎらう針供養　胡頽子
内職の糸屑旅へついて行き　かすみ
人の世の屑になるまい亀の足　寿美
人間の屑にも生みの親がいる　きく子
紙屑にするには惜しいビラの裏　幸一
屑に出す出さぬと明治昭和もめ　悟郎

一路集

定退の身につまされる粗大ゴミ　公一
紙屑の中に本音が書いてある　優
屑入れへぽい捨てする人拾う人　みつる
観光へ屑持ち帰る身だしなみ　秀峰
屑籠に辞表の下書き二三枚　博友
屑籠に百万円の忘れもの　春草
銀行の屑籠太子が出て来そう　木魚
屑繭を紬いだ母の紬織り　あき子
屑篭へ愚痴も一緒にもんで捨て　宵明
名曲を屑屋の歌と子が思い　どんたく

佳

屑籠の一生隅でかしこまり　凡太郎
屑拾いした日も自叙伝刷り上る　右近
屑屋にもやっぱり捨てる屑が出来　兼治郎
屑箱を漁る野良犬に陽が落ちる　春日
屑かごの人形悲しい目をしてる　洛酔

人

屑かごへ今日のニュースが捨ててある　洛酔

地

原子炉の屑を地球がもて余す　正敏

天

屑かごでほっとしている挑戦状　道子

軸

捨てられた屑それぞれにある履歴

立つ

水野　弘選

立腹を忘れ平和な凡夫婦　潔
虹立ちて憎しみ消えた通り雨　悠泉
さりげなく立てば彼女も目で答え　ゆう也
俗に言うやり手の方で口が立つ　弘朗
何かある女三人立ち話　テル
石仏浮き世黙して今日も立つ　洛酔
初孫へ両親無理に立たせる気　秀峰
立ち話まだ続いてる市場かご　冬子
やがて立つ燕の親子巣の狭さ　星斗
立ち上る気力を達磨に教えられ　優
青春の瞳の彼方虹が立つ　公一
栄転の名で立つ友の顔に皺　みつる
風呂帰りふと立ち止る虫の声　新一郎
すべり台象は一日立ったまま　枯梢
立てつづけ女の口に負かされる　松太朗
立ち話趣味の一つに教えられ　秀村
顔だけは立てて貰った年の功　倫子
立ち話結局嫁のことに触れ　凡太郎
孫立った話に靴を買って来る　泰子
達磨でも横になりたい時もある　三吉
虹の立つ日の不思議さに出会う　武水
立退きも素直に行かず三年目　喜洸
土光さん至難行革挫けずに　正之
独りだち出来て故里遠くなり　カズエ
虹へ立つ日はいつの日かいつの日か　道子
八月の木立ちで浴びる蟬時雨　里風
連れた子が欠伸している立話　登美也
よう立ったものだとダルマ見るコケシ　佳雲
遊学の子と立つ地球の裏表　寿美
やっと立つ我が子にでっかい夢がある　素身郎
わけあって立ってる座席譲られて　満津子
おいの条件反射で立ち上る　泰子
寸刻のゆとり立読み斜読み　多賀子
聞き上手まだ続いてる立話　実男
茶柱の立った朝の靴を履く　春日
坐っても立っても鏡に嘘がない　静歩
虹が立つ子等呼ぶ声のあわただし　秀子
バカンスも終り渚に風立ちぬ　文子

佳

巣立つ子へ親はおかめと鬼になる　規不風
茶柱が立つ一日を信じよう　刀水
頂点に立つと孤独が攻めて来る　ひで
直立で娘貰いに来た男　克枝
数秒は立てるのと電話孫のこと　美穂
立てる腹抱える腹もあってよし　本蔭棒

人

二回転見せてすっくと立つ若さ　右近

地

目くじらを立てて聞いてる反主流　本蔭棒

天

動けない立ったままです原爆展　達一郎

軸

湖に立つと詩人になってくる

「夜市川柳」募集

題　「喧嘩」　選者　西田柳宏子
（句箋に一句ずつ、三句以内）
締切　10月15日
投句先　〒593　堺市堀上緑町二—九—二
河内天笑方　堺川柳会

初歩教室

題 ― 灯 ―

本田恵二朗

受験の灯と同じあかりで母も縫い　刀水
灯の消えぬ窓へつき合う母の針　英子

同じ句材を二人の作家が描写するとかくの如く相成るものであることを証例してくれた。そこで私も三行目に参加してみようと、川柳脳味噌をあれこれと回転してみたが、遂に私の降参という結末となってしまった。

どちらでもお好きな方を買って下さい。お値段の方は買い手におまかせしますよと作家は言っているというと作家に叱られそうな気がしないでもない。

漁火を見つめ命の灯を見つめ　刀水
秋の灯を集めて夫婦の部屋にする　同
万灯籠万の願いが犇めいて　英子
不況風街のネオンも宵寝する　同

ほれぼれと味読させてもらった。佳吟だ。

灯りみなつけて贅沢した気分　忠広
一人酌むだけの灯りで落着ける　同

好感のもてる句が生れた。ご精進あれ。

戻る灯がある人の背がにくくなる　寿子
開け放つこころの窓に灯が点る　同
背なを追う甘え許さぬ灯がゆれる　同

快調な進撃振りである。個性が見えだした。

いい話仏に聞かすと灯が笑う　利義
（良い話告げる仏間の灯が笑う）
赤い灯に心もゆれぬ老いわびし　同
（紅い灯へゆれぬ心の老いを知る）
夜の途そこに見ゆ灯に届かざり　達一郎
（近く見え案外遠い夜道の灯）
仕事終え近づく家に灯の入りぬ　同
（今日終えて帰るわが家の灯へ急ぐ）
赤提灯くやし涙を呑んでくれ　かすみ
三世代住めば明るい灯がこぼれ　同
（三世代の灯が朗らかに洩れこぼれ）
ナイターの灯慕い来る甲虫　陟
（ナイターの灯に慕い寄る虫となり）
山小屋の灯のごと細く八十路生き　一止
（八十路とぼとぼ山小屋の灯にも似て）
爪の灯の財を赤い灯子がはたき　同
（爪に灯の財を紅灯へ子が捨てる）
灯を求め求めて今日も汗握る　柳右子
団欒の灯もえてパパに明日があり　同
（団欒の灯あり明るいあすがあり）
純情な虫を灯火でおびき寄せ　芳枝
（紅い灯が純情な虫狂わせる）
灯を涙で消せぬ寡婦の道　同
（寡婦あわれ涙で消せぬ灯をいだき）

ナイターの灯がつき鍵っ子ほっとする　公乃
門灯がひっそり深夜の夫待つ　同
（夫待つ門灯しょんぼり更けてゆく）
亡き母の灯今なお胸にもゆ　千子
（亡母の灯が胸でもえてる今宵また）
灯消せば走馬灯あすは娘の嫁く　同
（あす嫁く娘へ走馬灯が泣き笑う）
紅灯の巷縁ない暮し向き　昭治
（紅灯へ縁なく額の汗を拭く）
紅灯の巷知らぬが強く生き　同
（紅灯を知らぬ男が城を建て）
灯り消し目は冴え心ふさぐのみ　千代
（灯を消せば心の重さなおつのる）
それぞれの家に灯が入り世は平和　同
（家々に灯が入り平和な夜を創る）
灯の下で亡き両親と対話する　義美
過疎に泣く村にも盆の灯がともり　同
（盆来れば過疎の里にも灯がともり）
清流はここと呼んでる蛍の灯　やすお
（清流はここよ蛍の灯が招く）
灯が暗くちょっと踊ってみたくなる　同
（暗い灯が踊れ踊れとけしかける）
里帰り瀬戸の船旅灯がともる　山久
（船脚が里の灯ぐんぐん引き寄せる）
灯台の灯なつかしや灯がともる　同
（なつかしい灯台故郷の浜せまる）
三日目にやっと灯がつく災害地　勝美
防犯灯にぶいあかりにある安堵　同
（防犯灯のにぶい灯りに見守られ）

悲常口の文字だけ浮ぶビルの闇　露芳
灯は大の字だけの京の空
（京の空大の一字を灯で描き）　同
胸に灯をともす日もあり女坂　元江
（胸の灯を抱きしめ登る女坂）
暑い日も暮れて涼しい里灯り
（里の灯が今日の暑さをそっと呑む）　同
夜景の灯住宅ローンのこと忘れ　三五島
ネオンの灯下戸には怖いものに見え
（下戸よここは怖いぞと紅灯が言う）　同
門灯が点いてる家で道を聞き　保夫
宿直の夜はさびしいから点けておく
（宿直のさびしさ夜通し灯しとき）　同
灯が懺悔の背にゆれている　小雅子
追憶の中の灯亡母を抱く
（追憶の灯へなつかしい亡母招き）　同
灯を消して明日へ希望の夢ひろげ　芳水
（灯を消して希望の夢を暗に描く）
灯をともし山ほど願いかけてみる　同
（お灯明あげて山ほど願いかけ）
船守る灯が島の夜に生きている　兼治郎
（船守る灯がクルクルと生きて舞う）
お祭りの灯へぞろぞろと寄ってゆき　同
（祭りの灯浴衣浴衣をおびき寄せ）
灯をともす心はいつも弥陀の夫　房子
（弥陀の辺の夫がくれる心の灯）
曽孫来て茶の間にぎわう灯が明い　同
（曽孫が来て笑顔渦巻く茶の間の灯）
湯の町も喜怒哀楽の灯が点り　凡太郎
（山の湯で喜怒哀楽の灯がゆれる）
捨てに来た恋へ湖水の灯がゆらぎ　同
（捨てに来た恋を湖水の灯が嗤う）
負け犬にふるさとの灯がじんとくる　寿美
（ふるさとの灯が負け犬の目にしみる）
ローソクの灯で佳し照そう人の道　同
わが道をゆくシグナルは青ばかり　利美
誘惑の灯が呼んでいる回れ右　同
（紅い灯がウインクします目をつむる）
灯取り虫に似た若者の群れ集う　ふみ
（灯取虫みたいにつどう若い群れ）
足取りも元気出て来るわが家の灯　同
（足取りを軽うさせますわが家の灯）
生きているあかし灯の方へ寄っていく　三男
（生きているあかし灯を求め灯を求め）
灯を消して終戦の日を語り合う　同
（灯を消して終戦の日と対話する）
爪に灯を点す話はきらわれる　同
（爪に灯を点したようなお説教）
灯を消せばやはり淋しい過去となる　幸子
（灯を消せば淋しい過去が舞い戻る）
疲れなど見すまい吾が家の灯に向い　同
（疲れなど見せまいわが家の灯へ急ぐ）
お灯明またたけばまた悲しみが　同
（灯がまたたいて悲しみをつのらせる）
夜中迄灯消さぬ受験前　みつる
（受験子へ消灯時間はありません）
終列車赤い灯火が暗に消え　同
（終列車の尾灯が暗に吸い取られ）
酔顔に家の灯まぶし過ぎ　同
（酔顔へわが家の灯りまぶし過ぎ）
友情の絆を点すキャンプの灯　胡頽子
一と言の温み再起へ灯を点す　同
ライバルへファイトを燃やす受験の灯　同
（ライバルに勝つぞと燃える受験の灯）
命日の亡母だけの灯と決めて点け　柳五郎
終電車出て駅ひそと終夜灯　同
（終電車送った駅の孤独な灯）
ひとりっ娘嫁かせ二階灯もつかず　同
（嫁かせてからもうつかぬ二階の灯）

題―**我慢**―**10月20日締切**（12月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒711（ハガキで五句まで）　**本田恵二朗**

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■川柳白帆吟社では35周年記念大会を次の要領で開催。
日時・10月11日代休11時
場所・南部労政会館4F
宿題・裸婦・家・しなやか・温情・企て・先輩・うなずく・各3句
特別課題・ネクタイ、席題3題
会費　千円、発表誌記念品軽食呈賞　30位まで
投句　300円、〆切9月20日
品川区旗の台5・27・5
成田孤舟宛

■57年野口北羊句碑供養並むらさき会合同句会
日時・10月11日代休10時
会場・岐阜市古津、古津苑
宿題と選者
見直す　青木惜春選
眉代わり　浜口剛史選
引っぱる　保地桂水選
数える　加藤翠谷選
思うつぼ　中江一魚選
鵜呑み　井川清楽選
席題なし、各題2句、投句拝辞
会費　3千500円、懇親宴を含む
主催　岐阜川柳社
むらさき会

■細川聖夜句集
そして秋発刊記念
日時・10月24日(日)11時
会場・金沢シティホテル
宿題・ふるさと、軋む、闇、ペン、許す、いのち、坂、母
事前投句　秋、10月10日まで
会費　2千円、句集、記念品、昼食、大会記念号呈、投句拝辞
事前投句所　923-12石川県能美郡辰口町来丸　酒井路也方
主催　番傘加越能川柳社

■はちのへ川柳社創立50周年並小泉紫峰川柳句碑建立川柳大会
日時・10月10日(日)9時
会場・八戸パークホテル
市内吹上幸町2・14
句碑除幕式　午前10時より
宿題と選者（第1部）
五十年　渡辺　蓮夫選
秋思　去来川巨城選
女だから　藤島　茶六選
国宝　賀波沢黙六選
コメディアン　野村　圭佑選
沖　長谷川霜鳥選
泉　小泉　紫峰選
各題3句、各題別ハガキ大用紙に、住所氏名作品を書き9月1日必着
投句先031八戸市大字町組町5　豊巻つくし方
宿題（第2部）
年金・自動ドア・満ちる・スポーツ・地酒・姿
各題3句、選者は当日出席者の方に依頼
会費　5千円、記念品、昼食、発表誌、記念パーティー共
表彰　1部、2部総合点30位まで
主催　はちのへ川柳社

■柳都川柳社では第13回川上三太郎賞作家を発表された。
川上三太郎賞　松井文子
自動ドアの男女は迷路抜けたかに　ほか4句
準三太郎賞　荻原鹿声
結び目に積ったままの冬が在る　ほか4句

■川柳わつか吟社では56年度年間賞を発表された。
最優秀賞作品　望月三界子
子に残す家紋を汗で染め上げる
優秀作品　山川草苑
因襲の壁へ若さが錐を揉む

■構造社出版では「川柳全集」第1集に引続き、第2集・6巻を企画逐次出版する。10巻（藤島茶六）11巻（野村圭佑）12巻（西尾栞）13巻（渡辺蓮夫）14巻（三条東洋樹）15巻（礒野いさむ）各定価千五百円（送料200円）7月中旬11巻を発売する。〒101東京都千代田区西神田2−7−12構造社出版振替東京9−3911。
☎03−263−2816

尚同社の川柳綜合誌「川柳」はNo.25発売中、26号は8月中旬に刊行。

■昭和57年度県芸術祭参加福井県下川柳大会が10月3日（日）10時より武生市中央公民館で催される。題／声（右門）錆（省市）指（節子）隙（芳郎）縄（聖夜）仏（秀河）色（一舟）線（如仙）宴（路也）各題2句、会費千円（軽食呈）

■笠岡市制30周年記念川柳大会（主催笠岡市・共催川柳並木会）
日時・10月11日（祭）10時
場所・笠岡市労働福祉会館（笠岡西の浜）
兼題＝30年、誘致、ふれあい、竹喬館、米（こめ）
席題2題あり、各題3句
会費・千円（投句料三百円）
総合15位まで呈賞・投句は10月7日必着のこと。
投句先・〒714笠岡市笠岡笠岡市役所秘書広報課宛

■第11回四国番傘川柳大会
日時・10月3日(日)10時
会場・高松市民文化センタ

ー
宿題・窓・不安・許す・振
子・雇う・支店・世相
会費・千円、発表誌、記念
品呈
　主催　四国番傘川柳クラブ

■糸ぐるま秋の川柳大会
日時・10月31日(日)10時
会場・一宮市スポーツセン
ター
兼題と選者
　捉える　浜口　剛史選
肌ざわり　井川　紋弥選
オアシス　浅野　滋子選
陶酔　会田規世彦選
エスプリ　佐藤　青旗選
丸い　野口　初恵選
車　曽根　幸広選
線引き　中江　一魚選
含み笑い　丹羽　麦舟選
事前投句・無欲、
　氏田騒太郎選
席題なし、各題3句
特別企画・雑詠1句互選
全員互選、5位まで呈賞、
事前投句と共に10月10日〆
切り
会費・800円、賞、市長賞外
20位
投句・300円
491一宮市宮地2―2―27
氏田騒太郎方

■57年度芸術祭参加
第17回千葉県川柳大会
日時・10月17日(日)11時
会場・旭市市民会館3F
総武本線旭駅下車歩3分
宿題と選者
　自由吟　松沢　敏行選
駆け引き　河野十九人選
影　平井　吾風選
晴　飯田菜々子選
稔り　石橋　古南選
特別課題旭市の風物
　花沢　麦園選
席題2題、各3句詠
会費・千円、軽食、発表誌呈
賞・知事賞ほか
投句・300円、〆切9月30日
289-25 旭市ロの1397
白井菊花方、千葉県川柳大
会事務所宛
主催　千葉県
　千葉県川柳作家連盟

■第3回長野県民芸術祭
第20回須坂市民文化芸術祭
参加第36回長野県川柳大会
日時・10月17日(日)10時
会場・臥竜公園内須坂市文
化会館
宿題・昇る、池、古い、岩、
生れる、静、疑問
席題・3題、各2句
会費・千円、宴、昼食、発
表誌呈
賞・知事賞以下30位まで
連絡所須坂市塩野・西沢平
凡子方
　主催　長野県ほか

■日本川柳協会事務所は7月10日左記へ移転。
〒540大阪市南区谷町七丁目一―39新谷町第二ビル206号
☎06―768―2622。

▽同人・柳友消息△

▼前山北海氏（ホノルル）去る8月22日マウイ島へ出張の夜、心不全のため、クイン病院にて長逝された。謹悼。

▼板尾岳人氏（富田林市）の岳父中川正雄氏は八月九日早朝、肝臓ガンのため城東市民病院で逝去、合掌。告別式は十一日午前十一時から阿倍野区昭和町の自宅で営まれた。本社から西尾美与子副主幹夫人、児島与呂志、清水健司、小出智子、橘高薫風夫妻の諸氏がお見送りした。

▽句会案内△

■**菜の花句会**並びに**東大阪川柳同好会**は、ともに文化祭川柳大会のため、休会となります。

■**南大阪川柳会**
時・10月20日（水）夕6時
場所・高松会館（寺田町裏駅下車）
兼題＝マナー、密談、むくれる、めし。

■**駒つなぎ川柳会**
時・10月25日（月）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題＝弱虫、真ん中、やさしい、知恵。

■**南海川柳部**
時・10月21日（木）夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂
兼題＝話題、マナー、文化。

□□□□□□□ 新造語について

直原七面山

かつて若本多久志氏は、新造語〝生きざま〟について意見を述べられ、その中で〝余りにもむごたらしい言葉で、短詩文学の権威を傷つけるもの……〟と言っておられた。

ところが、これを読んだ柳友K君が〝氏は何故、こんなにまでも新造語を毛嫌いなさるのだろうか〟と私に尋ねた。

そこで私は「氏は一応〝新造語の全てを否定するものではないが……〟と断ってはおられるのですが、たまたま氏が、日頃からこよなく愛し、崇めておられる〝生きる〟と言う尊い言葉が（得たりとばかりに〝死にざま〟の反語のような姿で突然現われて来た）新参の〝生きざま〟と言う無国籍者によって、その尊厳さを傷つけられ、権威を侮辱され、蹂躙され続けていることへの反発から、止むに止まれず、ああ仰しゃったのではないだろうか。君も知ってのとおり、句にはいのちがある如く、句を構成している言葉にもまた、それなりのいのちがある。

では、〝生きざま〟とか〝熟年〟とか言う新造語にも、既成の言葉と同じように、いのちがあるかと言えばそうではあるまい。

なぜなら、新造語が永遠のいのちを保ち、幾百千年の後の世まで、使用され続けて行くと言う保証は何一つ無いのだし、その言葉はその時代時代の人々の身勝手な思いつき（気まぐれ）から生れて来た根無し草（麻疹のような流行語）なんだから。

さてそこで、新造語を使った名句が（仮りに）出来たとしよう。

その時句主は、この句を自分の句碑に（なんのためらいもなく）刻み込むであろうか。

（やがて日の移り変りとともに、うたかたの泡の如く、完全に此の世から消え去ってしまうであろう哀しい宿命を担った新造語から出来上っているその句を）

私は百人が百人、そんな愚かな行為は絶対にしないと思う。」

察するに大先輩若本多久志氏は、恐らくこれ以上深く、遠く、広く新造語について考究された揚句、若き多くの川柳家達が、雨後の筍の如く発生して来る新造語に振り回わされて、無益で無駄な作句努力を積み重ね、繰り返えすことの無いようにと言う温い思いやりから、敢て（一罰百裁の意味も含めて）あのような警鐘を打ち鳴らされたのではないだろうか。

反響呼んだ 「小説家の〝文学的理解力〟」

高名な小説家といえども如何に川柳への理解に乏しいか――小池章太郎氏が「川柳しなの」四月号に「小説家の〝文学的理解力〟」と題する一文を発表、これを評論家の谷沢永一氏（関西大学教授）が季刊「銀花」51号（57年9月30日発行）で〝署名のある紙礫―書物随筆〟の中にとり上げている、と石曽根民郎氏（松本市）から編集部へお便りを頂いた。以下、谷沢氏の随筆の一部を紹介する。

▽小島政二郎が『私の好きな川柳』（弥生書房）で解釈力の欠如した誤読ばかり並べて悦に入っているのを、呆れ果てた小池章太郎（「川柳しなの」四月）は仔細に訂正しつつ教えを垂れる。「わさびおろしに寒い袖口」に対して「〝わさびおろし〟の時は袖口が不思議に寒い」と感心するのは愚劣も甚だしく、「山葵卸しとは菖蒲革の鋸歯状の模様が山葵卸しに似たところから、菖蒲革の袴、またはそれをはく足軽・中間の異称」、「吹きさらしであるために見付番士の袖口の広さが寒々と見える」の意である。

▽「うれしい髪を行燈で結ひ」をヒネクリ尽くした上に「結婚が極った嬉しい髪」と解するのも勘違いの独断、「行燈―夜中の結髪―早晩の外出―芝居行き―女心の嬉しさ楽しさ、とパターンで」読むべきであり、（中略）名ある紙誌の書評でこういう愚書を推す例を何度も見かけた。どういうことなのだろう。

（以下略）

本社九月句会

会場　なにわ会館
七日㈫午後六時

番傘から西村芳川、志水浩一郎の両氏が出席下さった。近年、両社の交流がいよいよ盛んになってきたことは喜ばしいことである。多久志副理事長の急逝が司会者から報告され一同黙禱、ご冥福をお祈りする。
香川酔々氏のおはなしは仏さんがテーマ。漠然と仏さんと言ってるが、格からいくと一番上の如来（釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来、大日如来）が本当の仏、その下の菩薩はまだ仏になる修業中の身、更にその下に十二神将、いわゆる仏さんのガードマンがいる、という話から、それぞれの仏について例えば同じ太陽神でも大日如来とエホバの違いに東洋と西洋の差が見られる等、蘊蓄を披露される。仏を詠んだ川柳も沢山あると、幾つか紹介されたが、それを書くスペースがもうない。
初出席は前記、浩一郎氏の他、山下みつる（八尾市）と中西兼治郎（大阪市）の両氏。九月の月間賞は中川滋雀氏が獲得された。

（史好記）

（受付—与呂志・敏・重人）
（進行—柳宏子、記録—鎮彦・射月芳）

出席者—与呂志・儀一・和子・勝美・右近敏・潮花・千万子・芳川・天笑・千代三・月子・滋雀・寿美・あいき・英子・美智子・喜風・綾珠・吐来・小路・鬼遊・静歩・吸江・三十四・カズエ・薫風・みつ子・兼治郎・水客・茂美・雅風・白水・岳人・健司・紫香・太茂津・幸・三男・浩一郎・春江・はつ絵・古都路・美緒・泰子・栞・文秋・英壬子・重人・景子・楓楽・春蘭・武太・甘平・智子・頂留子・規不風・小雅子・酔々・勝晴・度・洋敏・蕉露・みつる・雀踊子・柳伸・冬葉・柳宏子・萬的・史好・寿子・涼一・射月芳・鎮彦・白兎・一二三・凡九郎・亜成

席題「支度」　**志水浩一郎選**

喜んでばかりいられぬ支度金　英子
鏡掛けおろし支度がやっとでき　酔々
帯ポンと叩いて支度出き上り　千代三
預金帳も母の情けの支度金　古都路
産着縫う日射しがとてもあたたかい　美智子
大根を輪切りに男支度する　白兎
嫁ぐ娘の支度に父がはしゃいでる　美智子
パスポートしっかりバッグに入れました　景子
あと三日また入れかえる旅カバン　柳伸
保険証も薬も入れた旅支度　天笑
初産の支度に里の母を呼び　紫香
支度して待てば電話で「遅くなる」　柳宏子
綱を編む声もめでたき支度部屋　涼一
鉢巻きをするといくさの支度でき　酔々
果し状へ男が白を白く着る　雀踊子
美容院へ行くにも化粧して出かけ　文秋
身支度は妻の好みになっている　鎮彦
服靴鞄中々きまらぬ妻の旅　吸江
二級酒に謀叛の支度溜めている　幸
ご近所へ見栄見てもらう嫁支度　兼治郎
死支度出来て男の顔になる　雀踊子
身支度の仮面を創っていく鏡　滋雀
旅支度終えて時計の捻子を捲く　吐来
旅支度すると西風吹いてくる　小雅子
身支度が終りお世話になりました　建司
逃げ支度すっかりできた防災日　武太
嫁入り支度へ父は会話を避けている　寿子
支度などいらんと下駄で連れだされ　度
外出の支度鏡へ一時間　三十四
出来たら貰う約束犬小屋用意する　萬的
母だけが右往左往をする支度　芳川
討入りの支度はそばを食べてから　酔々
逃げ支度うちの嫁はんしてないか　凡九郎
逃げ道を男は支度して探す　白兎
念入りな母の支度に隙がない　洋敏
左遷する支度グズグズ渉らぬ　千代三
支度部屋ピエロが化粧しています　静歩
身支度を整えうれしい使者にたつ　武太
支度金甘くなかったプロの水　甘平

母子手帳無事なうぶ声待つばかり　天笑
結婚の支度を急かす日の契り　浩一郎

席題「換える」　西村芳川選

あの時のつまずき人生書き換える　和子
張り換えた障子に夕陽沈むなり　岳人
変身の出来ぬ男の自尊心　雀踊子
イヤリング換えると相手も変わります　健司
商魂のスーパー手を換え品を換え　甘平
物々交換昭和史の中の一ページ　寿美
週刊誌とり換え夫婦の旅つづく　度
ペン先を換えて借用証を書く　幸
乗り換えて土産忘れた終電車　静歩
定年後余白を換える花造り　三十四
和解してカーテンの柄換えている　天笑
決算が済み張り換える回り椅子　岳人
談合の話をつめる席を換え　甘平
母と子の交換日記愛が満つ　寿美
バッサリと髪型換えて気を晴らし　英壬子
よろこびにドルもきっちり換えて旅　小路
入れ換えたフィルム期待するおんな　白兎
衣換え少し残暑を待っている　美緒
秋のスーツに着換えると虫の穴　千代三
建換えに消える明治の赤煉瓦　酔々
言い方を換えても意見食い違い　与呂志
役所だけモダンに換わりまだ田舎　紫香
水換えて欲しいと思う水中花　岳人
顔色を変えると男が負けになる　雀踊子
嫁さんを換える夢ならすこし見る　健司
ピッチャーへ情けはうつさずすぐ換える　涼一
ヒロインをわたしに置き換え昼ドラマ　楓楽
信用の店気前よく換えてくれ　文秋
カーテンを急に換えさす秋の風　智子
退院のそれから煙草の品をかえ　萬的
取り換えてやろうかと思う妻ある日　敏
花換えて水子地蔵にわびている　武太
ポスターを張りかえ駅に四季巡る　浩一郎
洋服に着換え山門出る和尚　酔々
あいさつに換えて流れる汗をふく　水客
換えられる程良い靴ははいてない　千代三
勤務先換えて人生賭けて見る　武太
酒癖が夫婦のヒューズ取り換える　吸江
取換えのきかぬ夫婦の大あくび　吸江
ジャンパーに着換えて美味いコップ酒　千代三
現金をたしかに換えた手の温み　芳川

兼題「騒ぐ」　河内天笑選

騒音から逃げて来たのに蝉時雨　あいき
花鋏鳴らすと騒ぐ花畑　度
秋かしら騒いだあとの自閉症　和子
豊漁の兆か水鳥騒ぐ朝　右近
群衆が騒ぐと天が深くなる　浩一郎
竹藪が騒いで風の主張見る　水客
司会者の耳に末席騒がしい　文秋
審判へ騒ぐ十人十色の目　幸
騒がせて原子力船港去る　酔々
カラオケの騒ぎの中でひとり飲む　鬼遊
騒がれてふたりの絆強くなる　浩一郎

57年本社句会全出席者（9月現在）

宮園射月芳・福本英子・北勝美・桑原喜風・山本規不風・高杉鬼遊・橘高薫風・清水健司・玉置重人・中川滋雀・那須鎮彦・長谷川春蘭・正本水客・香川酔々・野村太茂津・板尾岳人・藤田頂留子・小出智子・松原寿子・西出楓楽・金井文秋・阿萬萬的・斉藤三十四・児島与呂志・西田柳宏子・津守柳伸・松本涼一

胸騒ぎしたがと母の手紙来る　三男
種蒔いた本人騒ぎの外に居る　三男
胸騒ぎ血のこいさから逃げられぬ　雀踊子
騒がれる娘へ父の無表情　吐来
法律にうとく騒ぎの中にいる　浩一郎
騒がしい街の生活に慣れて老い　喜風
騒がない二階の娘等が気に掛り　小路
胸さわぎさせて電話は人違い　柳伸
本当の味方は騒いだりしない　吸江
野次馬が騒ぐとボヤになってくる　千代三
ありったけ騒いでみてもコップ酒　潮花
騒ぐだけ騒いだあとの大広間　勝晴
どんちゃん騒ぎの部屋で孤独なバラの花　智子
束の間を騒ぎおんなの更衣室　白兎
いつになく騒ぐ夫に疑問持つ　みつる
五分前の馬券俄かに血が騒ぐ　亜成
ばか騒ぎして虚しさを倍にする　寿子

ひと騒動あったと見えぬ夫婦仲　静馬
下戸曰く一ぺん呑んで騒ぎたい　敏
黒幕はちょっともお騒ぎなさいません　凡九郎
一枚が騒ぐと重い果し状　岳人
馬鹿騒ぎ済んで虚しい風に逢う　小雅子
仁王さんの前では騒がないように　智子
黒か白なんにも騒ぐことはない　健司
ゴキブリに騒ぎ男に騒がない　鬼遊
騒ぎから抜けて女房ののり茶漬　小路
馬鹿騒ぎ猫が大きな背伸びする　雀踊子
辺境の騒ぎへ無事な月が出る　水客
騒がしい女が去ぬと淋しいな　酔々
傷心を囲む枯葉が騒ぐなり　天笑

兼題「助手」　高杉鬼遊選

プラモデルときどき助手に使われる　早苗
インターンの巣立ちよろこぶ古参助手　静馬
美容院助手の夫の客が増え　白水
助手という弱身汚職の鞄もつ　潮花
助手席にいるのは妻でない若さ　千代三
助手に気を使うて地獄耳を持つ　与呂志
助手席の妻はよく食べよく眠る　春江
たよりない助手やが美人という長所　洋敏
助手ひとり研究室の灯が消えず　重人
リハビリへ生きるも死ぬも助手次第　昭子
助手席の社長は手帖くっている　栞
発表に主役の助手の名が見えず　吐来
髭生やす助手を先生気に入らず　紫香
助手席にどっかと座っている絆　智子
肩書の背を押す助手の手と思う　水客
家内工業妻が社長に見えてくる　茂美
助手席で不吉なことを考える　幸
デジタルな助手で私を操る気　太茂津
知らぬ間に助手いっさいをさいはいす　三十四
大物の助手えらそうな口をきき　文秋
助手ある日金の卵から醒める　吐来
美しい助手のいる部屋何時も春　あき子
家の助手少うし文句が多過ぎる　吸江
責任を取るのはいつも助手のほう　健司
助手が来て先生らしく見えてくる　柳伸
地図にない道を助手席知っている　浩一郎
あくびしてもいかんなと思う助手席　茂美
五年目の助手で虫歯だけ治す　千代三
考古学の助手黙々と土を掘る　静歩
庭いじりホットパンツが助手になる　景子
ロボットの助手定年を捨われる　滋雀
免停という助手が乗っている　静歩
院長の痛い所にさわる助手　勝晴
助手席の交通ルールうるさすぎ　天笑
兄ちゃんが助手にされてるとんぼ取り　泰子
うず巻が助手の頭に二つある　英子
師へ届く歳暮を助手の判で受け　一二三
急ブレーキそれから助手席喋らない　太茂津
助手席の男も保険掛けている　浩一郎
ところてん押すのをじっと見てる助手　度
勲章をもらわぬ助手のおでん酒　鬼遊

兼題「求める」　西田柳宏子選

第六回

寝屋川市民川柳大会

日時　**十一月三日㈬**　文化の日
正午開場・一時半開会
会場　寝屋川市立総合センター
4F図書自習室
（京阪寝屋川駅より京阪バス三番乗場にて総センター前下車）
柳話　「川柳のたのしさ」　橘高薫風氏
席題　当日一題　久保田寿界選
兼題　煙　住田英比古選
野心　中尾藻介選
狙う　定金冬二選
洗髪　伊藤入仙選
孫　黒川紫香選
出句〆切・各題二句　一時半〆切
会費　千円（呈・入選句報・記念品）
懇親宴　会費・三千円（当日受付ます）
賞　各題共・秀句に選者直筆色紙他
主催　寝屋川市民文化祭実行委員会
後援　川柳ねやがわ・川柳娯老会

安楽死求めてぽっくり寺の列　どんたく
般若心経に明日を求めている祈り　緑良
手の届く星かも知れず背伸びする　枯梢
日曜は今日飲む酒の職求め　昭子
職求む給料高額楽なとこ　太茂津
私から求めましたと憚からず　兼治郎
求婚の言葉妻は忘れない　美緒
求めても相手も都合のあることで　泰子
昼を受皿にして愛求む　射月芳
美味求真メザシがあれば十分だ　史好
快活に活きて求めるもの持たず　規不風
求人と求職歯車なぜ合わぬ　寿美
ポンコツを求人欄に訓えられ　吐来
辞書引いて愛を求める文を書く　敏
求めてもあかん財布が軽すぎる　重人
何を求めてマンガ読んでいるのだろう　幸
何かを求めて吊皮にぶら下り　天笑
ひょっとこが求めおかめは酒買いに　酔々
求むべきものがないまま暴走す　天笑
求めてた好条件で詐欺にあい　泰子
なあ君よ求める資格おますんか　凡九郎
求めない父に厳しい愛がある　吐来
良縁を求め結婚詐欺に遇う　浩一郎
大陸の孤児が求める血の絆　甘平
お互いに少し求めてみる絆　月子
むしのよい求めにげんこ一つやる　度
仏心を求める修羅の絵の中に　雀踊子
失望が恐ろしいから求めない　はつ絵
思春期の求めに危険が待ち受ける　滋雀
自分には何も求めず小そう生き　楓楽
親と子の求めるものが開きすぎ　美智子
救済を求めて地球回り出し　三男
何を求めるでもなく女旅が好き　萬的
人嫌い求道の旅まだ続く　水客
何求めるでもなし彼岸の亀の池　萬的
鍵っ子に母は病気の方がいい　柳伸
一石の波紋求めて胃にたまる　水客
新聞の求人欄も読んで病み　兼治郎
見返りを求め卑屈になっている　楓楽
代償を求められると風冷える　はつ絵
求めれば求める程に視界呆け　柳宏子

兼題「本心」　黒川紫香選

顔色を変えて本心のぞかせる　早苗
本心を言わせてみたい朧月　枯梢
本心をみんな言うたら空になる　幸一
遺産分けもう本心を隠さない　どんたく
一人いる時本心の函開ける　あき子
本心を吐けば崩れる砂の城　楓楽
焦らされてうかと本心覗かせる　寿美
てのひらを返し本心こぼれ出る　はつ絵
能面の裏に本心渦を巻き　英壬子
本心が素直に言えぬもどかしさ　綾珠
大臣が本心言えば首になり　泰子
本心を明かすと喋る鳩時計　浩一郎
にぎりこぶしの中で本心戒める　幸
本心を座り直して聞いている　智子
本心を露骨に出して嫌われる　勝晴
本心を映す鏡を拭いている　鎮彦
抱きあげた猫に本心言うてみる　水客
うっかりと本心言うたかくれんぼ　芳川
美しい嘘で本心飾られる　滋雀
どこ迄が本音かヒゲを抜いている　千代三
本心にかえった朝の鉄格子　みつる
本心が犇めいている縄のれん　英子
善人の言い訳本心かと思う　与呂志
例えばの中で本心えぐられる　天笑
本心を日記にだけは書いておき　兼治郎
そこまで来たという本心の紙包　栞
味方にもまだ本心は打ち明けず　文秋
きれい事の中で本心かれてゆく　寿子
本心はみんなお金が欲しいなり　史好
本心は堪忍袋に入れてある　楓楽
本心と違う手紙になりそうで　鬼遊
本心を告げる帽子を深くする　規不風
本心はビデオテープに入れてある　カズエ
本心は玉虫色にしてじらす　千代三
鉄窓に囲われ本心くずさない　三十四
本心に帰る刃は右の手に　涼一
脇役にまわって本心見えてくる　水客
本心を見たいと思う赤電話　健司
本心は言うまい枕うらがえす　美智子
善人の目は本心のまま語る　滋雀
本心を出すと別れの詩になる　紫香

★

〈訂正〉9月号27頁長野文庫氏の句、学習熱は**塾**の誤りでした。

各地柳壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。
（整理・香川酔々）

川柳翠洋会　**山根いつを報**

丸とバツわが人生を狂わせる　風　童
丸本橋子を負う思案の帯を解く　いつを
お悔みに着流しで来たひとり者　兼治郎
火と炎えた頃なつかしむ旅の宿　仙吉郎
病院の隅から静かに扇風機　あき子
ままごとのお客になった丸い膝　みつ子
灯の川となり精霊はどこへゆく　景　子
扇風機父の記憶がまわってる　酔　々
齢知命己の這入る丸を書く　薫　風

勝山双葉川柳会　**小出　智子報**

父の道通ると父がよく見える　楓　楽
夏草も遠慮している通り道　洋　子
テスト中無性にピアノ弾きとうなり　妙　子
そのたびに出発点にした日記　秋　子
法師蟬夏の日記を書き終える　智慧子
ピアノだけ目立っています応接間　ふ　み
決心も三日坊主の日記帳　ハル子
親の愛育児日記にあふれてる　千　里
嫁ぐ朝ひそかに燃している日記　頂留子
ピアノ弾く娘は母の夢を知り　好　子
ほころびを繕うように日記書く　いくの
素通りするつもりを犬が呼びとめる　田鶴子
披露宴ピアノも弾けると付け加え　節　子
お稽古の数ほど出ないピアニスト　千寿子
日記から史実の嘘を暴かれる　和　子
立看板が通せんぼする昼の街　静　子
大器晩成損ではなかった回り道　寿　美
登り坂がしばらく続く日記帖　智　子

川柳しんぐう　**川上　渓水報**

肩書きを外すと何んにもない力　大　輪
ついてないだけで無かった力の差　利　凡
海山の抱容力は母のもの　里　美
力ずくでは通れない人の道　義　廉
巣立つ日へ力溜めてる羽繕い　三千代
過保護の子虫歯だらけの顔で泣き　渓　水
駄々こねて泣く子へ巧い母の嘘　喜　酔
警官も客も怖くて泣く迷子　豊　太
一年生やっと泣く子の守が出来　三　男
よく泣く子だった晴着へ瞳がうるむ　幸
泣く子には勝てず寒夜の子守唄　弘　生
割り当てへ無言で攻める棒グラフ　十　郎
割り当ての寄付に亡夫の名をかばう　雀踊子
割り当ての席に美人が座ってる　紫　香
割り勘へがめつい奴の飲みっぷり　武　雄
遺産割り当て少ないと言う不孝者　平　城
七くせを知られて妻へ小さくいる　富　子
七ツ屋の苦労も知らぬ子に育て　勇　太
七転び八起きへ掛ける汗を積む　まさ子
美人だがへんな七くせ持っている　澄　孝

京都塔の会　**松川　杜的報**

花愛でて今日の安らぎもろて来る　芳　子
一と時も女は惜しむ指を持つ　花代子
民宿に笑いが残る終い風呂　和　友
扇風機ゆうるく回す齢になり　求　芽
やりきれぬ思い日記に長く書く　美　穂
なぐさめる言葉も男用意する　水　客
耳打ちをされて代打はボックスへ　遊　香
藤波のときにむらさきときに白　笛　珠
泣きにきた海辺で波に悟される　明　代
磯釣りへここは油断がならぬ波　飛　鳥
打水に猫しぶしぶ場所を変え　俊　三
打ち水へ単車のヤングが軽く避け　白渓子
打ち水にこぼれるものの影動く　紅　陽
打ち水に訪う人もなき寓に住む　白　李
打ち水の一線わだかまり未だ解けず　杜　的
水打って客へ涼しい庭にする　潮　花
打ち水をしてたら声をかけられる　紫　香

川柳たけはら　**森井　菁居報**

ぜったいにやくそくやぶれぬおとこのこ　小一　方　昭
じいちゃんにころされるのにはえが来る　小三　亜貴子
よく見るとじゃがいものひょうきんさ　小五　仁　昭
クラス一めざすとしんどいお勉強　中一　紀
Tシャツに着替えて本気になる予習　高一　愛
控えおれ言わぬばかりの多数決　静　水
お恵みの雨にくっきり茄子の色　房　子
ケルン積む愛は崩れてはならじ　笑　子
これも明日これも明日もにする疲れ　蘭　幸
赤旗は決して振らぬ蟻の群れ　節　夫
根性が褪せると恐い丸木橋　菁　居
かけ引でない空梅雨のうらみ節　鈍　舟
二歳の瞳スイカ大きい方をとる　比呂子
洗ってる弁当箱よ夫の掌よ　令　子

一晩で充電できず昼寝する　秀水
欠点へきつい刃を向けてくる　貞子
昨日とは違ったことを海は言う　一路
米寿なお生きる限りの血が騒ぐ　シゲヨ
こう何もないとわたしの彩があせ　浄美
妻不在昼寝の吾子を見て飽かず　白狐
原爆忌反核不戦の地鳴り聴く　のばら

倉吉川柳会　奥谷弘朗報

北風に還らぬ千島咆哮す　独歩
ゆきずりの美人のような山桜　菩句
やり手でも何処か隙間に風が吹く　碧水
オイル切れゆっくり膝から這い上る　御前
一刻を天女となりて五月富士　律子
父の日ってどんな日父が答えかね　宗則
夕立が暑さの弛み引きしめる　秋人
データを整え意見強く押す　天雀
月末の度に橋頭堡が崩れ　石花菜
停まってはならぬ明日へのペダル踏む　おさむ
ゆっくりと縺れた糸を解きほぐし　千秋
自画像を鏡に写し老いて知る　伊之蔵
今日はよく喋る夫で怪しまれ　柳風
家建てる的に夫婦の歩が揃い　しづ江
分身と思う活字を抱いて寝る　秋女
檀家だけ頼って居れぬ寺事情　紫泉
掌を合せぽっくり寺が見えてくる　観洋
打吹を桜とつつじに仕立て上げ　笑王
どろ水を飲んでも鯉というかまえ　弘朗

川柳高知　川竹松風報

今日蟻に臨時休みの雨が降る　三吉
花好きの妻に聞える花の私語　広風
脳細胞日ごとに消えるとはさみし　竹萌

お遍路で売れない店が混んでくる　つぎお
愛の糸切っても未練ついてくる　菊野
無為な日燃える夕陽に叱られる　冬木
紅白に分けると闘志わいてくる　康子
人生の節目だろうか骨が鳴り　節子
紙上にものらぬ事故での後遺症　岩男
待たされることを覚悟の文庫本　春枝
若き妻カラフルに脱ぐみだれ籠　登舟
御好意に甘えて御礼を強いられる　弘生
石橋を叩きつづけている余生　草風
かずら橋落人の愚痴聞えそう　松風

菜の花句会　高杉鬼遊報

反核へ花を咲かせる夾竹桃　勝美
大阪市役所こわされて行く淋しさよ　綾珠
幽霊の役でおぼえたアイシャドー　儀一
散ることを知らず夾竹桃の夏　雅風
免停は古川橋で舟を漕ぐ　不二夫
保険金もらって幽霊旅に立ち　春蘭
眉をかく仕事に別れ布団干す　健司
大空襲の日も夾竹桃が咲いていた　蕉露
夜の眉ひけば羽化する夜の蝶　柳宏子
望郷の幽霊が哭く北の島　茂雄
夏休み終って金魚忘れられ　みつる
幽霊の子孫に親不孝者がいる　射月芳
眉描いて人間砂漠に生きている　酔々
北浜の夢が崩れて風になる　雀踊子
幽霊がびっくりしそうな安普請　与呂志
能面の眉に妬心が少しある　弥生
帰省客弁天埠頭に盆がくる　度
幽霊が西瓜食べてる楽屋裏　頂留子
眉と眉よせたら知恵が湧きますか　凡九郎

大丸で泣かされて来た戦争展　柳伸
皺くちゃの銭でヌードの切符買う　寿馬
夏の恋実らぬ白い夾竹桃　シマ子
銅像の眉は西陽をはね返す　栞
幽霊の幅だけ網戸あけておく　鬼遊

駒つなぎ川柳会　里小路報

小ぬか雨男は傘を持たずゆく　潔
未来図はロボットが画く青写真　射月芳
サーカスの象が見ているミニバイク　度
一匹の蚊にも仲よく二人起き　小路
張り込みの刑事と知らず蚊がうなる　宏子
一匹の蚊を追いかけるキンチョール　健司
大事な血ことわりもせず蚊が盗む　美乙女
デボチンを叩かせ逃げてゆく藪蚊　千代三
キンチョール位に負けぬ蚊になろう　恒明
あばら骨たたいて俺にまかせとけ　頂留子
あばら骨書こうかおもちゃの兵隊に　酔々
筋肉とは別傷を持ってるあばら骨　凡九郎
肋骨の間を縫って聴診器　眉水
じいちゃんの戦場かけたあばら骨　柳右子
気の抜けた余生が見えるあばら骨　憲祐
あばら骨ガンと闘う父黙す　涼一
あばら骨すまぬ不幸の目をそらす　一二三
創業の苦労を秘めたあばら骨　重人
あばら骨飢餓におののく国がある　史好
湯上りのビールが好きなあばら骨　恭太
あばら骨案外金を持っている　恵美子
あばら骨見えても丈夫な人も居り　綾珠
老残や恋の火を消すあばら骨　鬼遊
地球の歴史喋る恐龍のあばら骨　雀踊子
ハンストももう限界のあばら骨　信治

戦争のいたみは孤児のあばら骨　雅風
飢えている国の子供のあばら骨　文秋
清貧のあばらに妻の愚痴ささる　アキラ
あばら骨扶養家族が五人いる　富子
愛嬌をふり撒くあばら骨ダンス　規不風

南大阪川柳会　中川　滋雀報

薄情な企業と思うたこの足　度
落ちぶれて皆薄情に見えてくる　あいき
薄情なほうがよかった保証印　健司
薄情も殺生も酒に負けただけ　春蘭
薄情な話を聞いているオーム　浩一郎
久し振りへ父母ひとまわり枯れている　楓楽
久しぶり敷居の高い義理がある　雀踊子
久々の対面女はよくしゃべる　頂留子
平凡な余生が咲かす菊の花　善信
平凡な国民に成りたい髭殿下　蘭
平凡の中の非凡を母に見る　弘生
平々凡々取柄と言えば人がよい　善紫
平凡の中で幸せ気づかない　柳伸
あの人の欲しいと思う温い部屋　鎮彦
ほしがらぬ顔でこっそり買っている　久子
一〇〇点がほしいと絵馬に書きそえる　千梢
安心が欲しくて判コを貰てくる　滋雀
久々の出会いに粋な雨が降り　儀一
夫の負担になってはならぬ鏡掛け　智子
抜擢をされて負担が胃にかかる　文秋
話上手に乗せられていた負担　恒明
子に負担かけてる親のエゴもある　勝美
屑篭に家計の負担捨ててある　節子
愛される負担は重いほど嬉し　千代三
お互いが負担になって岐路が見え　洋子

割勘で飲んで負担は気にならず　綾珠
平凡な道でよかった定年譜　重人
平凡になろうと思うバラの朱　美幸

うみなり川柳会　小林由多香報

溺愛の家に人材背を向け　笑王
海に溺れ泳げる海が好きになり　雄人
パチンコに溺れて高いつけが来る　舟宏
ほどほどに溺れさせない母の愛　一止
寡婦だって傍惚れします溺れます　芳泉
繁栄の街で一円貨が溺れ　葉士人
半年もつづかぬ日記くり返し　正
七枚目剝げばカレンダー夏の色　由多香
カレンダー半分やせて来た暑さ　熊生
しっかりと小男でかい夢に生き　吟月
玉子焼き孫はジャンボを見つけ出し　とみ枝
ジャンボ機のニュース異国の子を案じ　華子
ジャンボすぎて鼓動に愛が伝わらぬ　大漁
千金の夢を破った風車　静夫

川柳大阪　西岡　洛酔報

空梅雨へ日まわりだけが背伸びする　ひろ子
有罪になってもシラを切る度胸　君枝
校倉にシルクロードの影を見る　敏
勇退の暮らしに触れぬ鳩時計　九平
一人寝の女王へ賊が忍び入り　みつる
一人寝をいらいらさせて猫の恋　雅巣
蒸しタオルホッと一息ティータイム　いさむ
むしタオル男の髭も丸くなる　道子
豊満な胸にタオルが小さすぎ　よし子
好天に短気も今日は機嫌良し　秀峰
酒飲まぬ男の出世不思議がる　三十四
素敵なる女やっぱり絵空事　洛酔

第29回　八尾市文化祭

市民川柳大会

と　き　**昭和57年10月17日(日)正午開場**
ところ　**八尾市商工会議所3階大ホール**
（近鉄大阪線八尾駅下車南三百m　八尾市役所前）
おはなし　「暮しに生かす易」　山本殷煌氏
題と選者
（席題・当日発表）　山本　翠公選
「猫」　田頭　良子選
「とんぼ」　香川　酔々選
「潮」　小出　智子選
「狙う」　岩本雀踊子選
「米(こめ)」　定金　冬二選
「日曜」　西尾　栞選
会　費　千円（呈作品集・鉢植花）
各題2句・締切午後1時半
懇親宴　三千円（当日受付）
主催　八尾市・八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援　八尾菜の花句会

排気ガス柳黙ってゆれるだけ　重人
裏切った日の味噌汁が辛過ぎる　与呂志
夕焼けのこんな小径もアスファルト　本蔭棒
吊皮の届かぬところに居るラッシュ　笑風
一人で歩けぬ余生へ夫婦傘　喜酔
定年へ妻とコンビの遍路旅　金太
一言が嫌味になって義理の仲　酔花
嫌味言う姑の背中に蝉しぐれ　胡蝶
一人寝の広き布団に妻匂う　だるま
一人寝の女人には言えぬ過去　秀夫
一人寝をハエ一匹が邪魔をする　鉄心
痴話喧嘩すねて一人寝朝を待つ　明男

川柳わかやま　**堀端三男報**

悠々と雑草で居る自尊心　豊太
煩悩のレールに終着駅がない　武雄
いのちの限りふんわり踊るシャボン玉　寿子
尊敬の女は母のほかになし　雀踊子
雑草で思慕の届かぬ位置に居る　幸
雑草の絆を温め合うグラス　緑良
雑草でよし青空へ胸を張る　光代
雑草の可憐花屋の人気もの　あつむ
ひと粒の種雑草のなかで燃え　忠雄
海紅樹咲く頃きっと帰る駅　太茂津
人生の終着駅は独りぼち　白光子
どの駅に降りたらめぐり逢えますか　克子
決心がにぶる都会の広い駅　英子
踊りたしあの世は釈迦の掌　天彦
絵の餅に踊らされていた迂闊　紀久子
夫の手の中で踊っていた平和　千寿子
鳩時計少女は踊ってみたくなり　登志代
踊らせた舌をしまっている仮面　裕美
踊ってもはねても妻が手綱持つ　稚代
踊らされ続けて停年まで勤め　萬的
子離れのおんな謀反を考える　秀雄
秘境の湯女の数に追い出され　庄平
ハンカチが女を演じきっている　善太
さりげなく女衣裳を値ぶみする　正博
盲目の女の愛がひからびる　きみ
柔肌に激しき女の血が透ける　和子
骨抜きにされても行きたい女護ヶ島　勇太
目のすみに女は女捕らえてる　紀美女
素直さで女不器量包んでる　三千代
見せたいの見せたくないの夏おんな　凡九郎
妻と母女の貌が遠ざかり　桂子

川柳ささやま　**河原みのる報**

土こねるだけ伝統口にせず　ひか平
伝統に挑む涙の甲子園　エキオ
玉三郎歌舞伎を守る咽喉仏　百合子
底辺にある伝統の底力　可住
浄土へは欠席届出して置き　テル
欠席の仮病ホンマに痛うなり　みのる
欠席の抗議に自民数で勝ち　素水
欠席の添えがきに満つ師のぬくみ　ゆきお
得意芸チャンス待ってる胸の内　米朝
本番が来れば得意の歌も出ず　房子
口切れば得意になって喋りだし　くにの
控え目な微笑得意の技を持ち　靖子
逆流の水の心が読めずいる　文平
温い手で水引が結ばれる　和子
久々の螢に苦い水ばかり　宗珠

虹川柳倶楽部　**新岡回天子報**

原爆ヒヤリング雨一様にたたきつけ　実

佳句地10選（前月号から）

河原みのる選

古米食べまた新米を古米にし　正
目が笑う心が笑う人に会い　康子
歳ですね軽く言われて不満もつ　玉子
セールスのかけひき何からほめようか　孤舟
八十年黴もつかずに生きている　東雲
黙って座ってはるだけなのに苦手　恒明
人間の中味を犬に疑われ　儀一
うちの人規格品です平和です　独仙
何んとなく倖せ落ちる陽がきれい　〆女
衛星も交えて今宵星まつり　倫子

お役所を仕切って立ってる法のドア　四郎
転勤に辞令帳簿がうろたえる　正敏
菩提寺の石父が住み母が住み　久仁於
四季咲きのバラよ火遊び思うまじ　千代
気まぐれな便りに律儀な返事来る　千花
祝日は大正明治が国旗立て　一竿
出足早や涼風起こす千代の富士　素石
悠々自適自家菜園のお守り役　義美
金の鈴あげても晴れてほしい雨　虹汀
夏休み早起体操親つかれ　回天子

山長川柳会　**那須鎮彦報**

夏まつり心も踊る太鼓の音　美和子
夏まつり子供と遊ぶ花火かな　幸太郎
ヒョットコも祭ばやしに浮れ出る　和子

母ちゃんの自転車さがす夏まつり　文範
カセットでコンコンチキチコンチキチ　守
夏まつり子供をダシに鰻釣り　伍一
内職の時間も欲しい夏まつり　真寿恵
お祭の太鼓の音でうかれ酒　朝夫
俄雨走る姿も夏まつり　昇
夏まつり皆んな達者で西瓜割る　安弘
作業衣を着たまま急ぐ夏まつり　一美
夏まつり揃いのゆかた家族連れ　司
おみこしをかついだ後のサロンパス　恵子
太鼓打ち喜寿も張り切る村祭り　嘉道
ゆかた着てはやる心の祭りかな　貞子
夏まつり桔梗の色が冴えてくる　鎮彦

川柳化粧櫓　植村客遊子報

勝っても負けても阪神にある人気　紅月
年金のペアが楽しい老夫婦　秋月
深呼吸してからドアをノックする　岳詩
男おんなそれぞれ四季の色をもち　葉香
水仙の花を見つめて宵がくる　奮水
日めくりをめくる母にもある予定　実男
達磨の目しかと丸めて祝い酒　越山
杉並木揃って皆んな天目指す　永楽
この鏡古くなったかしわが出来　大鷹
補聴器も眼鏡も要らぬ古稀という　白李
我が城と思えば広い四畳半　三青
公害で歯の抜けた様な並木道　遊香
乾杯の左遷のビール乾しにくい　多津
開票日人気の割に出てこない　客遊子

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

東北の匂いただようこけし展　弥山人
徒らが逃げると正直叱られる　滋啓
叱られてさっぱりしたと言う生徒　綾珠
叱らない婦警免許の点に触れ　喜風
叱られる予感でかえる遠回り　喜一郎
詫びている奥で心が背いてる　千代子
詫びる役いつも下っ端使われる　みつる
母が叱ると毛あなが立ってくる　鎮彦
物陰で叱る情けはもっている　湖風
叱るのもよし悪し出来の悪い子で　眉水
突然に詫びの言葉も見い出せず　三十四
水子地蔵に何詫びるのか若い母　右近
腕白が三人います詫び上手　柳伸
詫びに来た勇気へボール投げてやる　孤舟
心から詫びると歯車回り出す　度
今日も又忘れる手順習ってる　光水
生きて行く為に忘れた顔もする　勝
すぐに酔う女ですでに忘れてる　悦郎
サーカスを忘れないのは何故だろう　作二郎

わかあゆ川柳会　小砂白汀報

ロボットは賃上げも無し明日があり　清夢
ゴツゴツとかがめば膝の骨の鳴る　恒星
水浴びるときのカラスは愛らしい　志保
長生きの秘訣さっぱりこだわらぬ　敏明
雨蛙化身と見せて碑をのぼり　秀穂
こだわらぬ箸へ姑の独り言　輝水
体面にこだわりすぎた鯉のぼり　民子
こだわるを誇りに思うのか野党　ヒデ子
雨がえる当てにしたほど雨降らず　ふみ
こだわらぬ性に生まれて軽く生き　鈴江
切り札もあるがしらけた笑い顔　はるみ
切り札を出す医者の眼疑わず　清泉
こだわりを捨てれば広い海へ出る　美栄
こだわりをとかねばだんだん傷がうむ　歳栄
切り札が袋叩きにされてくる　白汀

川柳塔まつえ　恒松叮紅報

濁流が汗で築いた城を呑む　舞吉
一日の稼ぎの札も汗に濡れ　正朗
太陽と語れる汗は塩辛い　孤呂二
鐘つき堂手枕で聞く蟬の声　巡歩
手枕に妻が座布団折ってくる　登美也
這い這いが出来て手枕留守になり　与根一
ベテランの磯釣り波の恐さ知る　愚童
島の波流人の悲話を乗せてくる　孝
その先に秋秘めている土用波　逓児
夏休み若さはハワイで波に乗る　寿美子
比べると弟の意地が謀反する　鳳人
見比べて良い方を取る形見分け　多賀子
にせ物と比べ本物下手に見え　由郎
優越感めがねの奥で見比べる　芳子
渇水の蛇口黄金と思う水　昭二
断水に蛇口淋しい音をたて　ちかし
一番に蛇口をひねる母の朝　きみえ
蛇口にも思い出兵舎の洗濯場　叮紅

城北川柳会　川口弘生報

風邪の子へ亡母につながる粥を炊く　はつ絵
時代劇あわだち草の中で殺陣　新一郎
台風の朝みの虫も落ちていた　道子
群集の中に娘を置いてみる　美恵
侵略をごまかす手品見破られ　倫子
教科書で弱い日本が叩かれる　悟郎
予約までして入れ揚げる宝くじ　頼一
薪能現世にするネオンの灯　静子
湖に来て人生を考える　弘

褒められているばっかりは淋しくて　満津子
考えぬ葦になってる大昼寝　弘　生
保険勧誘迷う心に欲がある　千　子
子の便りごぶさたしたと詫びている　すみれ
舶来品も置くことにした三代目　婦美子
今年またお盆のお布施跳ね上り　正　之
くり言の多き日々なり病馴れ　捷　一
月鉾がしっとり雨に濡れる町　ふ　み
才女にもふとのぞかせた少女趣味　志　保
やめられぬ煙草へ妻のガン談義　登志代
炎天克服孫のドレスが縫い上り　千世子
夕涼み浴衣姿になってみる　秀　村
終電車愛と戦さは終らない　達一郎
庭師入り狭い庭場が広くなり　炉　斉
罪状をハカリに掛ける裁判所　喜　洸
孤独から逃れるコーヒー熱く入れ　テルミ
綿菓子に郷愁があり子と囲む　茂　樹
星屑の中にきらめく母の顔　公　一
裁ち屑に女の性がつきまとい　静　歩
ジーパンも河内音頭に馴染む盆　右　近
手盆でと心安さの茶をよばれ　松太朗
ヒロインの少女はいつも薄命か　左　春
ノーモアヒロシマ母を継ぐ少女　笑　風
鍵っ子の少女は人形のママになる　利　義
ガラス拭く寮の少女の国なまり　三十四
大安日孫の娘が嫁に立ち　午　郎
やがて立つ燕の親子巣の狭さ　星　斗

岸和田川柳会　植山　武助報

心機一転中断された日記書く　せつ子
夏休み生徒が塾をかけ回り　希久志
合掌で今日一日の幕を閉じ　ひ　で
鳴呼平和南の島へ焼きにゆき　甘　平
惨敗はしても荒木を追うレンズ　浪速子
甲子園出るだけでよい優勝旗　加代子
お互いの主義にはふれず握手する　操　子
待合室待つポーズある面白さ　さよ子
やれやれと淋しさで待つ定退日　武　助
待つ事に馴れ痩せ細る毛糸玉　射月芳
二重橋参賀の人の波続く　こ　う
盛衰を問わず語らぬ二重橋　白光子
実行はどうあれ老後のプラン出来　冨志子
不言実行それがとり得の父も老い　春　栄

川柳後楽　井上柳五郎報

ぜいたくな連れとの旅で気をつかい　柳五郎
家計簿はぜいたくすなと言っており　健　一
長生きもぜいたくの内と言い聞かせ　定　平
横文字のメニューぜいたくかと思い　佐加恵
父の日の贅沢特級酒をはずみ　葵　丘
ぜいたくはきれいな空と赤トンボ　鮫虎狼
補修費のかさむ我が家に白い蟻　隆
修理して夫婦は歯車軋ませず　胡　風
修理して生かして使う老いの知恵　玉　水
修繕の出来ぬ地球に核を貯め　草　風
踊る娘の浴衣素足を引立てる　宏　大
盆踊り素足の下駄が弾んでる　青　銅
踊る輪議員バッチも来て入り　博　友
盆踊り美女が混って輪を拡げ　番　茶
盆踊り過疎の里にも灯が点り　元　一
土用うなぎ効いて夏やせ吹きとばし　恒　洋
夏やせに遠慮をしない蚊がとまり　哲　郎
夏やせを知らぬ男の汗光り　照　路
年金の範囲でぜいたくする暮し　秋　月

尼崎いくしま川柳会　黒川　紫香報

任期無期主婦は会計つとめあげ　貞　子
会計に馬が大きな穴をあけ　保　蔵
会計が尻拭いする祝賀会　玉　子
足袋はいて何もなかったことにする　かず子
さまざまな女の影をもつ毛抜　浩
嘘つきへ鬼の毛抜が借りられる　鬼　遊
お土産をいつも一軒忘れて来　幸　子
黄門のにらむところに謎があり　す　え
謎めいた言葉女をよろめかせ　近　子
最後まで残った謎は解かずおく　晃　美
墓掃除愚痴も供えて香をたき　中　石
ぼやき言課長の耳に入っている　美代子
愚痴言わぬ事にしました白い菊　静　江
雨だれにつまらぬ愚痴を笑われる　美智子
ぐちもいれ水掛不動へ掌を合す　晴　子
保険勧誘迷う心に欲がある　千　子
郵便受見覚えの字に血がさわぐ　春　子
からつゆのしっぺ返しが恐ろしい　美紀子
ハンガーへ今日の疲れをブラ下げる　かすみ
布団干す役引き受けて元部長　年　代
家近くなるといつもの歩に戻る　ハツエ
離縁状男が貰う阿呆らしさ　紫　香
板前のきれいな指に酢が匂う　郁　栄
この町は凡人向きで山がない　伊三郎
ああ夫婦かわりばんこに一つの荷　牧　郎

西宮北口川柳会　杉浦婦美子報

待つことに慣れて口笛うまくなる　美智子
書籍コーナーをめぐるとゆたかな風になる　ハツエ
カニの穴満ちてくる潮と知っている　水　客
つぶやいた声をカラスにさらわれる　かず子

野良猫の拾われてから怠けぐせ　婦美子
北窓も開けると風が通り出す　弘生
仕舞湯の流れる音を聴く去就　三笑子
むしタオル男の髭が丸くなる　道子
玩具一つ買わぬ孫だが好きと言う　隆子
見送った亡姑の歳をも越している　はつ絵
無花実のまだ青きまま秋を聞く　光子
濁池に睡蓮咲けば清く見え　いわゑ
銀髪に汗と涙の艶がある　みつ子
コップ酒コップは涙を知っている　〆女
コップ酒明日へ架けた虹の橋　半歩
乾杯のコップは既に持つ敵意　右近
妻の愚痴亭主梯子のコップ酒　千世子
計量のコップ眼鏡で確かめる　恵
コップで乾杯合わす瞳に過去がある　千子
店開き粗品のコップで客を呼び　きよ子
しこりまだ朝のコップに悔い沈む　冬子
コップとは思えぬ音色美しく　君子
コップ酒竹輪でぐびぐびやる車中　静馬
思い出といっしょにコップ飛び散りぬ　幽香
きっぱりと別れて独りの海をもつ　郁栄
海鳴りの彼方に第二芸術論　伊升
青春をオールにたくし海を蹴る　かすみ
沖縄のきれいな海にある歴史　貞子
八月の海に捧げる鎮魂歌　春江
海知らぬ老女と話す飛騨の奥　紫香

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

玄海を知らぬハマチが太り過ぎ　登
特種をもう早耳にささやかれ　百合子
夕焼けが空と海とを一つにし　幸坊
自信無くささやきみょうに引っかかる　一扇
サングラス買って他人になっている　雄峰
キリストは大海原を一人行く　聖地
海鳴りへ都会のチリを落とす宿　博泉
背中越し孫のささやき手を休め　千夢
サングラス外せば只の顔になる　亜成
北浜で風の囁き聞き捨てぬ　形水
ジェット機が通ったあとのビル黙る　入仙

川柳ねやがわ　高田　博泉報

屑籠の底で光っているコトバ　よしひろ
真実をそっと見ていた地蔵さま　淳朗
風呂帰り女の隙へ犬が吠え　シマ子
真実の話は先に出る涙　覚然坊
君の罪でないという声待っている　弘生
日記には晴とだけ書く今日の謎　真砂
躇らわずふところ開く母となり　かすみ
平凡な幸せ女捨てたがり　てまり
思惑で汗を知らない社が稼ぐ　清香
思惑が自分の逃げ道まで塞ぎ　一途
古道具に見る真実の黒光り　琴音
星影のワルツが好きでまだひとり　冬葉
真実は影の花なり世の乱れ　静風
思惑も一つに溶けて慕い合い　亜也子
思惑へ名刺一枚置いておく　野生
ふところに冷たくよぎる過去の影　亜成
初吼を残して虎は千里征く　光夫
真実をはにわ必死に訴える　度
種の無い葡萄は明日の夢持たず　右近
真実を口にするから嘘になり　亜鈍
思惑があって質素な服で会い　あいき
ふところの小銭がきれいな嘘を言う　静歩
ふところを打診する目が甘えてる　三千子
真実を語れず猫の目が変る　眉水
アリバイへ真実だけで立ち向い　小路
思惑の終着駅で落す影　一念
子には子の思惑あって巣を離れ　紫香
税金は納めるものか取るものか　鬼遊
真実のほど雑草の花白し　薫風

富田林富柳会　藤田　泰子報

物分り良すぎて罪な子に育ち　恒子
坂道の途中で罪になるリンゴ　岳人
言い訳はすればするほど怪しまれ　勇
横槍へ宙に浮いてる口車　喜酔
罪一つかくす女のもつれ糸　澄子
終電の夫の言い訳上手すぎ　伸子
雪月花遊びを知らぬ頼りなさ　美佐子
遊び好き終着駅はこわいもの　正信
遊び下手郵便貯金が趣味と言う　美緒
銀の匙ママごと遊びも疲れ気味　泰子
言い訳に梅田の地下で買う土産　栄一郎
言い訳という風呂敷で包む嘘　浜ッ子
言い訳の始終を聞いたかき氷　青影子
集団で罪の意識がぼけている　美房
罪のない顔で反抗する背中　花梢
あれこれと罪の指紋がつく聖書　優
混血へ神は色盲かも知れぬ　弘生
出所した男の罪は風になる　きぬ
御無沙汰の言い訳文字で詫びておく　美津子
庇い合い言い訳をしたうぶな頃　恒義
遊ぶこと妻も知ってる苦笑い　庄太郎
節くれた十指を花と遊ばせる　美代
鬼の目に涙で罪は罪とする　与呂志
少年A話せば罪のない笑顔　節子

若本多久志追悼11月句会

日時 十一月八日(月) 午後六時
会場 なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19—12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

おはなし 川村好郎

兼題
「僧」 児島与呂志選
「気がかり」 笠原吸江選
「タクシー」 大坂形水選
「人生」 西尾栞選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

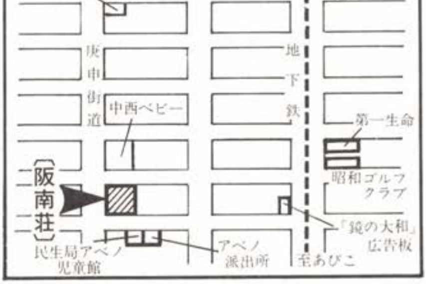
川柳塔社

12月の兼題 「来年」「同時」「減る」「意地」

本社10月句会(二賞発表と同人総会)の会場

「阪南荘」案内図

地下鉄—昭和町下車歩3分
市バス—地下鉄昭和町停下車歩3分



●募　集●

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)
「決断」大塚豊生選
「くすり」行天千代選
「大根」飛田好一選

★原稿募集=四百字詰原稿用紙に四枚以内。楷書で新かなづかいにしてください。

一月号発表(11月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)
「ゆとり」児島与呂志選
「絵」納　糸葉選
「傷」谷真風選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

10月の常任理事会は1日 5時から

定価 五百円(送料50円)
半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)
昭和五十七年九月二十五日印刷
昭和五十七年十月一日発行
編集兼発行人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話(〇六)六二九—六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

編集後記

▽八月の末に近い土曜日、河内長野の山の中に閉じ込められて研修に汗を流していた寺尾俊平さんを迎え、宗右衛門町の大嶌で出所祝いなるものをした。私の他に冬二・藻介の面面。

☆四人ながら動物好きであることが分かる。俊平のペットのペルシャ猫の名は、ネロとお染、ネロは今はこの世にいない。お染は俊平の大切なチェコ製の美しい灰皿でしか水を飲まないので、俊平はみすぼらしい方で用を足している。冬二の家の猫の名前はネコだ。ネコ、ネコと呼ぶのは冬二らしい。性別を聞きもらす。藻介のマルチーズはチャコ。藻介とは共白髪である。

☆若本多久志追悼号の編集中、前山北海氏の訃報が入る。こんなことでも書かねばやり切れない。（薫）

☆一三夫氏が亡くなられて二年になる。以来塔誌の編集に関係した訳だから二年になる。光陰矢のごとしである。30年K出版社に入社46年退社するまで、殆んど編集畑を歩いて来た。最も数学書が大部分で、100ページくらいの薄物もあったが300冊ほど編集したと思う。

☆編集者にとって、一番つらいのは、本になって誤植が見つかることである。校正の段階では見過ごしたのが本になると妙に気がつく。案外小さなことは校正中に気がつくのだが、見出しなどの 大きな 部 分である。これが盲点である。校正恐るべしといわれる所以であろう。

☆岩波書店のものは誤植が少ないといわれる。そこで全書の数学関係のものを調べてみたことがある。やはり少ないが誤植は見つかった。誤植のあるページは、においがするのである。（酔）

▼嫌煙権が話題になって久しい。駅にも禁煙タイムがあり、煙草が自由に喫えた列車も次第に窮屈になって来た。談笑の席も喫わない人の多い時はやはり気を遣う。医学的にも百害あって一利なしの判決である。煙草の好きな私は時に罪人のような気分にさせられる。では止めたらどうかと人に言われると止める気がしない。意地ではなく自由を侵害されたような気分にさせられる。政府が売っているからと妙な理屈を言いたくない。嫌煙権と誰が言い出したか知らないが、世の中には声を大に叫ばねばならない事が沢山ある。自動車の排気ガス、飛行機の騒音はどうか。何だか弱い者いじめをされている様だ。論争の向うで専売公社がほくそ笑んでいる。（き）

☆街にすず風が立ちタコ焼がなつかしい季節になった。たかがタコ焼という勿れ。ピンはれっきとした老舗から、キリはそんじょそこらの屋台まで千差万別、中には美味を求める遠路はるばる自家用車を駆って買いに来る、そんな店もある

☆昔はタコの代りにイカだったり歯の立たぬ怪しげな具も混じっていたりしたものだが、今はどうだろう。タコ焼にも時代は反映する

☆メリケン粉をとかして中に具を入れ、表うら引っくり返して焼くだけ、至極簡単に見えて、これが意外とむつかしい。大阪ミナミにお客めいめい自分で焼く店があるが素人はなかなかうまくいかないのである。

☆何事にせよ、それを商売とし、他人様のサイフから大事なおたからを頂戴するのは大変なことなのだ。（史）

肉体疲労時のVB_1（ビタミン）補給に——
アリナミンA
アリナミンA25の効能＝肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB_1補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
タケダ
武田薬品工業株式会社　〒541 大阪市東区道修町2-27

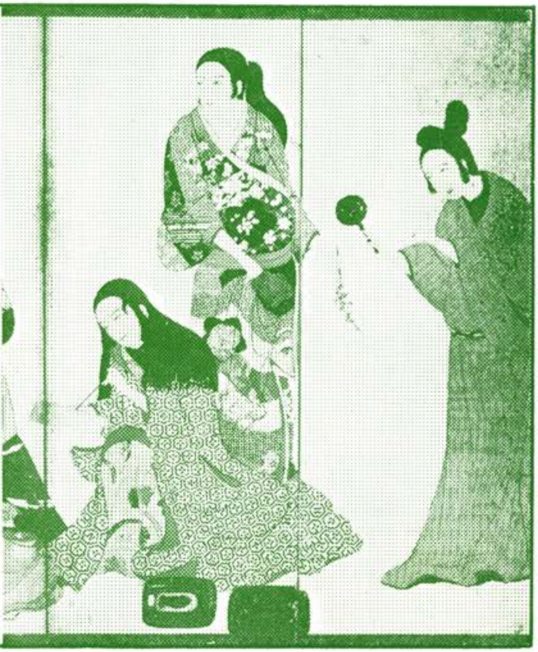
ご進物に重宝な
近鉄の商品券
★500円から50,000円まで各種ございます
先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利なご贈答品です　ご進物には
近鉄の商品券をどうぞ
近鉄百貨店
アベノ店(06)624-1111 / 上本町店(06)779-1231 / 奈良店(0742)33-1111

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十七年九月二十五日 印刷
昭和五十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六六五号 川柳塔 十月号
定価 五百円（送料五十円）

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ

豚饅（ぶたまん）・焼餃子（やきぎょうざ）
焼売（しゅうまい）・叉焼饅（ちゃあしゅうまん）

大阪・なんば
551 HORAI
蓬莱
TEL (641) 0551

《支店・出張店》
なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店
ミナミ 地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店（アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店）

雑誌 05703-10